



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第186集

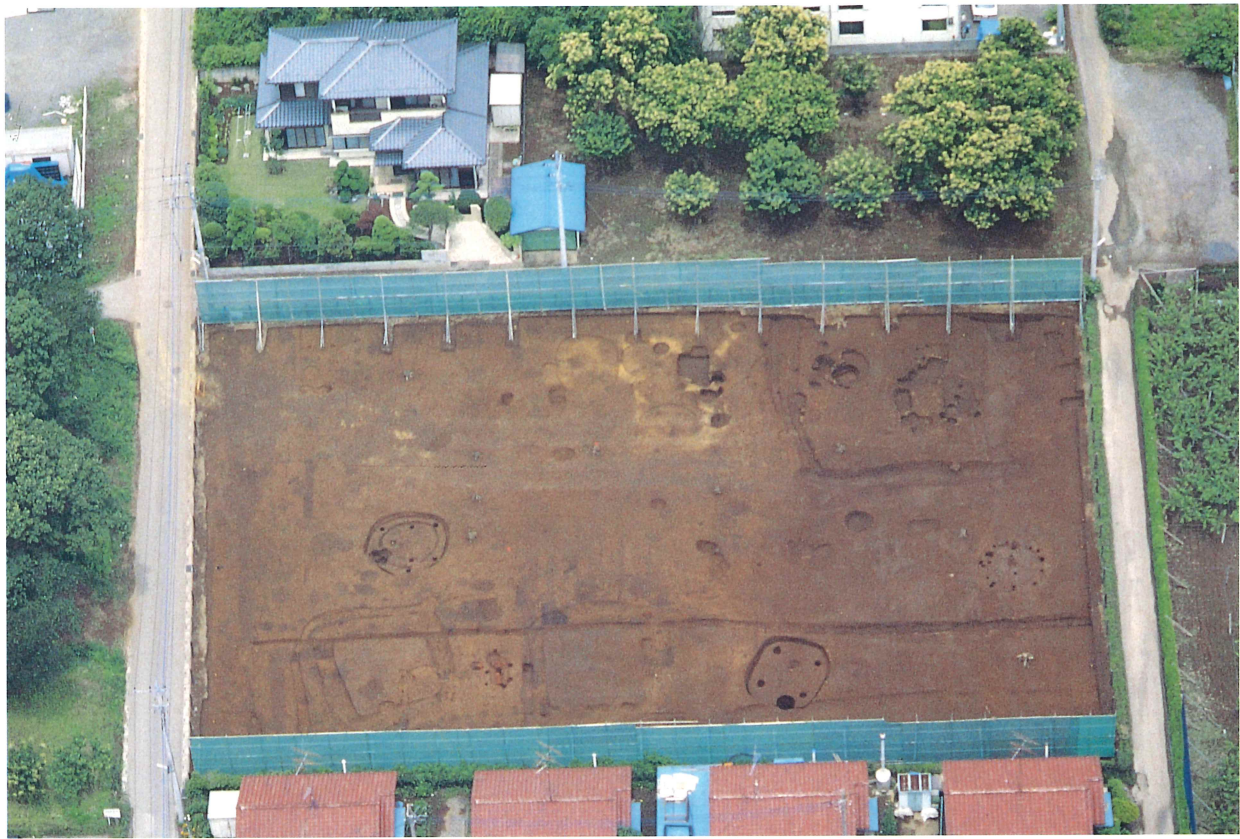
上尾市

東町二丁目遺跡

県営住宅上尾東町団地関係
埋蔵文化財発掘調査報告

1997

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



遺跡全景



10(a)号住居跡



1号住居跡 炉体土器



10(b)号住居跡 炉体土器



10号住居跡 土器



8号住居跡 土器



1号竖穴状遺構 陶器

序

首都圏の一翼を担う埼玉県では、急激な都市化と人口増加に伴い、多様化する県民の住宅需要に対応し、居住水準及び住環境水準の一層の向上を図るため、総合的な住宅・土地対策を推進し、計画的な住宅供給の促進を図っております。

このたび、上尾市東町二丁目に建設することになりました県営住宅上尾東町団地は、良質な住宅の供給により、生活の安定と福祉の向上及び県民の居住水準の改善を図るべく、安心して暮らせる町づくりの一貫として計画されたものです。

ところで、上尾市周辺には多くの埋蔵文化財が残っておりますが、東町団地建設予定地においても、埋蔵文化財の所在が確認されおりました。そこで、関係機関が慎重に協議を重ねました結果、当事業団が発掘調査を実施し、その記録を保存することになりました。

発掘調査の結果、縄文時代中期の住居跡や土壙、東関東の特徴をもつ土器、古墳時代前期の方形周溝墓、

中世の遺構や遺物など、この地域の歴史を考えるうえで、貴重な資料が見つっております。

本書は、これらの資料をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護及び普及・啓発、学術研究の基礎資料、教育機関の参考資料として広くご活用いただけることを願ってやみません。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県住宅都市部住宅建設課、上尾市教育委員会並びに地元関係者各位に深く感謝申し上げます。

平成9年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、上尾市に所在する東町二丁目遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
東町二丁目遺跡（AZMT2TM）
上尾市東町二丁目1538-1番地
平成7年6月9日付け教文第2-42号
3. 発掘調査は、県営住宅上尾東町団地建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、浜野美代子、山川守男（現 赤見台中学校）が担当し、平成7年4月1日から平成7年6月30日まで実施した。整理報告書作成事業は浜野が担当し、平成8年10月1日から平成9年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、航空写真は株式会社パスコに委託した。遺物の巻頭カラー写真、土器展開写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は、浜野、山川が行い、遺物の写真撮影は、大屋道則、浜野が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は浜野が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-2・V-2を山川が行い、それ以外は浜野が行った。
8. 本書の編集は、浜野があたった。
9. 本書にかかる資料は平成9年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）
赤石光資 小宮山克巳 上尾市教育委員会

凡例

1. 遺構全体図のX・Y座標による表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. 縮尺は遺構図、遺物出土状況図を1：60、1：30で示し、縄文土器実測図を1：4、拓影図を1：3、土師器、中世陶器を1：4、石器を1：3で示した。例外については挿図中に示した。
3. 全体図等に示す遺構の略号は以下の通りである。
SJ=住居跡 SK=土壙 SR=方形周溝墓
SD=溝 SX=その他の遺構
4. 遺構の名称は原則として調査時の名称を使用した。遺構名称を変更をしたものは、以下の通りである。
SX1=1号焼土土壙 SX2=1号集合土壙
SX3=2号集合土壙 SX4=3号集合土壙
SX5=1号竪穴状遺構
5. 以下の挿図は、各々の範囲を網掛けで示した。
遺構平面図 — 焼土
縄文土器 — 赤色塗彩部分
中世陶器 — 赤色塗彩部分
青磁破片 — 施釉の厚み

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 調査の概要	1	(1) 方形周溝墓	59
1 調査に至る経過	1	(2) グリッド出土の遺物	62
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	3 中世・近世	63
3 発掘調査・整理・報告書刊行事業の組織	3	(1) 竪穴状遺構	63
II 立地と環境	4	(2) 集合土壌	64
III 遺跡の概要	8	(3) 焼土土壌	66
IV 遺構と遺物	10	(4) 土壌	66
1 縄文時代	10	(5) 井戸跡	72
(1) 概略	10	(6) 溝	72
(2) 住居跡	10	(7) 中世・近世の遺物	75
(3) 土壌	45	V 結語	79
(4) グリッド出土の遺物	51	1 縄文時代の遺構と遺物	79
2 古墳時代	59	2 方形周溝墓	86

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第9図 1号住居跡出土遺物(2)	14
第2図 周辺の遺跡	5	第10図 2号住居跡	15
第3図 遺跡位置図	7	第11図 2号住居跡遺物分布図・柱穴断面図・ 炉跡	16
第4図 遺構全体図	8	第12図 2号住居跡出土遺物(1)	17
第5図 基本土層図	9	第13図 2号住居跡出土遺物(2)	18
第6図 1号住居跡	11	第14図 3号・4号住居跡	19
第7図 1号住居跡遺物分布図	12	第15図 3号・4号住居跡出土遺物	20
第8図 1号住居跡出土遺物(1)	13		

第16図	5号住居跡	21	第50図	25号・26号・34号・35号・36号・ 37号土壙	50
第17図	5号住居跡出土遺物	21	第51図	19号・22号・23号・24号・25号・26号・ 35号・36号土壙出土遺物	51
第18図	6号住居跡	22	第52図	グリッド出土遺物(1)	52
第19図	6号住居跡出土遺物	22	第53図	グリッド出土遺物(2)	53
第20図	7号住居跡	23	第54図	グリッド出土遺物(3)	55
第21図	7号住居跡出土遺物	23	第55図	グリッド出土遺物(4)	56
第22図	8号住居跡	24	第56図	グリッド出土遺物(5)	58
第23図	8号住居跡出土遺物(1)	25	第57図	1号方形周溝墓	59
第24図	8号住居跡出土遺物(2)	26	第58図	2号方形周溝墓	60
第25図	8号住居跡出土遺物(3)	27	第59図	3号方形周溝墓	61
第26図	9号住居跡	28	第60図	方形周溝墓出土遺物	62
第27図	9号住居跡出土遺物	28	第61図	石製模造品	62
第28図	10(a)号住居跡(1)	30	第62図	1号竪穴状遺構出土遺物	63
第29図	10(a)号住居跡(2)	31	第63図	1号竪穴状遺構・9号土壙	63
第30図	10(b)号住居跡	32	第64図	1号・2号集合土壙	65
第31図	10(a)号住居跡炉跡	33	第65図	3号集合土壙	66
第32図	10(b)号住居跡炉跡	33	第66図	1号焼土土壙・41号土壙	67
第33図	10号住居跡遺物分布図	34	第67図	中世・近世の土壙(1)	68
第34図	10号住居跡出土遺物(1)	35	第68図	中世・近世の土壙(2)	69
第35図	10号住居跡出土遺物(2)	36	第69図	中世・近世の土壙(3)	70
第36図	10号住居跡出土遺物(3)	37	第70図	1号・2号井戸	72
第37図	11号住居跡	39	第71図	1号・2号・3号・6号・7号・8号・ 9号溝	73
第38図	11号・12号住居跡出土遺物	39	第72図	4号・5号溝	74
第39図	12号住居跡	40	第73図	青磁片	75
第40図	13号住居跡	41	第74図	中世・近世の遺物(1)	76
第41図	13号住居跡出土遺物	42	第75図	中世・近世の遺物(2)	77
第42図	14号住居跡	43	第76図	古銭	78
第43図	14号住居跡出土遺物	44	第77図	東町二丁目遺跡の中期中葉の土器(1)	82
第44図	21号土壙出土遺物	45	第78図	東町二丁目遺跡の中期中葉の土器(2)	83
第45図	21号土壙	45	第79図	大宮台地の方形周溝墓分布	87
第46図	24号土壙	46	第80図	芝川流域の遺跡分布	88
第47図	33号土壙	47			
第48図	33号土壙出土遺物	47			
第49図	6号・7号・8号・15号・19号・20号・ 22号・23号土壙	48			

図版目次

- 図版1 遺跡全景
- 図版2 遺跡近景
- 図版3 遺跡近景 基本土層
- 図版4 第1号住居跡
第1号住居跡 炉跡
- 図版5 第2号住居跡
第3号・4号住居跡
- 図版6 第5号住居跡
第6号住居跡
- 図版7 第7号住居跡
第8号住居跡
- 図版8 第9号住居跡
第10(a)号住居跡
- 図版9 第10(b)号住居跡
第10(a)号住居跡 炉跡
- 図版10 第10(b)号住居跡 炉跡
第10(b)号住居跡 炉体土器出土状況
- 図版11 第10(b)号住居跡 炉体土器
第11号住居跡
- 図版12 第12号住居跡
第13号住居跡
- 図版13 第14号住居跡
第21号土壙
- 図版14 第24号土壙
第33号土壙
- 図版15 6・7号・19号・20・21号・23号・
24・25・26号・34号・35・36・
37号土壙
D-3G 土器集中
- 図版16 第1号方形周溝墓
第2号方形周溝墓
- 図版17 第3号方形周溝墓
第1号竪穴状遺構・第9号土壙
- 図版18 第1号・2号集合土壙
第3号集合土壙
- 図版19 第1号焼土土壙・第41号土壙
第4号・5号・17・18号・28号土壙
- 図版20 第29号土壙 第1号井戸
第3号溝 第4号・5号溝
- 図版21 第1号・2号・8号住居跡出土土器
- 図版22 第10号住居跡出土土器 展開写真
- 図版23 第10号住居跡出土土器
- 図版24 第10号住居跡出土土器
第21号土壙出土土器
第33号土壙出土土器
- 図版25 第1号住居跡出土土器
- 図版26 第2号住居跡出土土器
- 図版27 第3号・4号・5号・6号・7号住居跡
出土土器
第8号・9号住居跡出土土器
- 図版28 第10号住居跡出土土器
- 図版29 第10号住居跡出土土器
第12号・13号住居跡出土土器
- 図版30 第14号住居跡出土土器
第21号・33号土壙出土土器
- 図版31 第19号・22号・23号・24号・25号
・26号・35号・36号土壙出土土器
グリッド出土土器
- 図版32 グリッド出土土器
- 図版33 グリッド出土土器
- 図版34 グリッド出土土器
- 図版35 打製石斧 磨製石斧
- 図版36 石皿・磨石
石鏃 小型磨製石斧
スクレイパー
石製模造品
- 図版37 方形周溝墓出土土師器
中世陶器片 青磁破片
近世陶器片 焙烙
砥石 古銭

I 調査の概要

1 調査に至る経過

埼玉県は人口増加の傾向が著しく、今後も都市化の進展が予想される。そのため、埼玉県では「環境優先・生活重視」そして「埼玉の新しい92（くに）づくり」を基本理念として、総合的な住宅・土地政策を進め、計画的な住宅供給の促進を図っている。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、こうした各種開発事業に対応するため、開発部局と事前協議を行い、文化財保護と開発事業との調整を進めているところである。

県営住宅上尾東町団地建設事業にかかる埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、埼玉県住宅都市部住宅建設課長より埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課長あて、平成6年10月21日付け住建第953号で照会があった。これに対し文化財保護課では現地の確認調査を行い、その結果をもとに、平成6年12月28日付け教文第899号「埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」で、住宅建設課長あて、次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

事業地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所在する。

遺跡名	東町二丁目遺跡
種別	散布地
時代	縄文
所在地	上尾市東町二丁目地内

2 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむをえず現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条3の規定に基づき文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成7年4月1日から平成7年6月30日の期間で発掘調査を実施することで協議が整い、その旨を関係各機関に通知した。

発掘調査に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3、第1項の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは同法57条第1項の規定に基づく発掘調査届が提出され、発掘調査が実施された。

なお、調査届に対する指示通知番号は、次の通りである。

平成7年6月9日付け 教文第2-42号

(文化財保護課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成7年4月1日から6月30日までの3か月間にわたり東町二丁目遺跡の発掘調査を実施した。

4月上旬 現地に於いて、県住宅都市部住宅建設課担当者と当事業団担当者が、調査及び防塵対策などについて打ち合わせを行う。

現地は住宅地の中にあるため、表土の掘削に先立ち、調査区の北側及び南側に防塵ネットの設置工事を行う。その後、重機による表土の掘削と、現場の仮設事務所設置工事を開始する。現場事務所用地及び排土置き場は、調査区の北側に隣接する県住宅供給公社の所有地を使用して良いということになる。また、これらに並行して補助員の募集を行う。

4月中旬 現場事務所の工事がほぼ完了し、発掘器材を搬入する。4月14日から補助員を動員し、表土掘削と並行して遺構の確認調査に入る。表土の掘削も終了する。調査区は東側に緩やかに傾斜しており、表土の深さは東側で約40cm、西側では約15cmほどになる。

4月下旬 防塵対策のため、排土の整地を行う。事務所の工事も完了する。

5月上旬 引き続き遺構の確認調査を行う。縄文時代中期の遺物が散布しており、住居跡も数軒確認できた。遺跡の基準点測量及び、方眼杭の設置を行う。

5月中旬 遺構の確認調査と並行して遺構精査に入る。調査区の南西寄りからは、古墳時代前期の方形周溝墓が3基検出された。縄文時代の住居跡は、最終的に14軒確認された。

5月下旬 遺構の確認作業は終了し、全員が遺構精査に入る。調査区の東半分は、近世以降の溝や現代の耕作によるトレンチ状の畝で遺構がかなり壊されていた。また、調査区の6割以上が林であったため、木の根による攪乱も多く見られた。

遺構の精査と並行して平面図の作成に入る。

6月上旬 遺構の精査をほぼ終了。平面図の作成と航空写真撮影のための清掃に入る。雨天が多く作業の

能率が落ちたが、6月8日に航空写真撮影を実施する。

6月中旬 平面図の作成をほぼ終了。各遺構の写真撮影を行う。旧石器時代の確認のためにテストピットを設定し掘削するが、今回の調査区では確認できなかった。

6月下旬 平面図、基本土層図などの記録をすべて終了する。写真撮影も終了。発掘調査の全行程が終了する。発掘調査の器材等を搬出し、6月29日から現場事務所の撤去作業を行う。

整理作業

平成8年10月1日から平成9年3月31日までの6か月間にわたり、報告書作成を実施した。

10月 出土遺物の注記・接合作業を行う。これと並行して発掘調査時に作成した図面及び遺構写真の整理を行い、遺構の第二原図の作成に入る。

11月 遺物の接合及び復元作業と並行して遺物の実測図作成に入る。遺構の版組を行い、トレースに取りかかる。遺物の分類がほぼ終了し、一部拓本取りを開始する。

12月 引き続き遺構のトレースと遺物の拓本取りを行う。土器の復元作業が終了し、口絵写真・展開写真・完形土器の個別写真撮影を行う。遺構図及び遺物実測図のトレースが終了する。

1月 遺物の拓本取りが終了。版組を行う。遺物の俯瞰写真撮影をする。これと並行して報告書の割付作業に入り、一部原稿執筆に入る。

2月 原稿執筆及び写真図版の作成をする。割付作業をほぼ終了する。原図及び遺物写真ネガの整理を行う。版下の最終チェックをする。原稿執筆終了。入稿する。

3月 遺物及び原図、写真ネガ等の記録類の整理を行い、保管場所に移動する。入稿後校正作業を行い、平成9年3月に報告書を刊行した。

3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成7年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 吉川 國男
 常務理事 兼 管理部 新井 秀直
 兼 調査部 理 小川 良祐

管理部

庶務課長 及川 孝之
 主任 市川 有三
 主任 長滝 美智子
 主任 菊池 久
 専門調査員 兼 経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫
 調査第二課長 大和 修
 主任 濱野 美代子
 主任 調査員 山川 守男

(2) 整理事業 (平成8年度)

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 吉川 國男
 常務理事 兼 管理部 稲葉 文夫
 兼 調査部 理 小川 良祐

管理部

庶務課長 依田 透
 主任 西沢 信行
 主任 長滝 美智子
 主任 菊池 久
 専門調査員 兼 経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二

資料部

資料部長 梅沢 太久夫
 主任 兼 資料部副部長 谷井 彪
 専門調査員 兼 資料整理第一課長 今泉 泰之
 主任 濱野 美代子

II 立地と環境

東町二丁目遺跡は上尾市の南東部、JR高崎線上尾駅より南東へ約1.5kmの所、大宮台地のほぼ中央部に位置する。

発掘調査前の遺跡の大半は栗林になっており、周囲にも同様の林や、果樹園、畑地などが見られる。また、遺跡の西側には国道17号線が走っており、これと直交する遺跡北側の道路は、伊奈町、蓮田市方面への幹線道路になっている。このような交通至便の地であるため、周囲には宅地も多く、現在は市街地へと変貌しつつある。

大宮台地は、荒川と元荒川に挟まれた洪積台地であり、加須低地、中川低地、荒川低地と接し、長さ約40km、幅約12kmの規模をもつ。標高は北部の北本市では約30mと高く、ほぼ中央部の上尾市で約13~15mとなる。その後南東に向かって徐々に高くなり、川口市の安行付近では標高が約20mになる。また、大宮台地は西から江川や鴨川、芝川、原市沼川、綾瀬川、元荒川などの多くの開析谷によってぎざぎざされており、縁辺部には各時代の数多くの遺跡の存在が知られている。(註1)

東町二丁目遺跡は、市域中央を南流する鴨川と芝川

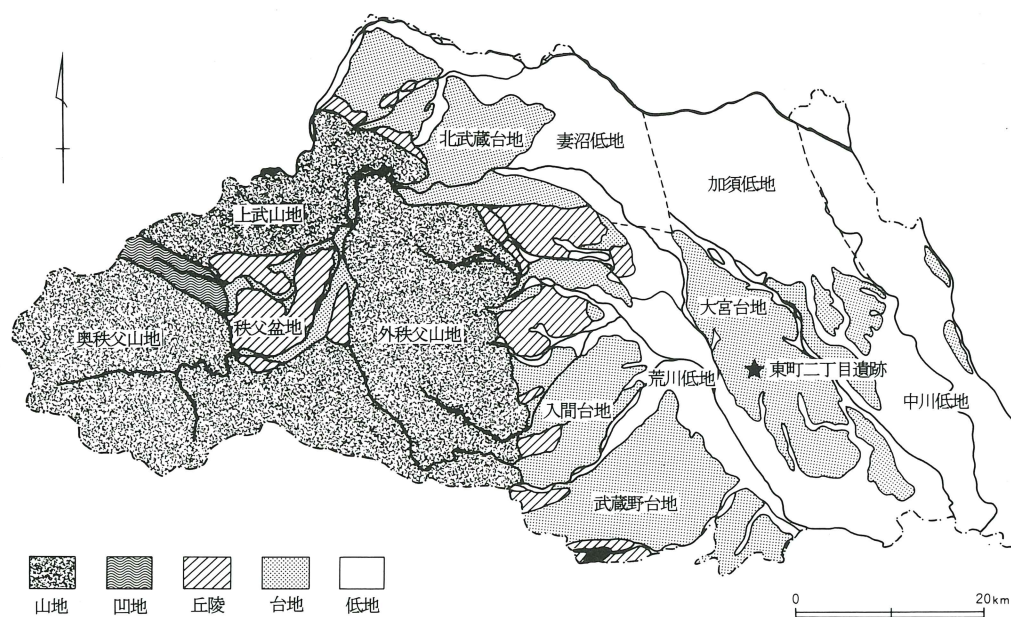
に挟まれた洪積台地の、芝川が大きく蛇行する南側の右岸に位置する。遺跡の位置する台地は芝川流域に発達した浅い谷に向かって緩やかに傾斜しながら東に広がり、調査区の標高は西側で約14.9m、東側で約13.8mと約1mの比高差をもつ。

本遺跡は台地の中央部にあるため、周辺は比較的遺跡の分布が希薄な地域となっている。

平成4年には上尾市教育委員会が本遺跡の北東地点の確認調査を行っている。その際に縄文時代中期中葉の土器片が出土しており、今回の調査内容とも関連すると思われる。また耕作土中からは縄文時代後期加曾利B式期の土器片が採集されている。(註2)

周辺には遺跡が少ないが、本遺跡から約0.5km東方の芝川対岸には榎戸遺跡(4)が存在する。榎戸遺跡は平成3年に上尾市遺跡調査会によって調査されており、縄文時代後期の住居跡や弥生時代末から古墳時代にかけての住居跡各一軒の他、縄文時代早期の撚糸文系土器や沈線文系土器が検出されている。(註3)また、榎戸遺跡と隣接して、古墳時代の遺物が散布している榎戸I遺跡(6)や江戸時代の屋敷跡である陣屋(5)などがみられる。(註1)

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1 東町二丁目遺跡 2 東町一丁目遺跡 3 東町一丁目I遺跡 4 榎戸遺跡 5 陣谷 6 榎戸I遺跡 7 長橋遺跡
- 8 日の出遺跡 9 三番耕地遺跡 10 十八番耕地遺跡 11 十二番耕地I遺跡 12 十二番耕地II遺跡 13 観音山遺跡
- 14 諏訪坂貝塚 15 十六番耕地遺跡 16 十九番耕地II遺跡 17 十九番耕地遺跡 18 吉野原遺跡 19 十二番耕地III遺跡
- 20 九番耕地II遺跡 21 九番耕地遺跡 22 十番耕地遺跡 23 九番耕地I遺跡 24 七番耕地遺跡 25 八番耕地遺跡
- 26 平塚前遺跡 27 小室天神前遺跡 28 大山遺跡 29 伊奈屋敷 30 志久遺跡

本遺跡より北西1km圏内には東町一丁目遺跡(2)、東町一丁目I遺跡(3)などが見られる。分布調査の結果、平安時代及び中世の遺跡と考えられる。(註1)この西側の国道17号線から高崎線に至るまでの間は、遺跡の存在が全く確認されていない。しかし、さらに高崎線の西側の柏座、谷津、西宮下、大谷などでは多くの遺跡が確認されている。

一方、南東方面には芝川流域を中心に多くの遺跡が分布しており、芝川右岸では日の出遺跡(8)、大宮市吉野原遺跡(18)などが知られている。昭和43年に大宮市により調査された吉野原遺跡からは、旧石器時代の尖頭器、礫器、搔器などが出土しており、また、弥生時代後期の集落跡としても知られている。(註4)

しかし、このあたりは大宮台地の中央部にあたることとあって、芝川右岸の遺跡分布は全体に希薄であり、東町二丁目遺跡の周辺も同様な状況下にあったといえる。

これに反して芝川の左岸、西側を芝川に東側を綾瀬川によって開析された大和田片柳支台には多くの遺跡の存在が知られている。芝川左岸の遺跡を南の方から見ていくと三番耕地遺跡(9)、十九番耕地遺跡(17)、十九番耕地II遺跡(16)、十八番耕地遺跡(10)、十二番耕地I遺跡(11)、十六番耕地遺跡(15)、十二番耕地II遺跡(12)、観音山遺跡(13)、諏訪坂貝塚(14)などの遺跡が分布している。(註1)

三番耕地遺跡、十八番耕地遺跡、十二番耕地遺跡は、

昭和51年・55年・56年の各年度に埼玉県教育委員会及び埋蔵文化財調査事業団により調査が行われている。三番耕地遺跡からは旧石器時代の遺物と古墳時代前期の集落跡が検出されている。十八番耕地遺跡からは縄文時代後期初頭の住居跡や土壇が検出されているほか、包含層からは古銭が多量出土しており、伝世品と考えられる「貨泉」も出土している。(註5) 観音山遺跡は昭和46年に調査され、縄文時代中期の住居跡が2軒検出されている。うち1軒には貝塚が伴っており、この地域の立地を考えるうえで興味深い。報告によれば勝坂式後半及び加曾利E式の古手の資料を出土している。

(註6) また、諏訪坂貝塚は縄文時代中期及び後期の貝塚として知られている。(註1)

さらに北上すると、原市沼沿いに、十二番耕地III遺跡(19)、九番耕地II遺跡(20)、九番耕地遺跡(21)、十番耕地遺跡(22)、九番耕地I遺跡(23)、七番耕地遺跡(24)、八番耕地遺跡(25)、平塚前遺跡(26)などの分布が確認できる。(註1)

原市沼の対岸にあたる伊奈町には大山遺跡(28)や縄文時代後晩期の資料を出土する伊奈屋敷遺跡(29)がある。大山遺跡からは縄文時代中期の集落跡や古墳時代及び奈良・平安時代の集落、製鉄関係の遺構などが見つかっている。縄文時代の住居跡は10軒ほど見つかっているが、内2軒には貝塚が伴っていた。また、さらに上流には縄文時代早期と中期の資料を出土する小室天神前遺跡(27)がある。(註6)

註1 埼玉県上尾市 1992『上尾市史 第1巻』 資料編1 一原始・古代一

註2 上尾市教育委員会 1994『十四番耕地遺跡・菅谷北城・東町二丁目遺跡』 上尾市文化財調査報告 第42集

註3 上尾市遺跡調査会 1992『榎戸遺跡』 上尾市遺跡調査会調査報告書 第3集

註4 大宮市 1968『大宮市史 第1巻』 考古編

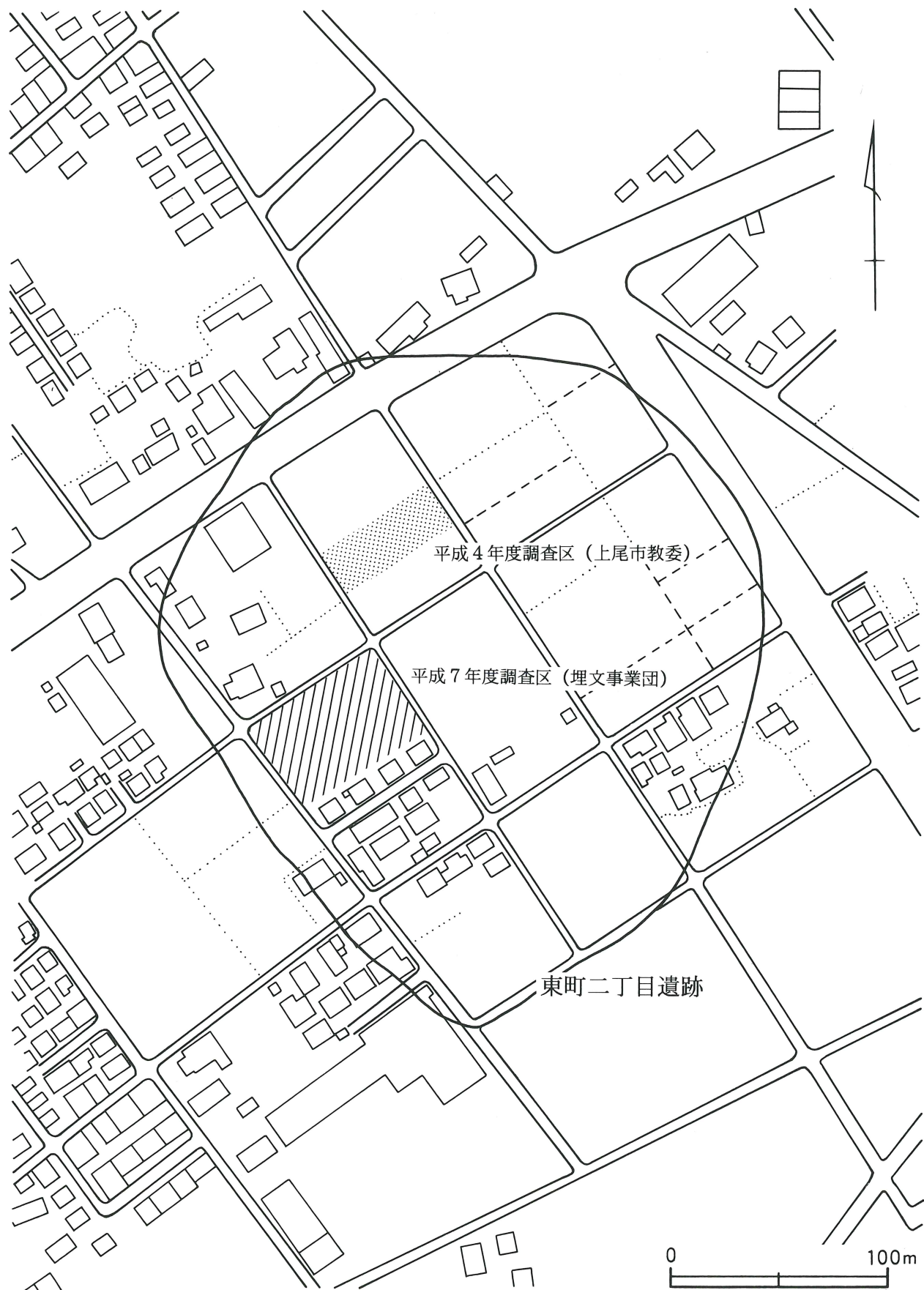
註5 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985『三番耕地・十八番耕地・十二番耕地・神山』 埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第43集

註6 吉川國男・赤石光資 1973「上尾市原市十三番耕地遺跡の小調査」『埼玉考古 第11号』 埼玉考古学会

赤石光資 1981「大宮台地東部の遺跡分布について—芝川・原市沼上流域の遺跡立地移動—」『埼玉考古 第20号』

埼玉考古学会 (この時点で遺跡名が観音山遺跡になっている。)

第3図 遺跡位置図



III 遺跡の概要

東町二丁目遺跡のほぼ南西部分について調査を行った。調査面積は約2,200㎡で、全遺跡範囲の一割弱にあたる（第3図参照）。

平成4年度には、上尾市教育委員会が今回の調査区の北東部、約1,000㎡に幅2mのトレンチを6本入れて、遺跡の範囲確認調査を行っている（第3図参照）。

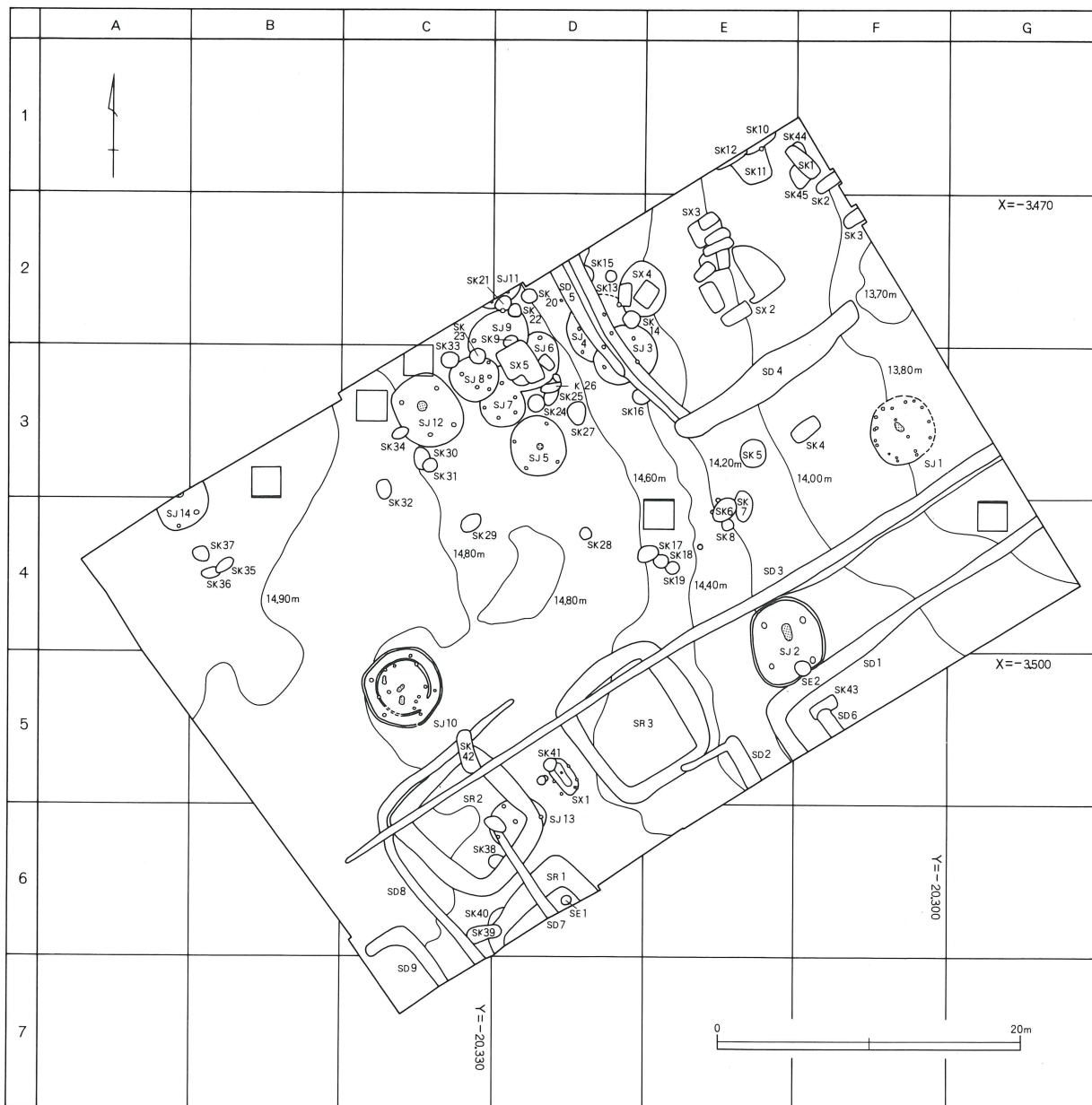
遺跡の周辺は、起伏が少なく平坦な台地になっているが、台地は芝川によって形成された浅い谷に向かって、東方に緩やかに傾斜している。遺跡の標高は西側

で約15m、東側で約12mになる。

今回の調査区は遺跡の南西部に当たる地点で、調査区の西側半分は標高14.8m～14.9mと平坦な地形を示しているが、標高14.6mぐらいのラインを境に東側に傾斜し、北東の隅では標高が13.7mとかなり低くなる（第4図参照）。

遺構は、台地の肩部を中心に分布している。検出された主な遺構は、縄文時代中期の住居跡・土壇、古墳時代前期の方形周溝墓、中世の竪穴状遺構などである。

第4図 遺構全体図



縄文時代の遺構は調査区全域から検出されている。

住居跡は14軒検出されたが、1号住・2号住・10号住・14号住は、調査区の東側から西側にかけて間隔を置きながらやや弧状に分布する。これに対し3号住～9号住・11号住・12号住は弧の中心部にあたるC・D-2・3グリッドに集中して存在しており、当遺跡の中でも比較的古い様相を持つ土器が出土している。住居跡は5号と12号を除いて、いずれも小型で複雑に重複しており、いわゆる通常の住居跡とは言えないかもしれない。

弧状に分布する1号・2号・10号の各住居跡は、いずれも規模も大きくしっかりした構造を持っている。しかし、3軒とも時代的には多少のズレがあると思われる。また、10号住は拡張をしていると考えられるが、遺物の時期はあまり大きいものではなく、短期間のうちに拡張されたものと考えられる。

土壌も大半がC・D-2・3グリッド及びその周辺から検出されている。21号土壌からは、当遺跡でより古い様相を示す土器が出土している。また、24号土壌のような集石土壌も見られる。

遺物は、縄文時代中期中葉の土器を中心に打製石斧、磨製石斧、石鏃、スクレイパー、石皿、磨石などが出土している。注目すべき特徴としては、磨製石斧の刃先だけの出土が多いことがあげられる。

グリッド出土の遺物も大半は中期中葉の土器及び石

第5図 基本土層図

器であるが、C・D-2・3グリッドの周辺からは後期中葉の土器片も出土している。

古墳時代前期の方形周溝墓は調査区の南側コーナーよりに3基検出された。後世の攪乱が目立ち、主体部や周溝部分の立ち上がり等も不明瞭であった。

遺物は甕の下半部や壺が数点出土したのみである。

中世の遺構としては竪穴状遺構が1基、集合土壌が2群検出された。竪穴状遺構からは13世紀末の浅鉢が検出されたが、赤色塗彩かと思われる痕跡が残っている。また、小破片ではあるが、グリッドより青磁の破片も出土している。

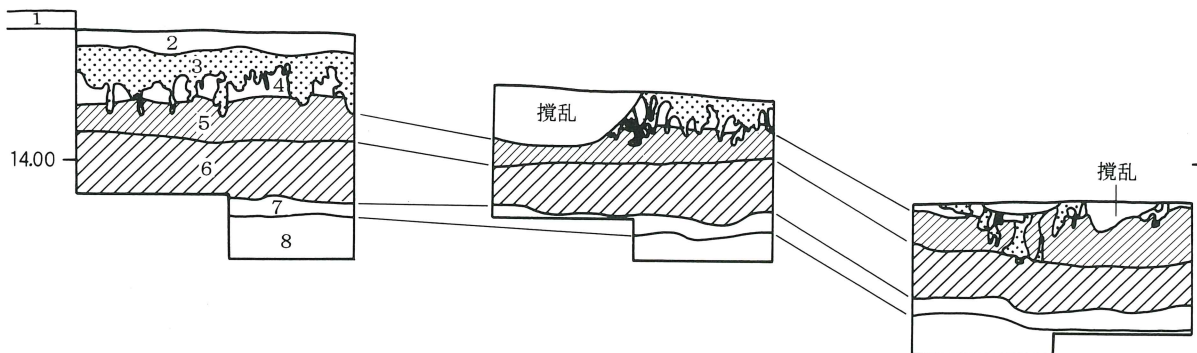
集合土壌からは遺物が全く出土しておらず、遺構の攪乱も激しいため、その性格ははっきりしないが、土壌の形状から中世のものとして捉えておいた。

他には、グリッドより開通元寶の出土が見られた。

なお、旧石器時代についてはテストピットを設けて確認をしたが、検出されなかった。

当遺跡の基本土層は、以下のとおりである（第5図参照）。

- | | |
|-----------|------------------|
| 1 耕作土 | 5 ブラック=バンド(1)※ |
| 2 ローム漸移層 | 6 ブラック=バンド(2)※ |
| 3 ソフト=ローム | 7 黄褐色土層(粘性有 軟質) |
| 4 ハード=ローム | 8 褐色土層(やや粘性有 硬質) |
- ※(1) 淡い黒褐色
(2) 黒褐色 いわゆるブラック=バンド



IV 遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 概略

縄文時代の遺構は、住居跡が14軒、土壇が³15基、集石土壇が1基検出された。

住居跡はいずれも縄文時代中期中葉のものと考えられる。調査区全体に分布しているが、特にC・D-2・3グリッドには小型で掘り込みの浅い住居跡が集中する傾向を示し、遺物も比較的古手のものが出土している。また、1住・2住・10住・14住のような比較的規模の大きい住居跡は小型の住居址群を囲むように弧状に並んで検出された。しかし、微妙な時期差もあり、意識的に配置されたものとは考えられない。1号住及び10号住からは炉体土器も見つかっており、遺構の年代決定の基準になると考えられる。

土壇は、集石土壇を含めて縄文期のもものは16基検出されたが、大半は中期中葉のものと考えられる。21号土壇と33号土壇からは復元可能な土器が出土しているが、他の土壇は出土遺物が少なく、形状と土層から縄文期のものとして判断した。集石土壇は1基のみ検出された。破碎礫が多く出土しているが、石器製品は含まれていない。土壇の分布は偏りが見られ、その大半がC・D-2・3グリッド周辺に集中する。

遺構外の遺物も多く出土している。特に後世の方形周溝墓や溝跡に落ち込んだものが多く、これらについてはグリッド出土の遺物と同様の扱いをした。出土土器は中期中葉のものが中心で、C・D-2・3グリッド及びC・D-5・6グリッド付近から多く出土する。

また、8号住及び9号住の周辺からは後期中葉の土器も出土している。なお、当遺跡からは磨製石斧の刃先部分のみの出土が目立つ。

以下に、各遺構について詳細を述べる。

(2) 住居跡

第1号住居跡(第6図・7図 図版4)

1号住居跡は調査区の東寄り、F-3グリッドより検出された。原地形の標高はF-3グリッドの周辺で

最も低くなる。そのため、ローム面からの掘り込みは浅い。また、北西方向から南東方向にかけて住居跡を三つに分断するように耕作による攪乱が入っている。このため、北東から南東にかけては住居跡のプランは確認できなかった。ただ、壁柱穴が残っていたため、ほぼ円形のプランであることが確認できた。平面規模は約4.2m×4m、壁高はpit3付近で約7cmになる。本来の床面はほとんど残っていない。

柱穴は14本確認できた(第6図 pit1~pit14)。柱穴の直径は、確認面において平均約20cm~30cmで、確認面からの深さは平均約50cm~60cmと、いずれもブラック=バンド面に達している。

柱穴の配列から pit4・pit5 及び pit6・pit7 の間の空間が入り口であった可能性が強い。

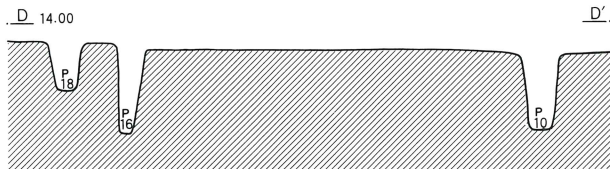
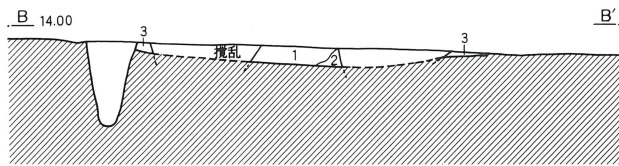
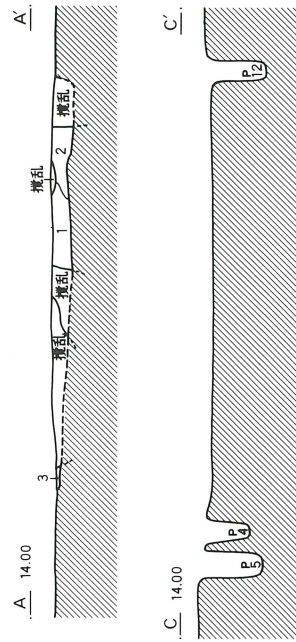
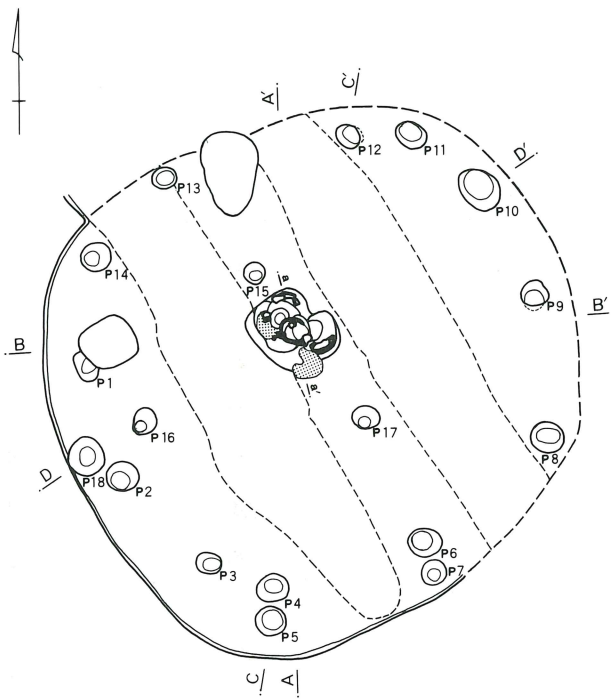
炉跡は住居跡の中央やや北西寄りから検出された。炉壁はカリカリに焼けており、炉の北西部分及び南側からは多量の焼土が出土している(第6図下)。炉の中央には土器が埋設されており(第8図-1)、さらに、この土器の外側を取り囲むように無文の浅鉢土器(第8図-2)の破片が置かれていた。炉跡は約75cm×50cmの不整楕円形をしている。炉全体の深さは約10cm、埋設土器のある箇所の高さは約20cmになる。炉の下面は硬化していた。

遺物は炉跡を中心に床面及びpitの覆土中から出土している。しかし、後世の攪乱を受けた範囲からはほとんど出土していない。

第1号住居跡出土遺物(第8図・9図 図版21・25)

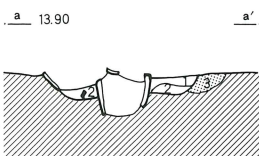
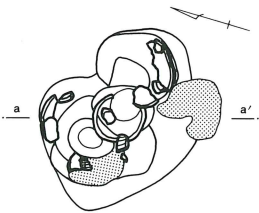
1は、炉体土器である。深鉢で、上下が欠けており、胴部のみが利用されていた。最大径は20.6cm、現存高は16.7cmになる。胎土は粗く、小砂粒を多く含む。色調は茶褐色である。二次的に火を受けているため、かなり脆くなっている。地文は撚り糸(R)である。2は、1の炉体土器を囲むような形で、炉跡から出土している。全体の約二分の一強を欠いている。口径は22.7

第6図 I号住居跡

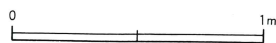


- 1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多量混
ロームブロック混
- 2 暗褐色土 炭化物粒少量混
ロームブロック混
- 3 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
ロームブロック混

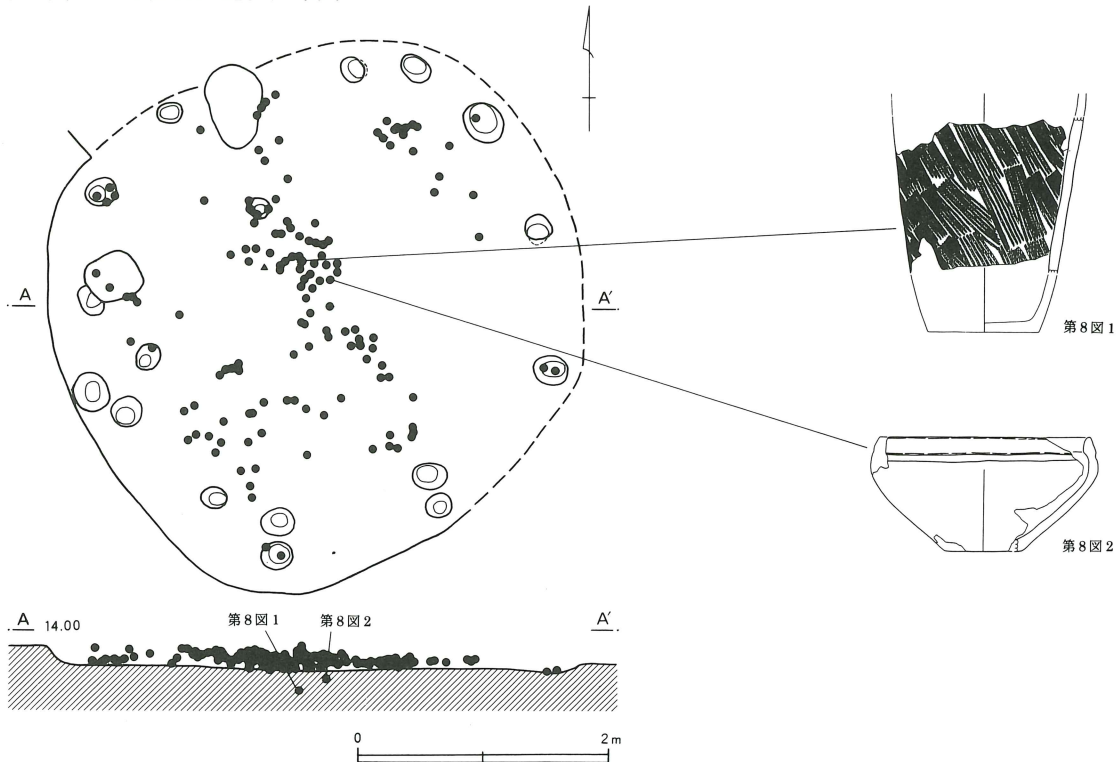
- P4 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
ローム粒少量混
- P5 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多量混
ローム粒多量混
- P10 P5に同じ
- P12 P4に同じ
- P16 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多量混
ローム粒少量混
- P18 P16に同じ



- 1 暗赤褐色土 軟い 焼土粒8割強混
- 2 褐灰色土 やや粘性あり
焼土粒・炭化物粒少量混
- 3 橙色土 焼土



第7図 1号住居跡遺物分布図



cm、最大径24.6cm、底部径8.4cm、器高は16.7cmになる。胎土は密で、焼成も良い。色調は赤褐色である。炉体土器の外側を囲むように置かれていたため、二次的な火はほとんど受けていない。無文の浅鉢で丁寧に磨きかけられている。3は、深鉢の底部である。底径は13.4cm、現存高は6.9cmになる。胎土は密で、白色砂粒を若干含む。色調は橙褐色である。地文は撚り糸(R)である。4は、深鉢の口縁の一部である。口径は17.2cm、現存高は5.7cmになる。胎土は密で、色調は暗褐色である。口縁部に無節の縄文(R)が施されている。

5以下は拓影図である。5は、半截竹管による半肉隆線と爪形文で施文されている。6～9は、隆帯上に爪形文が施されるものである。6は、暗褐色の土器で胎土に雲母が混じる。10～12は、口縁部の破片である。沈線と爪形により施文される。13・14も同様の土器の胴部破片と考えられる。15は、黒褐色で、円文と半截竹管による半肉隆線状の施文が特徴的な土器である。16も同様の施文手法を用いた土器であるが、区画の中を三角形の刺突で埋めたものである。17・18は、

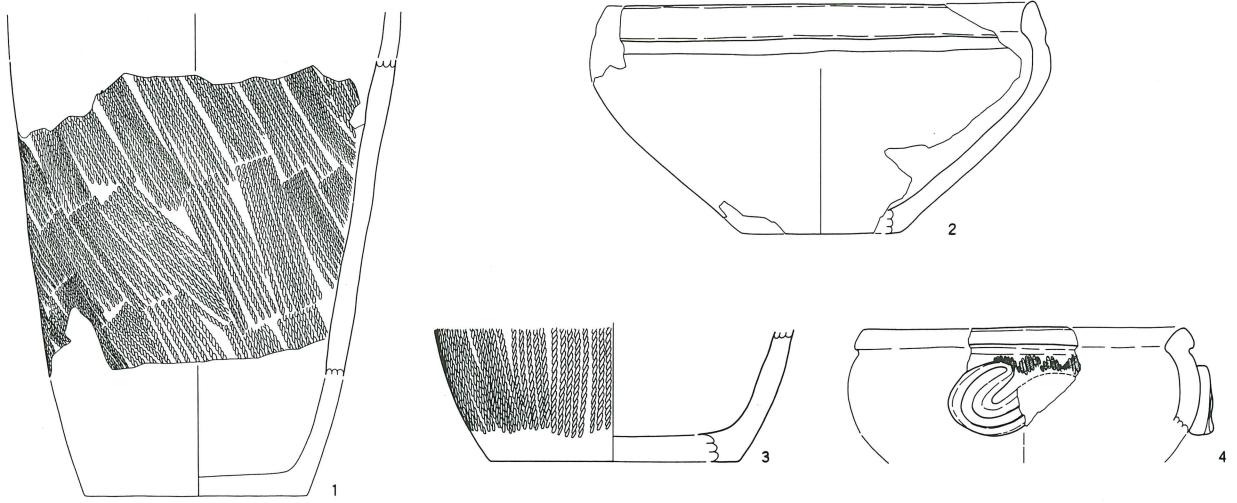
細かい爪形文と沈線が施される。19・20は土器の把手である。19には角押文が施される。21・22は撚り糸(R)、23・24は縄文(RL)が施される。25～28は無文の土器である。25・26は、1及び2の土器と一緒に炉跡から出土している。29は、地文が縄文(RL)で角押文で沈線が施される。30は、胎土に雲母を含む土器である。31・32・33は、中期後葉の土器である。

石器の出土はなかった。

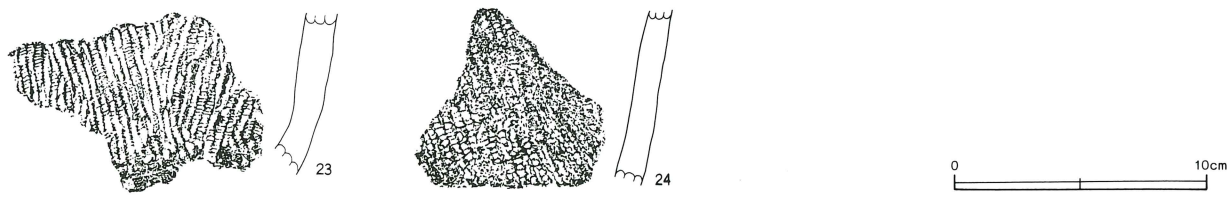
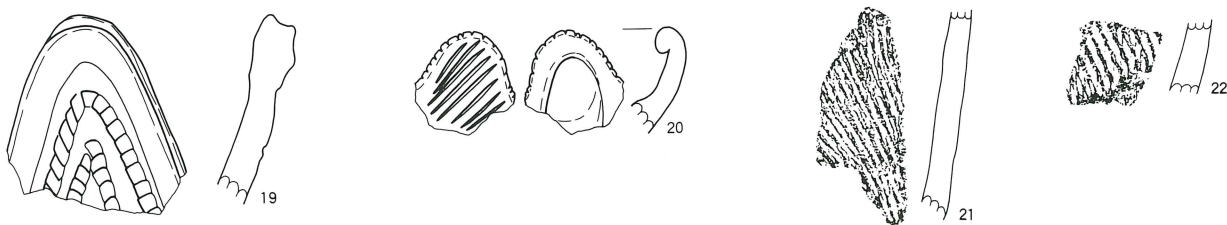
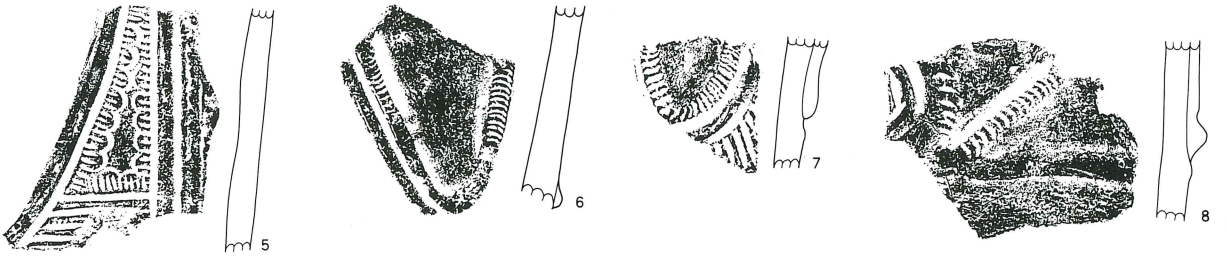
第2号住居跡(第10図・11図 図版5)

2号住居跡は調査区の南東寄り、E・F-4・5グリッドより検出された。南東コーナー側を1号溝と2号井戸によって壊されている。原地形の標高約14.2m付近からの検出で、ローム面からの掘り込みは深い。住居跡のプランは、ほぼ楕円形で、四隅がやや張っている。平面規模は約5.35m×4.70mで、壁高は西側で約38cm、東側で約23cmになる。壁周溝を持ち、溝底は深いところで、住居跡の確認面から約60cmの深さになる。柱穴は4本確認できた(第10図・11図 pit1～pit4)。柱穴の直径は、上面において平均約45cm～50cmで、床面からの深さは、最も深いpit3で約80cmに

第8図 I 住居跡出土遺物(I)

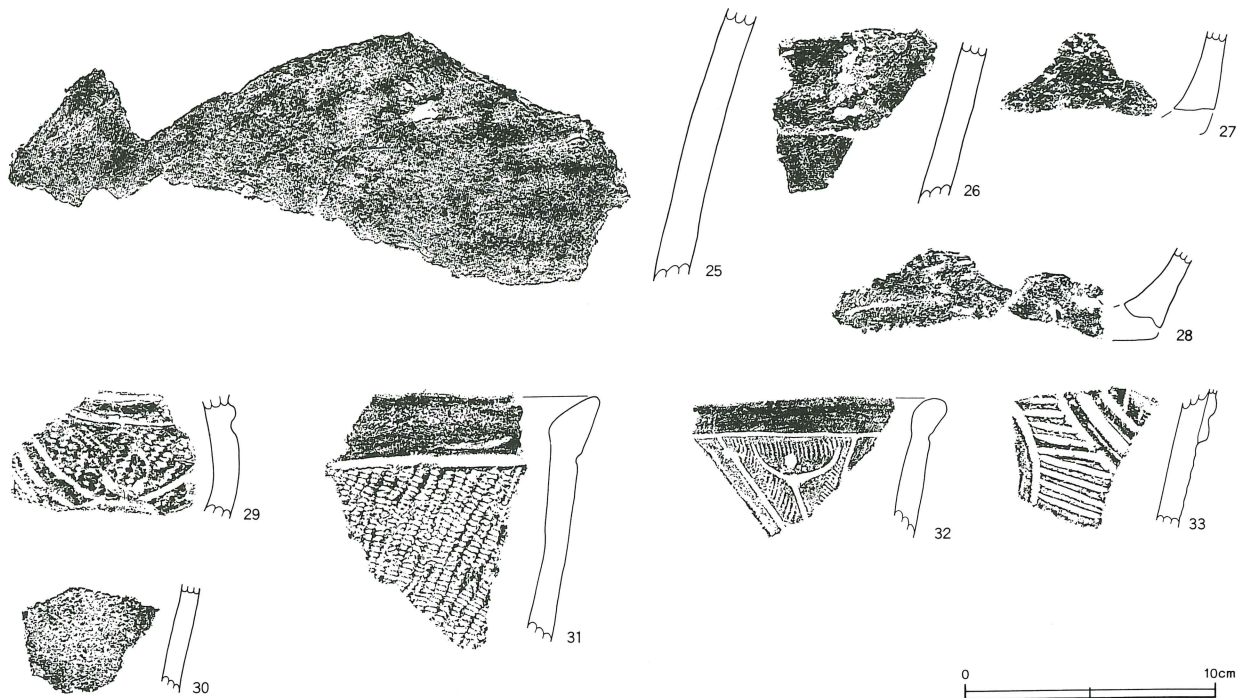


0 10cm



0 10cm

第9図 1号住居跡出土遺物(2)



達し、いずれもブラック=バンド面を掘り込んでいる。柱穴の配列と炉の位置から南側に入り口があったと考えられる。

炉跡は住居跡の中央北寄りから検出された。地床炉である。炉壁はカリカリに焼けており、炉の南側半分からは多量の焼土が出土している(第11図下)。土器などが埋設された痕跡は無かった。炉跡は約1m×0.64mの楕円形をしている。炉の深さは最深部で約18cm、南側では約12cmである。南側には約7cmの厚さで焼土が堆積し、炉壁及び下面は硬化している。

遺物は炉跡を中心に床面及び覆土中から出土している。しかし、復元が可能な土器は、まったく出土しなかった。

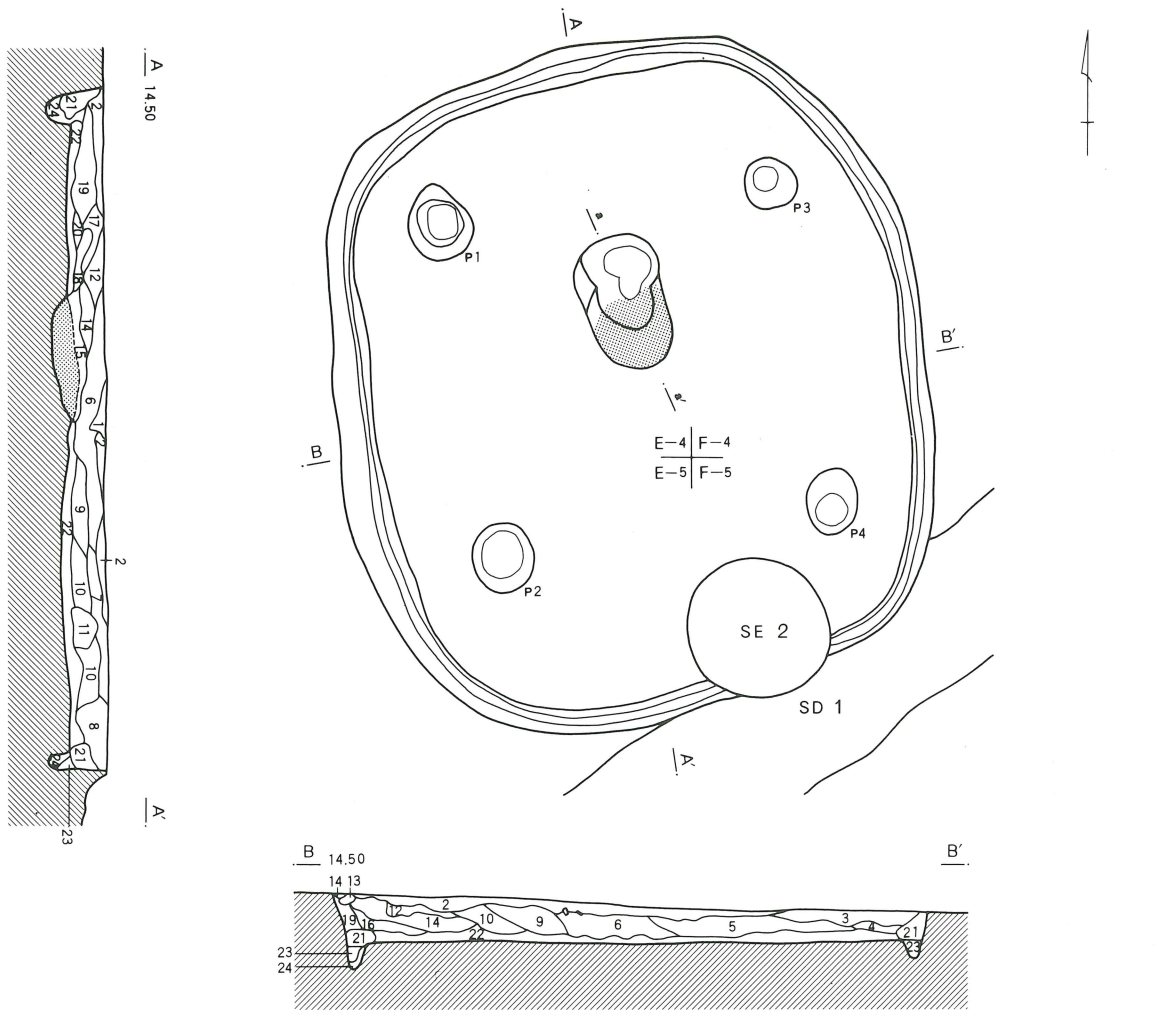
第2号住居跡出土遺物(第12図・13図 図版21・26)

1は、円筒形深鉢の一部である。最大径は21.5cm、現存高は9.4cmになる。胎土は密で、微砂粒を多く含む。色調は黒褐色である。焼成は良い。隆帯上は爪形文が施され、下半には縄文(RL)が施される。2も円筒形深鉢の一部である。口径は20.9cm、現存高は11.4cmになる。胎土は密で、微砂粒を多く含む。色調

は黒褐色である。焼成は良い。口縁部に無文帯を持ち、隆帯と沈線で施文される。3は、深鉢の把手の部分である。推定口径は約18.4cm、現存高は約9.5cmになる。胎土は密で、白色砂粒を若干含む。色調は橙褐色である。無文である。破片は pit2 の周辺から出土しているが、二次焼成を受けたらしく脆くなっている。4は深鉢の口縁である。胎土は密で、色調は暗褐色である。焼成はかなり良い。赤色塗彩の痕跡(ドット部分)が残る。5~7は、隆帯と爪形文、沈線文が施される土器である。8は連続刺突による沈線が施される。9は、口縁部から剝がれ落ちた突起の一部である。10・11は三叉文の周囲に爪形文が施される土器である。いずれも黄褐色である。13~14は無文土器である。いずれも暗褐色で焼きも良い。13は深鉢の口縁と思われる。16~18は撚り糸が施される。16・18は(R) 17は(L)である。19~21は縄文(RL)が施される。22~24は、胎土に雲母が混じる土器である。22は隆帯と角押文が施される。23・24は無文である。25~27は中期後葉の土器で、25・26はLR、27はRLの縄文が施される。

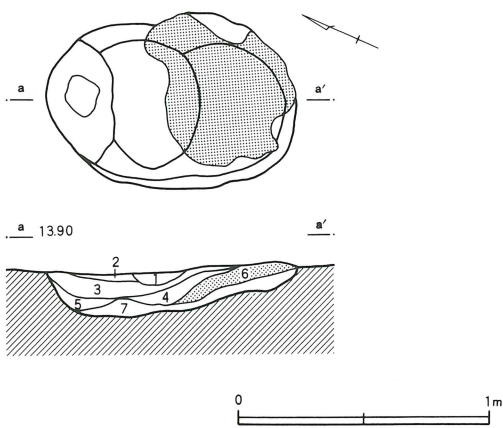
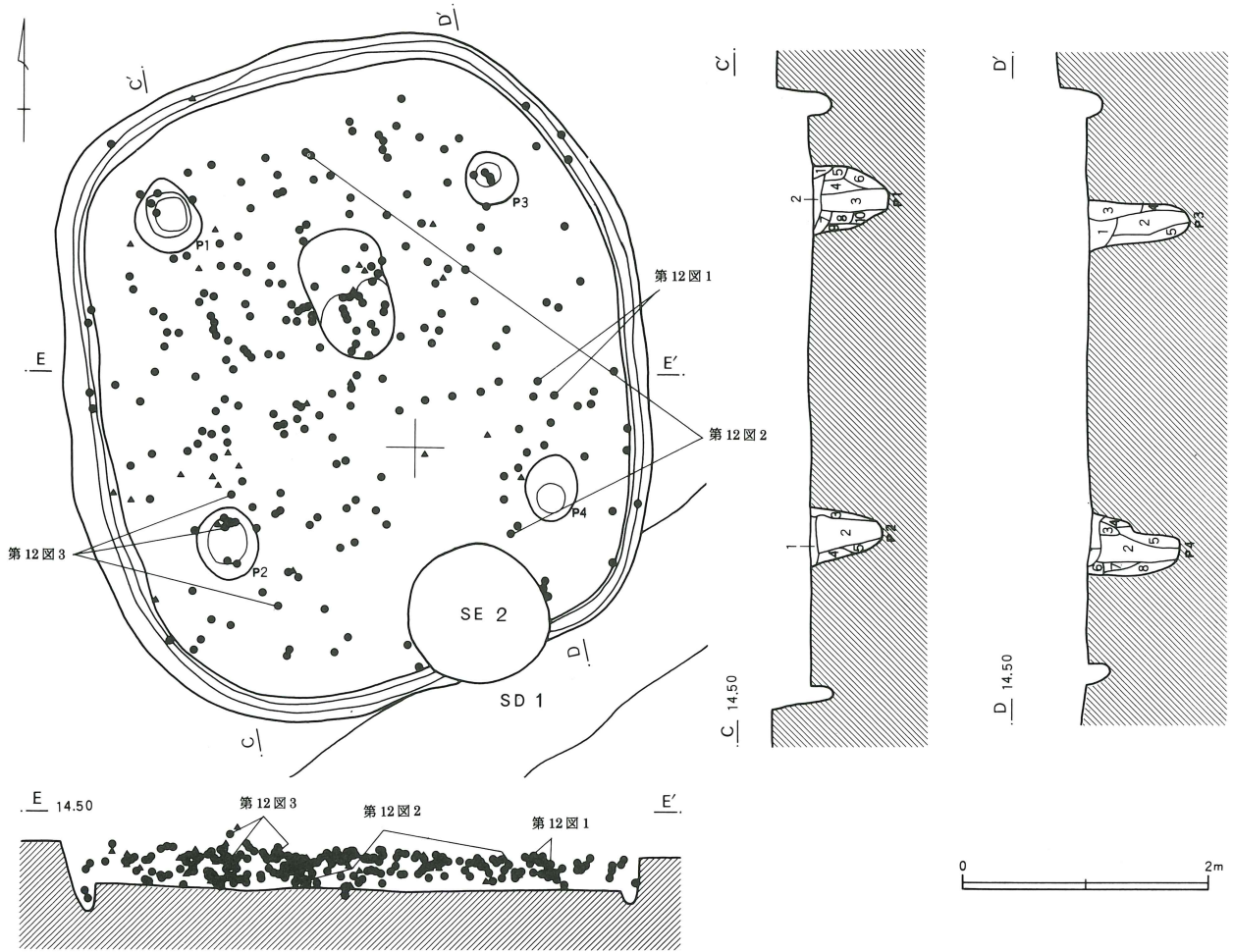
石器は、5点出土している。28・31は打製石斧、29・

第10図 2号住居跡



- | | | | |
|---------|----------------------------------|------------|--------------------------------|
| 1 褐灰色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒少量混
ローム粒子多量混 | 10 暗黄褐色土 | 締まりよし
炭化物粒少量混
ローム粒子多量混 |
| 2 暗褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒少量混 | 11 暗褐色土 | 締まりよし
炭化物粒少量混
ロームブロック多量混 |
| 3 黒褐色土 | 締まりよし
炭化物粒少量混
ロームブロック混 | 12 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 4 暗黄褐色土 | 締まりよし
ブロック状の焼土混
ローム粒子多量混 | 13 ロームブロック | |
| 5 暗褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒少量混
ローム粒子多量混 | 14 暗褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子混 |
| 6 黒褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒多量混
ローム粒子少量混 | 15 黒褐色土 | 焼土多量混 |
| 7 黒褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒少量混 | 16 黒褐色土 | 炭化物粒微量混
ローム粒子多量混 |
| 8 黒褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒微量混
ローム粒子少量混 | 17 暗褐色土 | 焼土粒微量混 |
| 9 灰黄褐色土 | 締まりよし
炭化物粒微量混 | 18 灰黄褐色土 | 焼土・ローム粒子多量混 |
| | | 19 暗褐色土 | 炭化物粒微量混
ロームブロック混 |
| | | 20 黒褐色土 | 締まりよし
焼土粒・炭化物粒微量混 |
| | | 21 褐色土 | 炭化物粒微量混
ローム粒子多量混 |
| | | 22 黒褐色土 | 炭化物粒・ロームブロック混 |
| | | 23 灰黄褐色土 | 炭化物粒微量混
ロームブロック混 |
| | | 24 黒褐色土 | 軟い 炭化物・ローム粒子混 |

第11図 2号住居跡遺物分布図・柱穴断面図・炉跡



- 1 黒褐色土 焼土粒混 炭化物多量混
- 2 暗赤褐色土 焼土粒混 炭化物微量混
- 3 極暗赤褐色土 焼土粒混 炭化物少量混
- 4 暗赤褐色土 焼土粒混 炭化物微量混
- 5 極暗赤褐色土 焼土粒混 炭化物多量混
- 6 明赤褐色土 焼土
- 7 暗赤褐色土 焼土粒・炭化物多量混

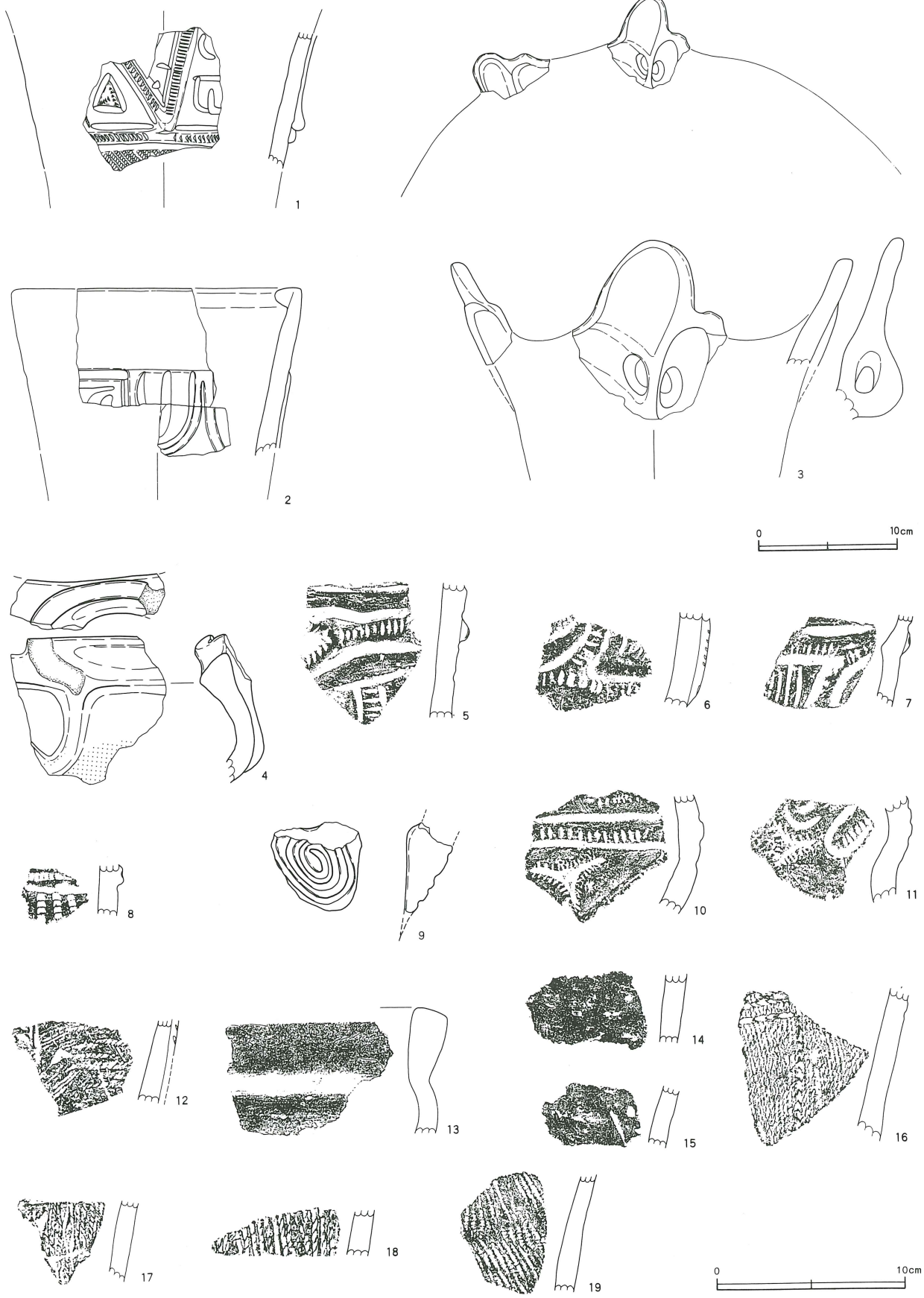
- P1 1 暗褐色土 地山の崩落 ブラックバンド
- 2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物多量混
- 3 黒褐色土 炭化物粒少量・ロームブロック混
- 4 褐灰色土 炭化物粒多量・ローム粒子少量混
- 5 暗黄褐色土 締まりよし 炭化物粒少量混
- 6 褐色土 やや粘性あり
- 7 灰黄褐色土 締まりよし 焼土多量混
- 8 褐灰色土 締まりよし 炭化物粒少量混
- 9 暗黄褐色土 締まりよし 焼土少量混
- 10 暗褐色土 やや粘性あり 焼土・炭化物少量混

- P2 1 暗褐色土 地山の崩落 ブラックバンド
- 2 黒褐色土 炭化物粒少量・ロームブロック混
- 3 褐色土 やや粘性あり 炭化物粒少量混
- 4 暗黄褐色土 締まりよし 焼土・炭化物多量混
- 5 暗褐色土 やや粘性あり 焼土・炭化物少量混

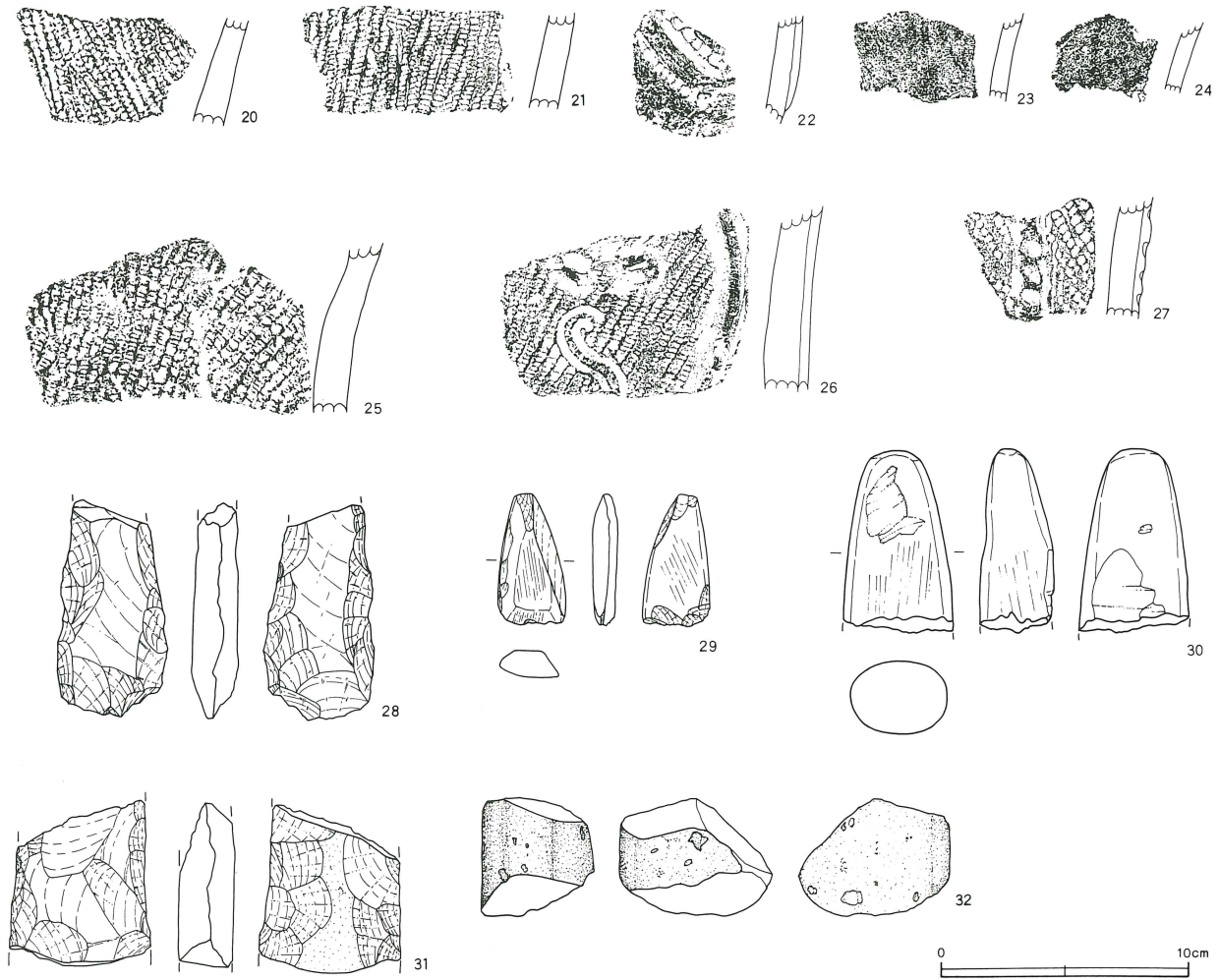
- P3 1 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物多量混 ローム粒子混
- 2 黒褐色土 炭化物粒少量混 ロームブロック混
- 3 褐灰色土 炭化物多量混 ローム粒子混
- 4 褐色土 やや粘性あり
- 5 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒子多量混

- P4 1 暗褐色土 地山の崩落 ブラックバンド
- 2 黒褐色土 炭化物粒少量・ロームブロック混
- 3 褐灰色土 炭化物多量混・ローム粒子少量混
- 4 暗黄褐色土 締まりよし 炭化物粒少量混
- 5 褐色土 やや粘性あり
- 6 明黄褐色土 ハードロームのブロック
- 7 褐灰色土 締まりよし 炭化物粒少量混
- 8 暗褐色土 やや粘性あり 焼土・炭化物少量混

第12图 2号住居跡出土遺物(I)



第13図 2号住居跡出土遺物(2)



30は磨製石斧、32は磨石である。29は小型の磨製石斧で、重量は20gである。

第3号住居跡 (第14図 図版5)

3号住居跡は調査区の北寄り、D・E-2・3グリッドに位置する。4号住と重複し、4号住より古い。住居跡の中央西側を4号溝と5号溝によって壊されている。さらに住居跡の北側中央を14号土壌に、壊されており、住居跡の中央は大きな攪乱を受けている。

原地形の標高約14.4m～14.2mにかけての地形の変換点で検出された。住居跡のプランは、ほぼ楕円形で、四隅がやや張っている。平面規模は約4.21m×3.56mで、壁高は西側で約17cm、東側で約5cmになる。柱穴は4本確認できた。柱穴の直径は、平均約25cm～30cmで、床面からの深さは、最も深い pit1 で約40cmになる。

炉跡は後世の破壊と攪乱のため検出されなかった。遺物もほとんど出土しなかった。

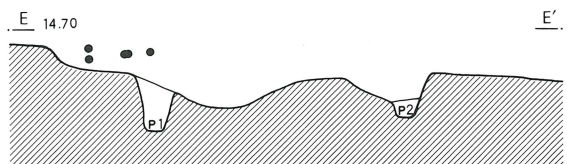
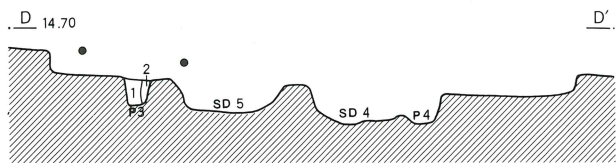
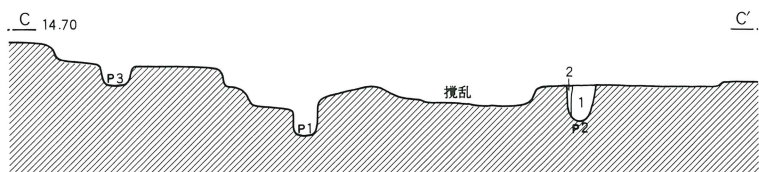
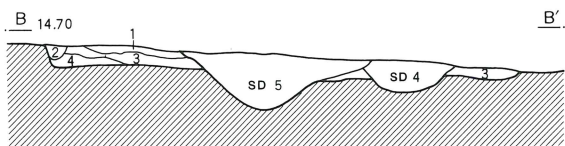
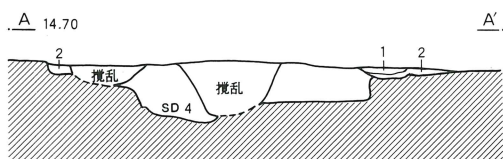
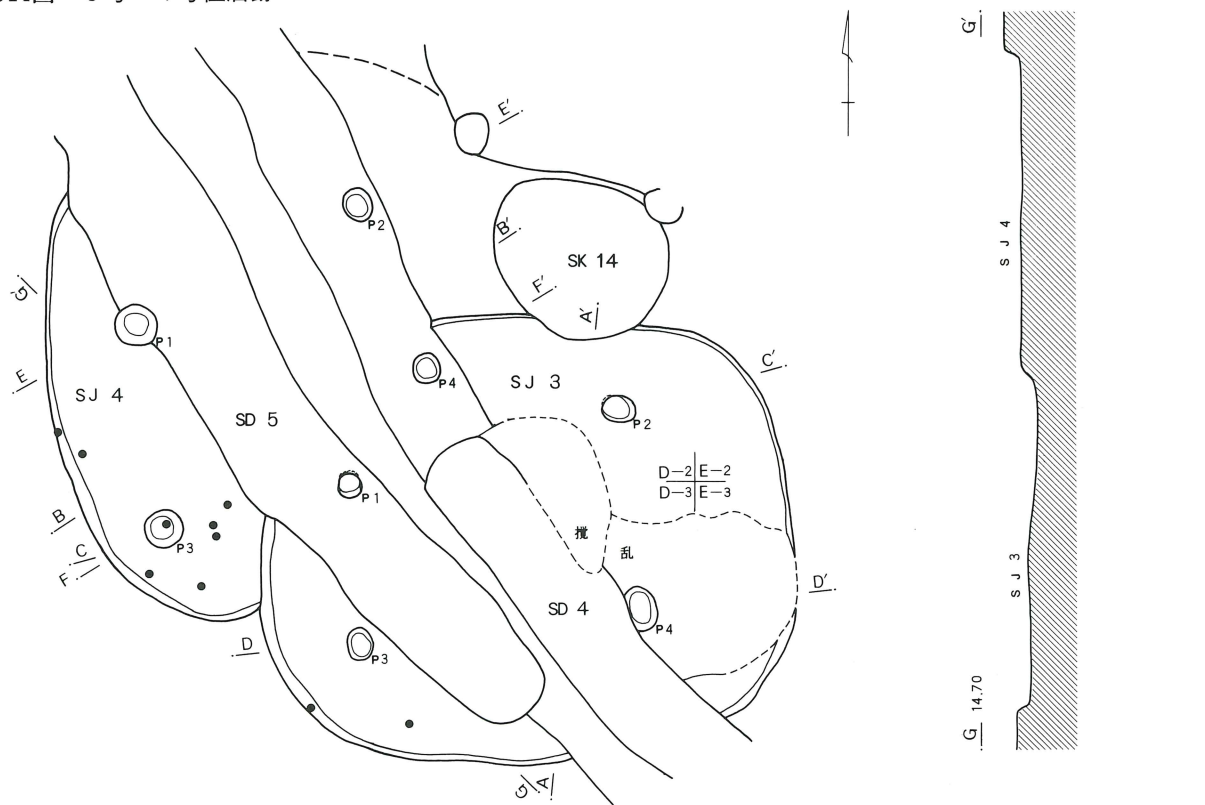
第3号住居跡出土遺物 (第15図1-4 図版27)

1・2は口縁部破片である。中期中葉の土器である。3は胴部破片、4は底部破片で、いずれも後期中葉の土器である。

第4号住居跡 (第14図 図版5)

4号住居跡は調査区の北寄り、D・E-2・3グリッドに位置する。3号住と重複し、3号住より新しい。住居跡の中央西側を4号溝と5号溝によって壊されている。さらに住居跡の北東部を3号集合土壌に壊されている。3号住同様標高約14.4m～14.2mにかけての地形の変換点で検出された。住居跡のプランは、おそらく楕円形になると思われ、推定規模は約4.50m×3.75mぐらいと思われる。壁高は西側で約18cmになる

第14図 3号・4号住居跡



3号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土粒混
ローム粒子少量混
- 2 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
ローム粒子少量混

3号住居跡 pit

- P1 1 黒褐色土 軟い
- 2 褐灰色土 締めりよし
- P2~P4 P1に同じ。

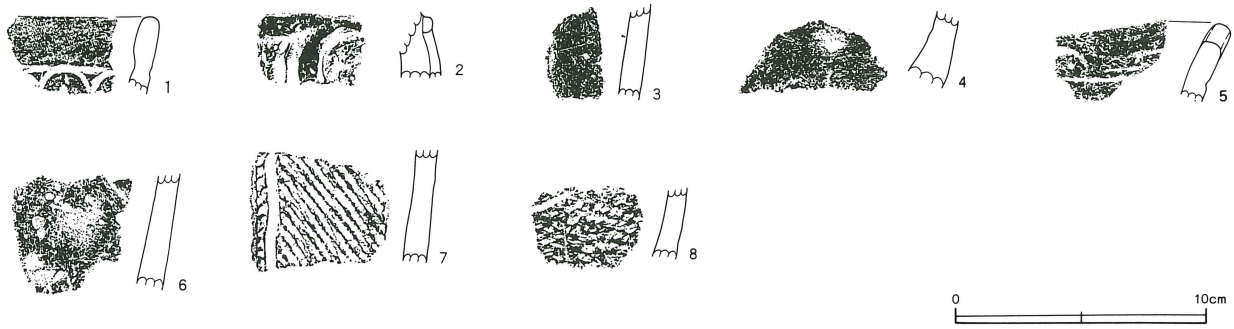
4号住居跡

- 1 黒褐色土 焼土・炭化物多量混
- 2 黒褐色土 炭化物粒少量混
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物少量混
ローム粒子多量混
- 4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒多量混

4号住居跡 pit

- P1 黒褐色土 焼土多量混
- P2 黒褐色土 炭化物少量混
- P3 黒褐色土 焼土・炭化物少量混
- P4 黒褐色土 ロームブロック混

第15図 3号・4号住居跡出土遺物



が、東側は残っていなかった。柱穴は4本確認できた。柱穴の直径は、平均約25cm～30cmで、床面からの深さは、最も深い pit1 で約50cmになる。

炉跡は後世の破壊と攪乱のため検出されなかった。

遺物は、南西コーナーからまとまって出土しているが点数は少ない。

第4号住居跡出土遺物(第15図5-8 図版27)

5は口縁部破片である。7は無節の縄文Rが、8は複節の縄文LRLが施される。いずれも中期後葉の土器である。

第5号住居跡(第16図 図版6)

5号住居跡は調査区中央の北寄り、D-3グリッドに位置する。7号住と接するが、重複はしない。原地形の標高約14.7m付近で検出された。住居跡のプランは楕円形である。平面規模は約4.25m×3.60mである。壁高は浅く約10cmである。柱穴は4本確認できた。柱穴の直径は、平均約25cmで、床面からの深さは、約25cmと浅い。

炉跡は、中心部に一部攪乱を受けていたが、住居跡のほぼ中央部で検出された。地床炉で、約55.2cm×49.5cmとやや小さい。深さは17cmである。あまり焼けてはいないが、南側の壁際には焼土が多量に混じった層が見られた。

遺物は、比較的北寄りから出土している。

第5号住居跡出土遺物(第17図 図版27)

1は沈線と爪形文、2は半截竹管による半肉隆線と撚り糸(R)、3・6は無文、4は隆帯とヘラ先による刺突、5は浅い沈線により施文される。いずれも中期後葉の土器である。

第6号住居跡(第18図 図版6)

6号住居跡は調査区中央の北寄り、D-3グリッドに位置し、いわゆるC・D-2・3グリッドの小竪穴住居跡が集中する一角に存在する。7号住及び9号住と重複するが、7号住・9号住より新しい。また、中世の1号竪穴状遺構により壊されている。原地形の標高約14.7m付近で検出された。住居跡のプランは楕円形であると思われる。規模は不明であるが、5号住と同じくらいと考えられる。壁高は約17cmである。柱穴は1本しか確認できなかった。柱穴の直径は約25cm、床面からの深さは、約25cmである。炉跡も検出できなかった。

遺物は、pit1の周辺と南寄りに散見する。

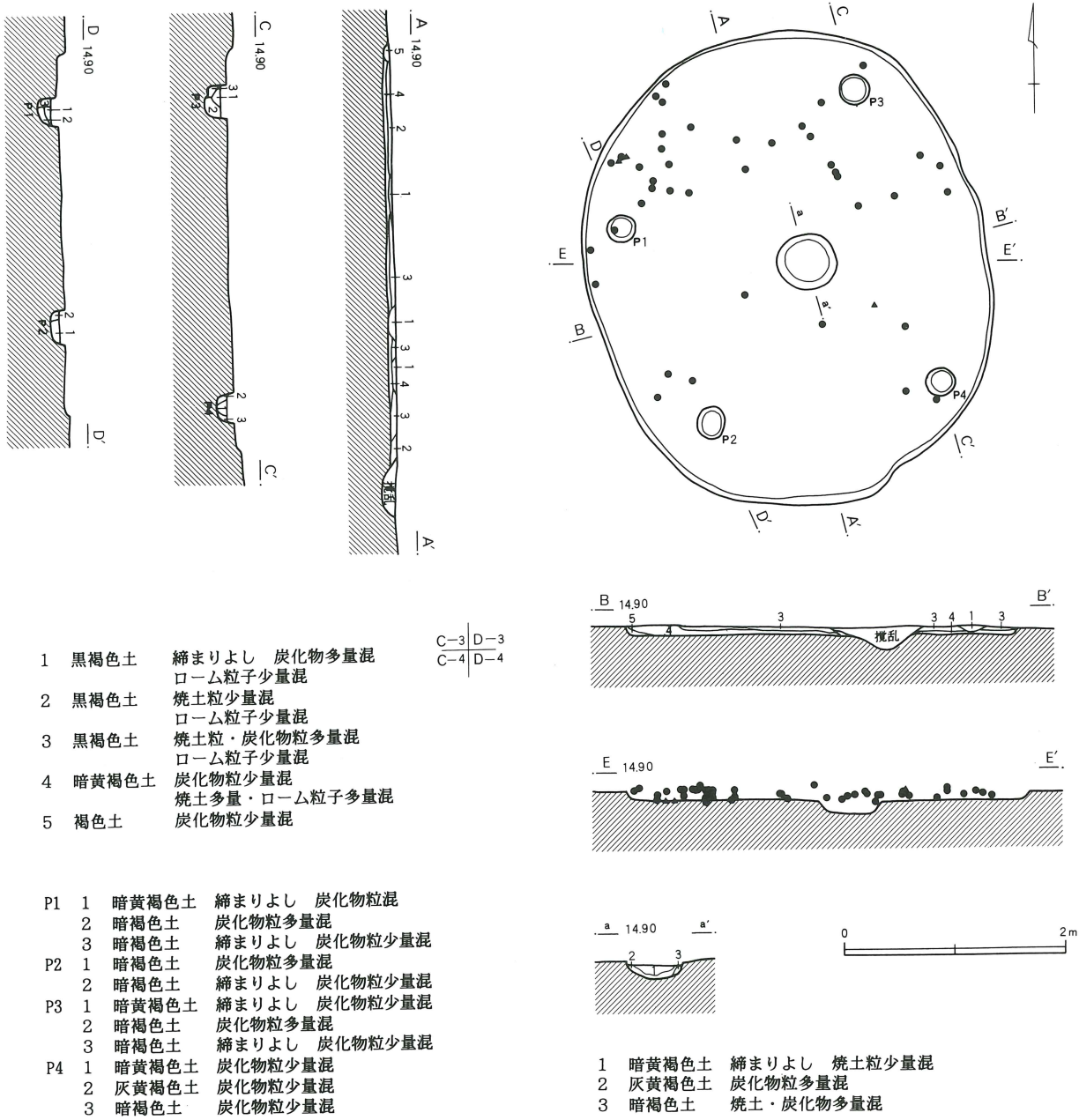
第6号住居跡出土遺物(第19図 図版27)

1～3はRLの縄文、4はLRの縄文が施される。いずれも中期後葉の土器と考えられる。5は磨製石斧の刃先で、当遺跡からは他にも数点出土している。

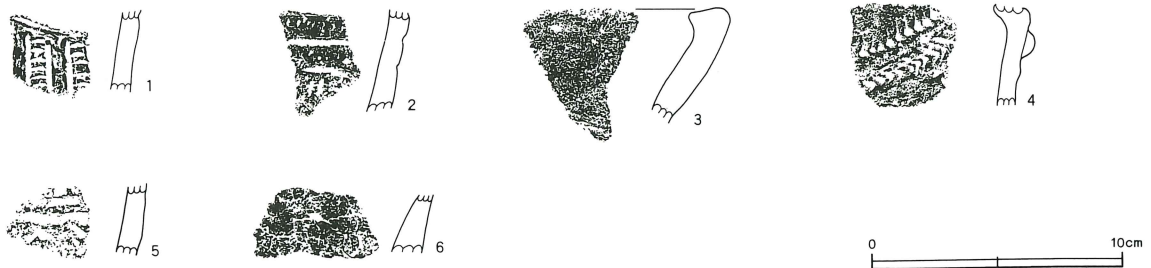
第7号住居跡(第20図 図版7)

7号住居跡は調査区中央の北寄り、C・D-3グリッドに位置し、いわゆるC・D-2・3グリッドの小竪穴住居跡が集中する一角に存在する。6号住・8号住より古く、9号住より新しい。また、北東側を中世の1号竪穴状遺構により壊されている。原地形の標高約14.7m付近で検出された。住居跡のプランは、ほぼ円形であると思われる。推定規模はおよそ3.30m×3.15mぐらいと考えられる。壁高は約19cmである。柱穴は6本確認できた。柱穴の直径は平均28cm、床面からの深さは、pit1で約50cmである。炉跡は確認できなかった。遺物は、住居跡全体に散見する。

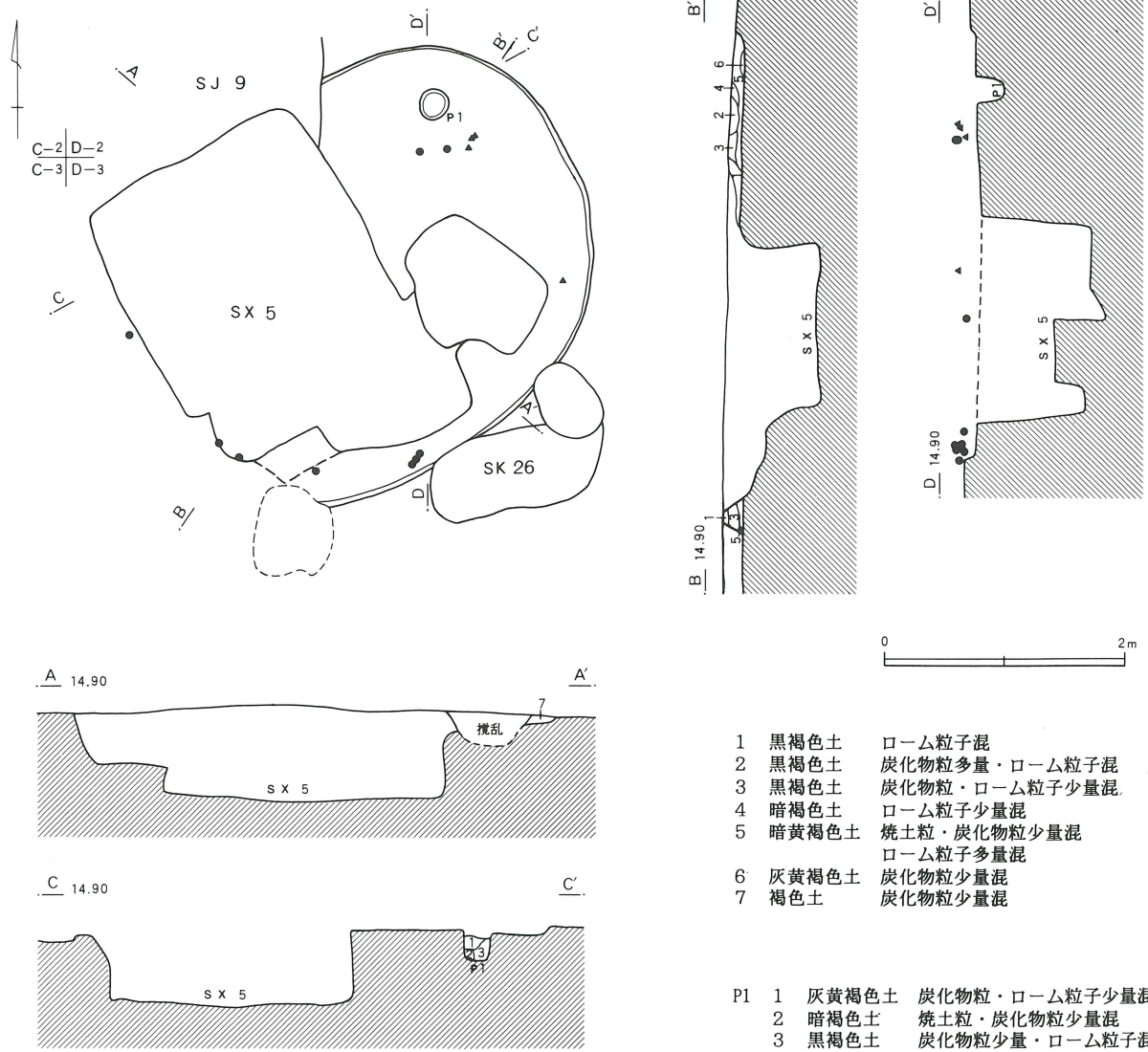
第16図 5号住居跡



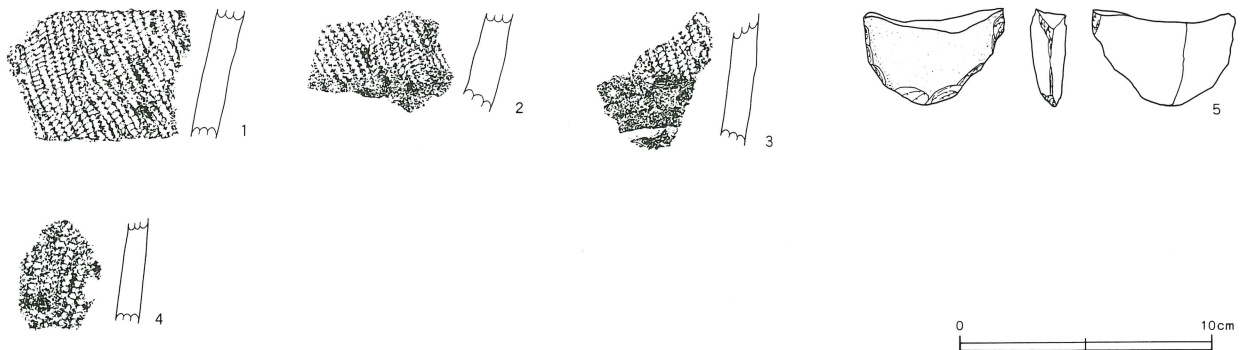
第17図 5号住居跡出土遺物



第18図 6号住居跡



第19図 6号住居跡出土遺物

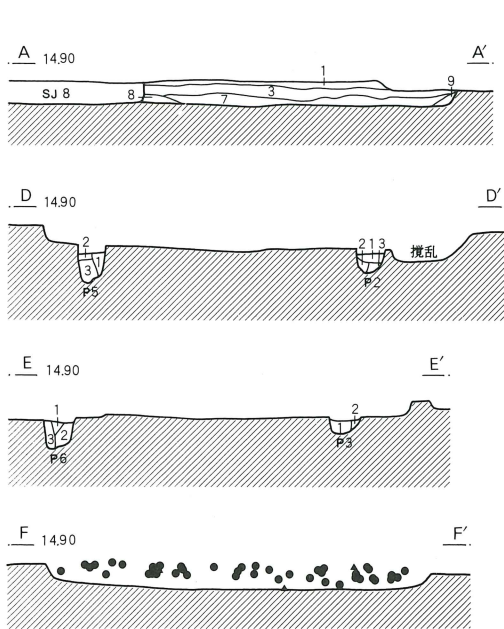
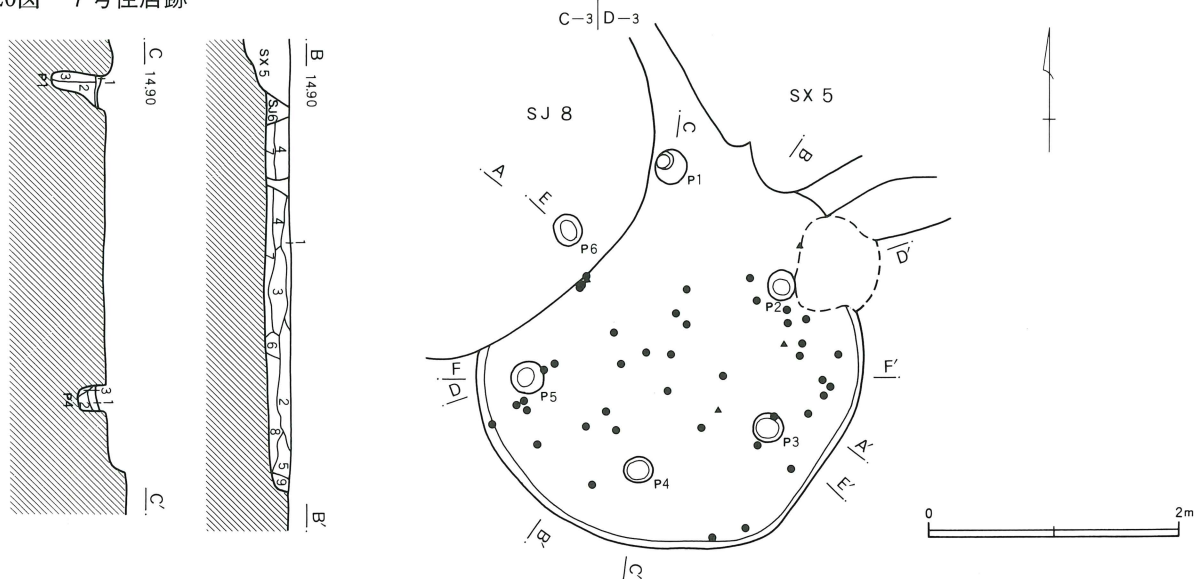


第7号住居跡出土遺物 (第21図 図版27)

1は深鉢の底部で、底部径8.7cm、現存高7.1cmになる。2は上げ底の深鉢であろう。1・2・6ともRL

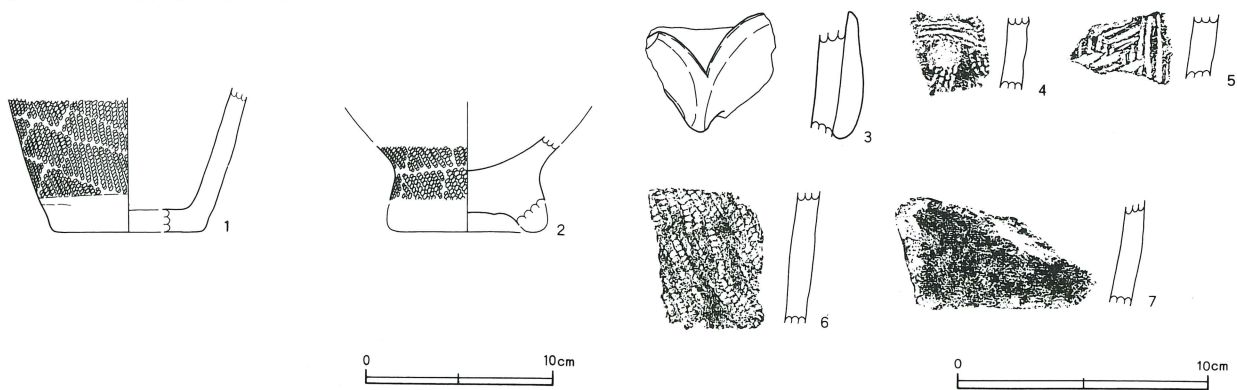
の縄文が施される。3は口縁部の突起の一部と考えられる。4・5は撚り糸が施される。7は胎土に雲母が混じり、無文である。

第20図 7号住居跡

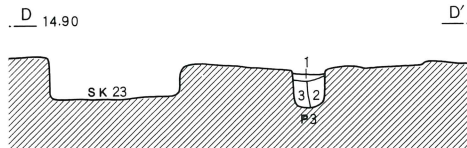
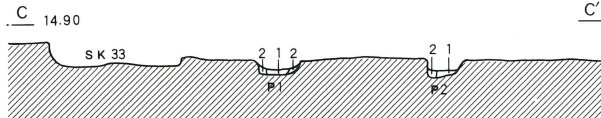
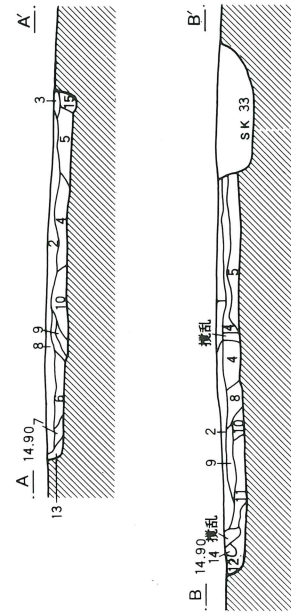
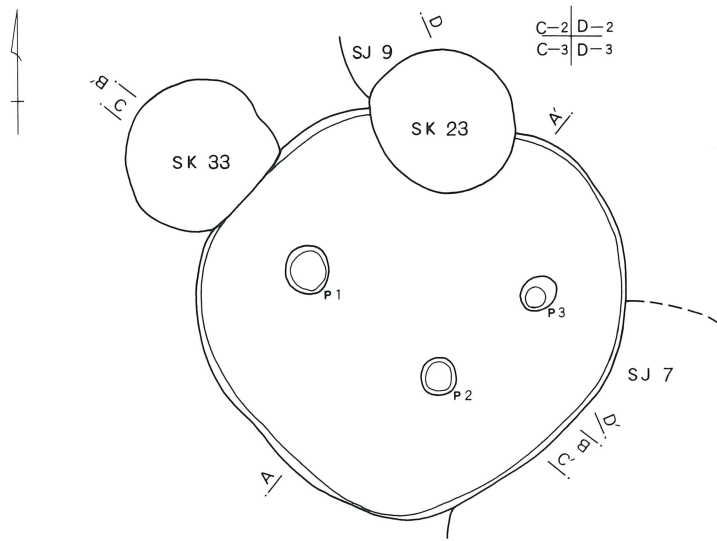


- | | | |
|---|-------|---------------|
| 1 | 黒褐色土 | 炭化物粒微量混 |
| 2 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒含まない |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 5 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子混 |
| 6 | 黒褐色土 | 軟い 炭化物粒多量混 |
| 7 | 暗褐色土 | 炭化物粒混 |
| 8 | 暗褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 9 | 褐色土 | 炭化物粒微量混 |
-
- | | | | |
|----|---|-------|-----------------|
| P1 | 1 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| P2 | 1 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| | 2 | 暗褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量混 |
| P3 | 1 | 黒褐色土 | |
| | 2 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| P4 | 1 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量混 |
| P5 | 1 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量混 |
| P6 | 1 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒微量混 |

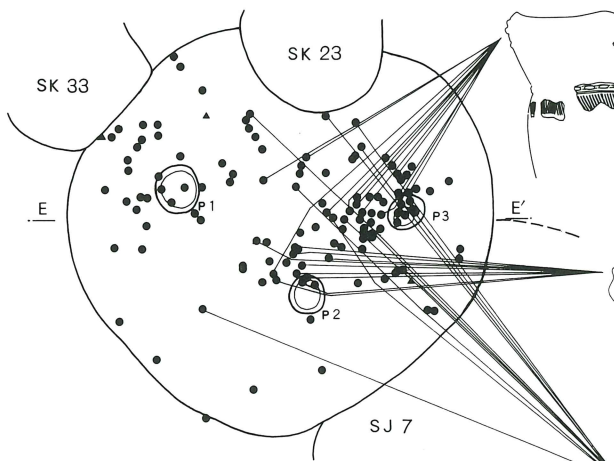
第21図 7号住居跡出土遺物



第22図 8号住居跡



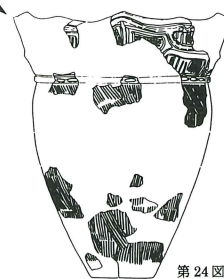
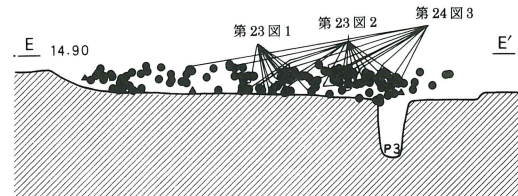
- | | | |
|----|-------|--------------------|
| 1 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量混 |
| 2 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 5 | 暗褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 6 | 暗褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 7 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒少量混 遺物出土多し |
| 9 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 遺物出土多し |
| 10 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 遺物出土多し |
| 11 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒微量混 |
| 12 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 13 | 褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 14 | 褐色土 | ロームブロック |
| 15 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |



- | | | | |
|----|---|-------|-----------------|
| P1 | 1 | 褐灰色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 2 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| P2 | 1 | 褐灰色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 2 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| P3 | 1 | 褐灰色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 2 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |

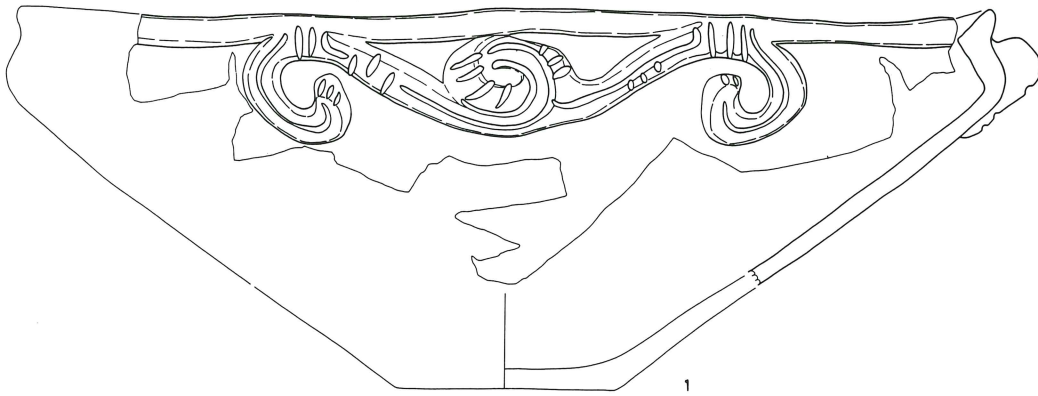
第23図2

第23図1

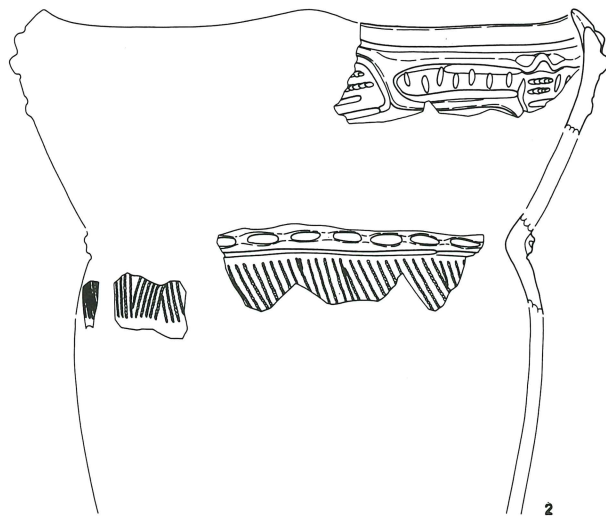
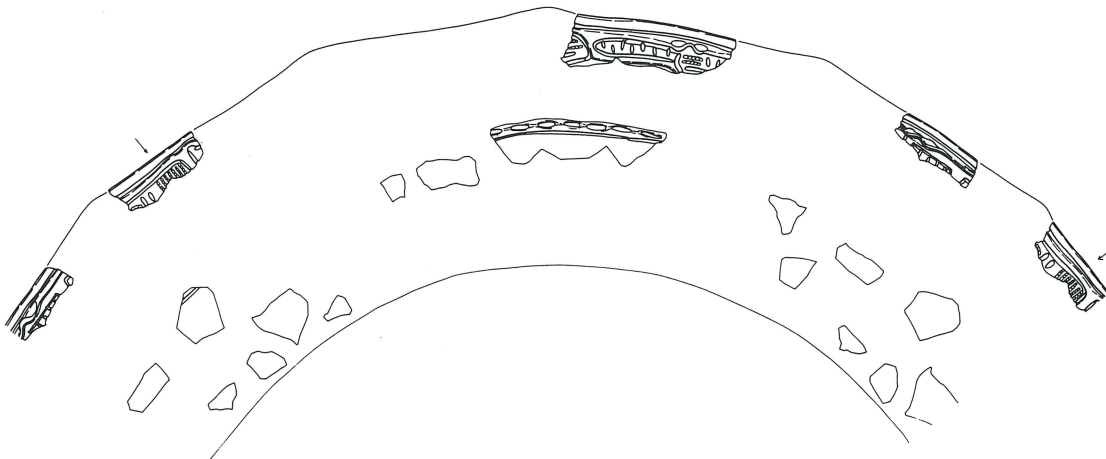


第24図3

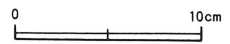
第23図 8号住居跡出土遺物(1)



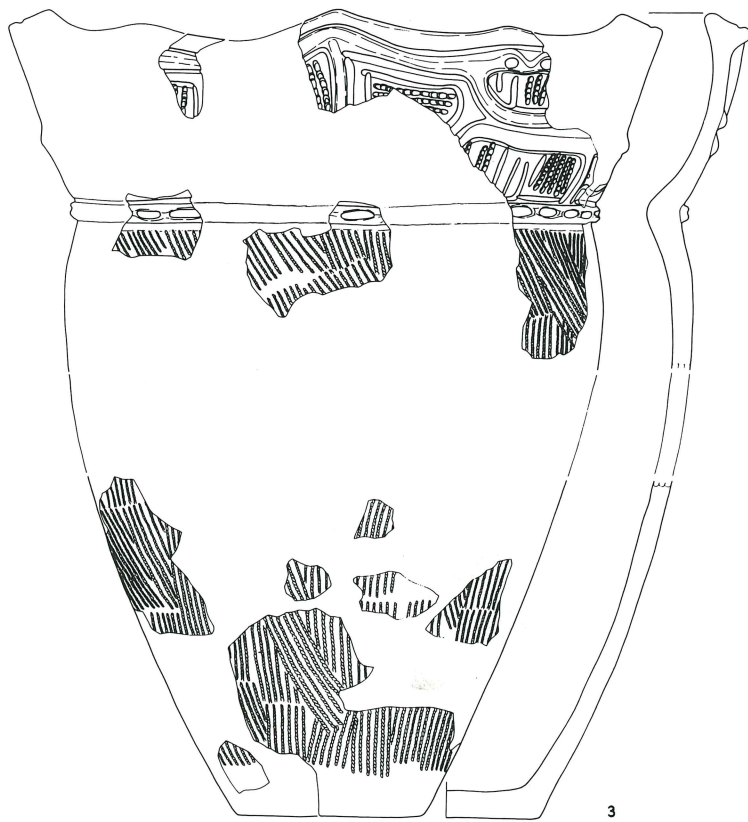
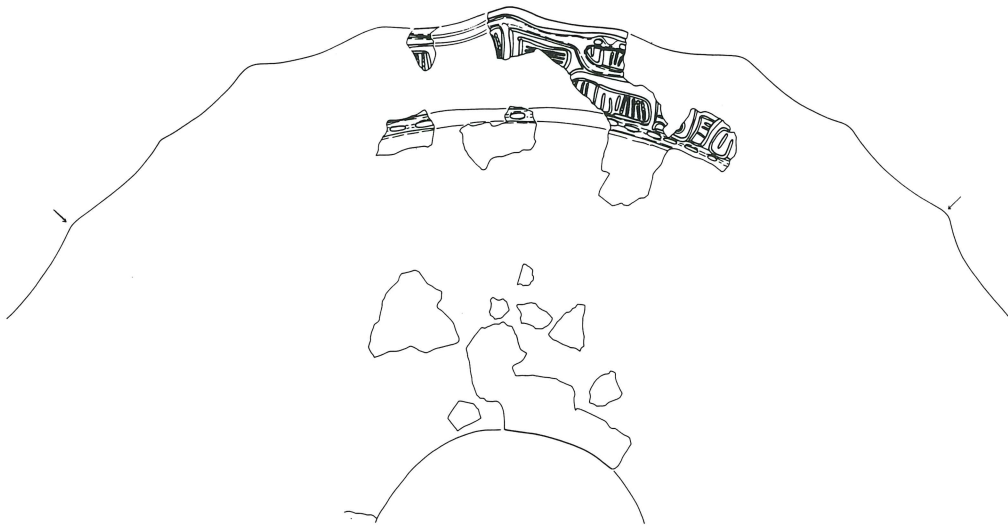
1



2

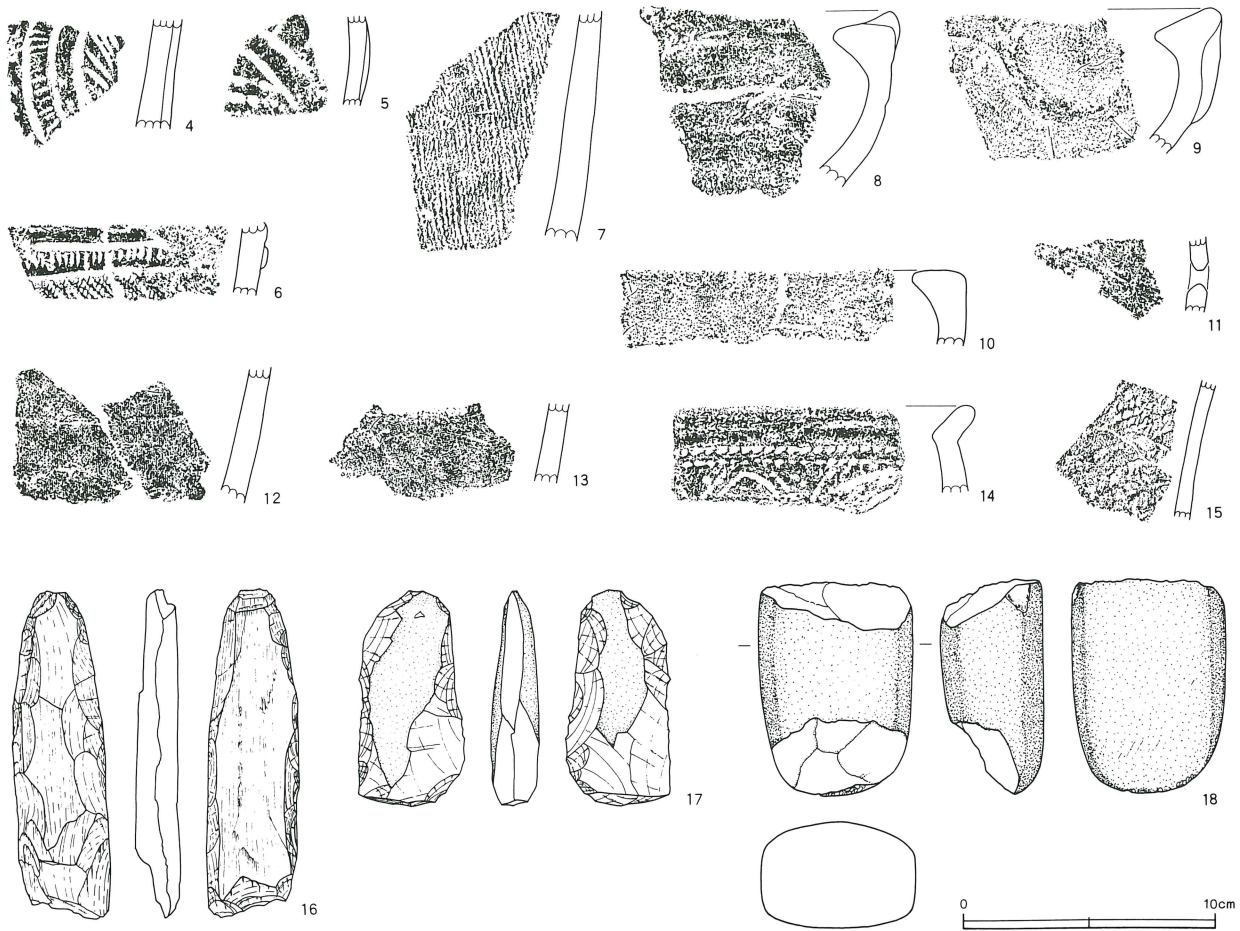


第24図 8号住居跡出土遺物(2)



0 10cm

第25図 8号住居跡出土遺物(3)



第8号住居跡 (第22図 図版7)

8号住居跡は調査区中央の北寄り、C-3グリッドに位置する。7号住・9号住と重複し、7号住・9号住より新しい。さらに23号・33号土壌により壊されている。原地形の標高約14.7m付近で検出された。住居跡のプランは、ほぼ円形である。平面規模は約3.42m×3.25mである。壁高は約20cmである。柱穴は3本確認できた。残りの1本は23号土壌により壊されたと考えられる。柱穴の直径は平均約28cm～33cmで、床面からの深さは pit3 で約40cmになる。

炉跡は検出されなかった。

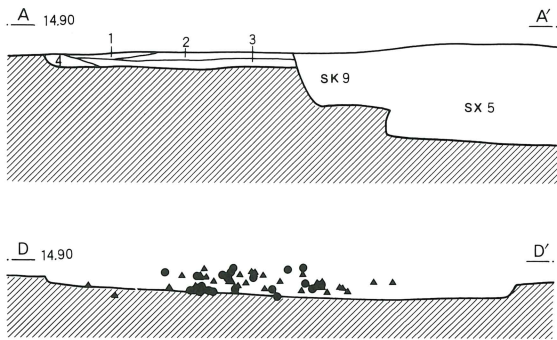
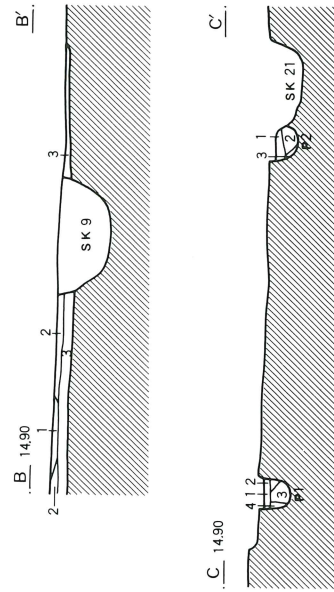
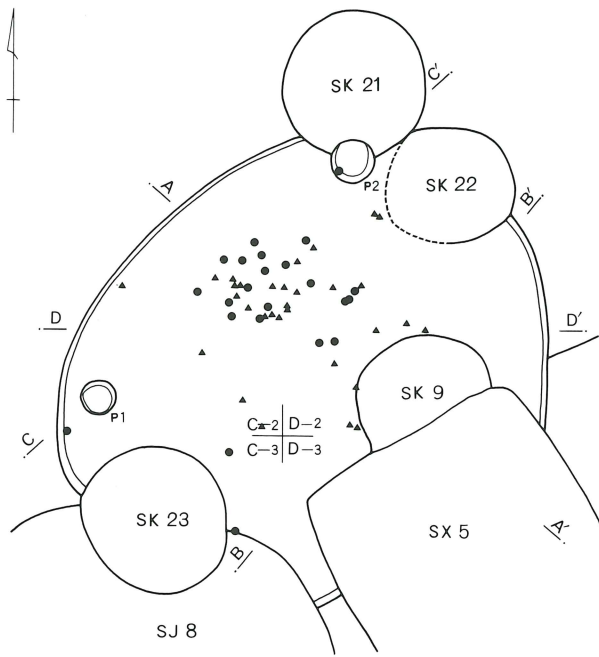
遺物の出土は全体に見られるが、pit2 及び pit3 の周辺に集中する傾向を示す。

第8号住居跡出土遺物 (第23～25図 図版21・27)

1は浅鉢である。口径は51.8cm、現存高は14.7cmに

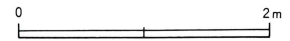
なる。完全に残っていればおよそ20.3cmぐらいの器高になるであろう。胎土は密で、焼成もしっかりしており、赤褐色を呈する。地文は無文で、口縁の部分に隆帯及び突起が付けられ、その上に沈線が施される。pit2の北側より集中して出土している。2は土器の残りは良くないが、4単位の波状口縁をもつ深鉢であると思われる。推定口径は約28cm、現存高は約16cmぐらいになるであろう。胎土は密で、焼成もしっかりしているが、表面の磨耗は激しい。黄褐色を呈する。口縁部には隆帯で区画文が施され、区画の内部は、沈線及び連続刺突が施される。頸部はくびれ、隆帯で仕切られる。隆帯上には連続して楕円状の沈線が施される。隆帯下の胴部には、全体に撚り糸(L)が施文される。pit3の西側に集中して出土している。3も2と同様の土器である。2に比べて若干残りがよく、ほぼ全形を

第26図 9号住居跡

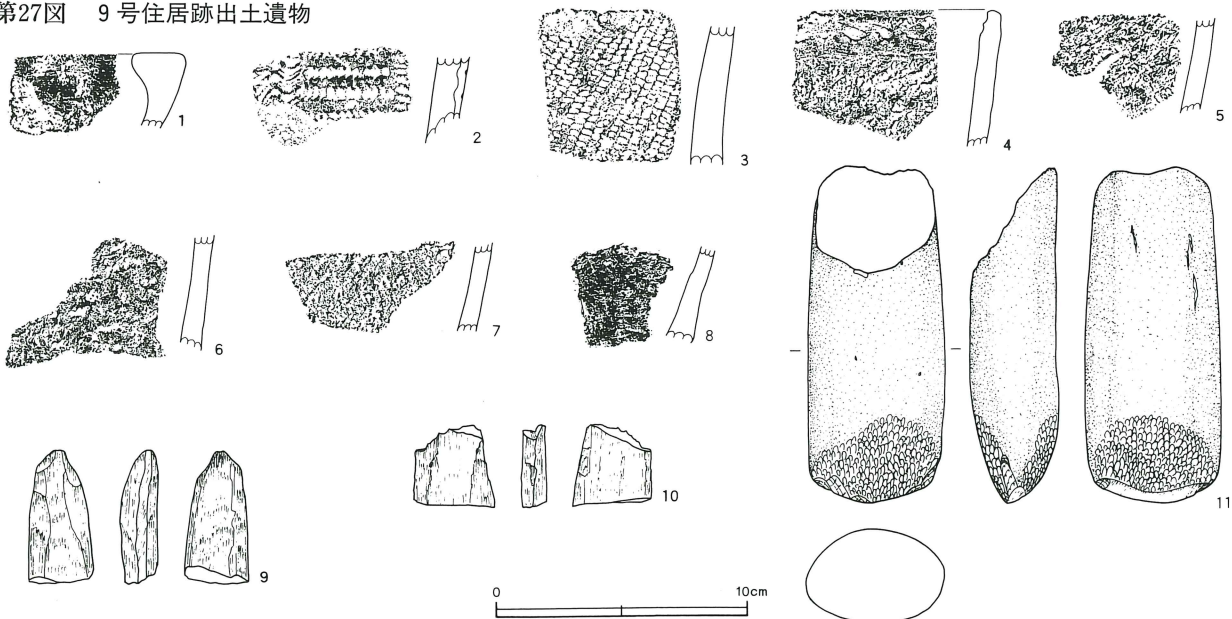


- 1 灰黄褐色土 炭化物粒多量混
- 2 暗褐色土 炭化物粒多量混
遺物出土多し
- 3 暗褐色土 炭化物粒少量
- 4 褐色土 炭化物粒多量混
・ローム粒子多量混

- P1 1 褐灰色土 炭化物粒混
- 2 暗褐色土 炭化物粒多量混
- 3 黒褐色土 ロームブロック混
- 4 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- P2 1 黒褐色土 炭化物粒多量混
- 2 暗褐色土 炭化物粒多量混
- 3 灰黄褐色土 炭化物粒少量混



第27図 9号住居跡出土遺物



復元できた。波状部は8カ所になると考えられるが、単位としては4単位になると考えられる。推定口径は約30.5cm、器高は約42.8cm、底部径は約9.8cmになると思われる。胎土は密で、焼成もしっかりしている。橙褐色を呈する。口縁部には隆帯で区画文が施され、区画の内部は、沈線及び連続刺突が施される。頸部はくびれ、隆帯で仕切られる。隆帯上には連続して楕円状の沈線が施される。隆帯下の胴部には、全体に撚り糸(L)が施文される。住居跡の中央部を中心に、1や2よりもやや広い範囲から出土している。4は半截竹管による半肉隆線と爪形文、5は隆帯と連続刺突による沈線、6は半肉隆線と爪形文、縄文(RL)、7は撚り糸(R)が施される。8～13は無文土器である。8～10は口縁部。11も口縁部近くの破片と考えられる。器面に小孔が穿たれているが、観察の結果、焼成以前に開けられたと考えられる。14は胎土に雲母を含み、角押文が施される。いずれも中期中葉の土器である。15は、後期中葉の土器と考えられる。

石器は3点出土した。16・17は打製石斧、18は磨製石斧である。16・17は完形品で、16は重量110g、17は85gである。18は基部と刃部が欠損している。

第9号住居跡(第26図 図版8)

9号住居跡は調査区中央の北寄り、いわゆるC・D-2・3グリッドの小竪穴住居跡が集中する一角に存在する。6号住及び8号住と重複するが、9号住が最も古い。また、9号・21号・22号・23号の各土壇及び中世の1号竪穴状遺構により壊されている。原地形の標高約14.7m付近で検出された。住居跡のプランは楕円形で、規模は約4.15m×3.35mになる。壁高は約12cmと浅い。柱穴は2本しか確認できなかった。柱穴の直径は約30cm～35cm、床面からの深さは、約28cmである。炉跡は検出できなかった。

当住居跡に伴う遺物は少なく、北西側約4分の1ぐらいの範囲に散見する。

第9号住居跡出土遺物(第27図 図版27)

1は口縁部の破片で無文である。2はヘラ先による連続刺突と爪形文で施文される。3はRLの縄文が施

される。1・2は中期中葉の、3は中期後葉のものと考えられる。4～8は同一個体である。後期中葉の土器と考えられる。

石器は3点出土した。9・10は打製石斧の破片、11は磨製石斧である。11は基部を欠いているが410gとかなり重い。

第10号住居跡(第20～33図 図版8～11)

10号住居跡は調査区の南西寄り、C-5グリッドに位置する。原地形の標高約14.8m付近で検出された。他の住居跡との重複はなかったが、住居を拡張した痕跡が見られた。便宜上、拡張後の住居跡を10(a)号住居跡、拡張前の住居跡を10(b)号住居跡とした。住居跡のプランは、10(a)号、10(b)号ともやや五角形に近い円形である。

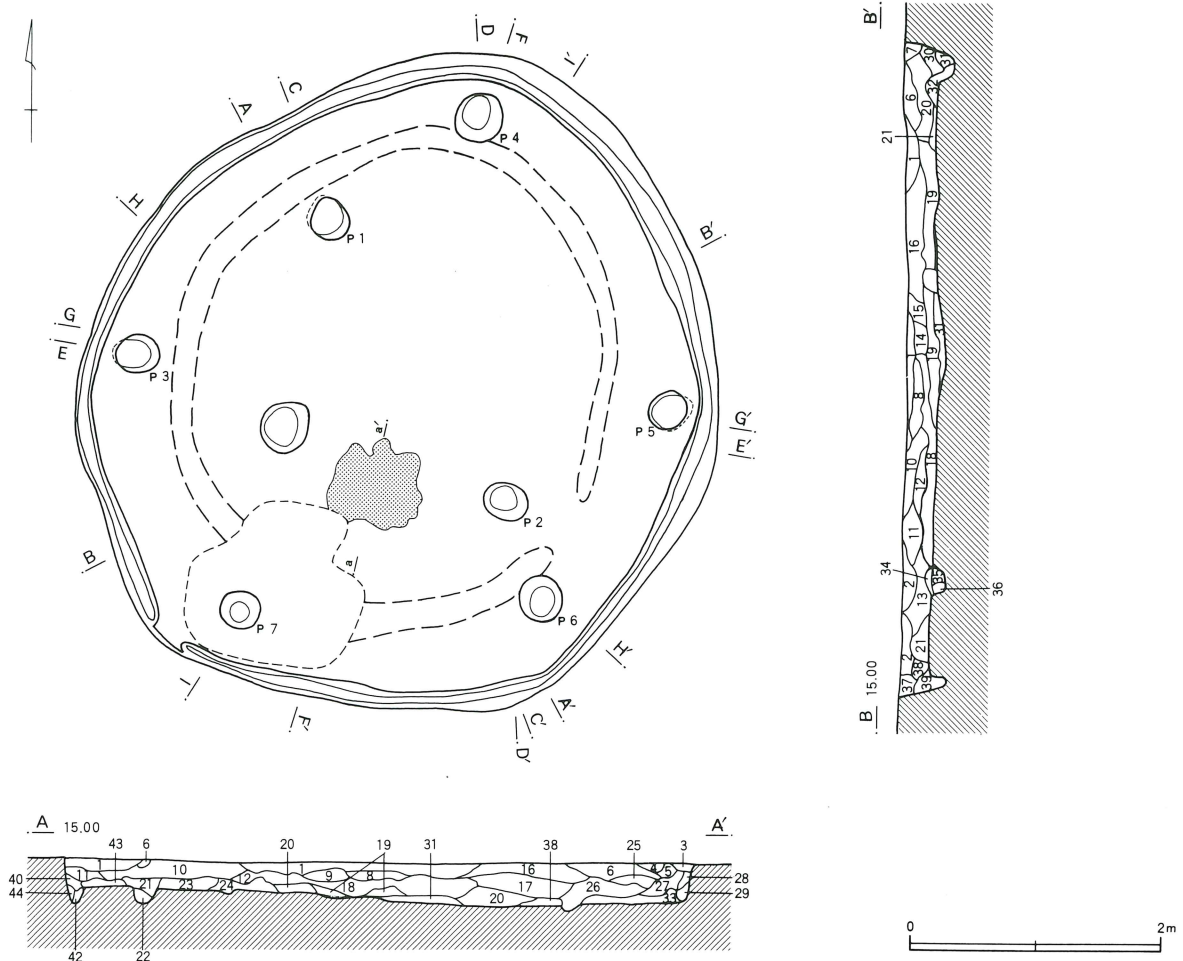
10(a)号住居跡(第28図)の規模は5.16m×4.98mになる。住居跡は深く、壁高は約25cmになる。壁周溝が巡り、壁周溝の深さは、深いところで住居跡の確認面から約40cmになる。柱穴は7本確認できた。うち5本は壁際に巡っている。柱穴の直径は30cm～35cm、床面からの深さは、pit3やpit8で約70cmである(第29図)。

炉跡は住居跡の中央やや南西よりに確認された。炉跡の上面には広い範囲で焼土が堆積していた。住居跡の南西部分は木の根により後世の攪乱を受けているが、その際にこの炉跡も南端が攪乱を受けたようである。火床面はカリカリに焼けており、その南側には約30cmほどの深さのpitが見られた。このpitは直径が約40cmほどになり、土器が埋設されていた可能性もある(第31図)。

柱穴及び炉の配置からこの住居跡の入り口はpit4とpit5の間であった可能性が強い。

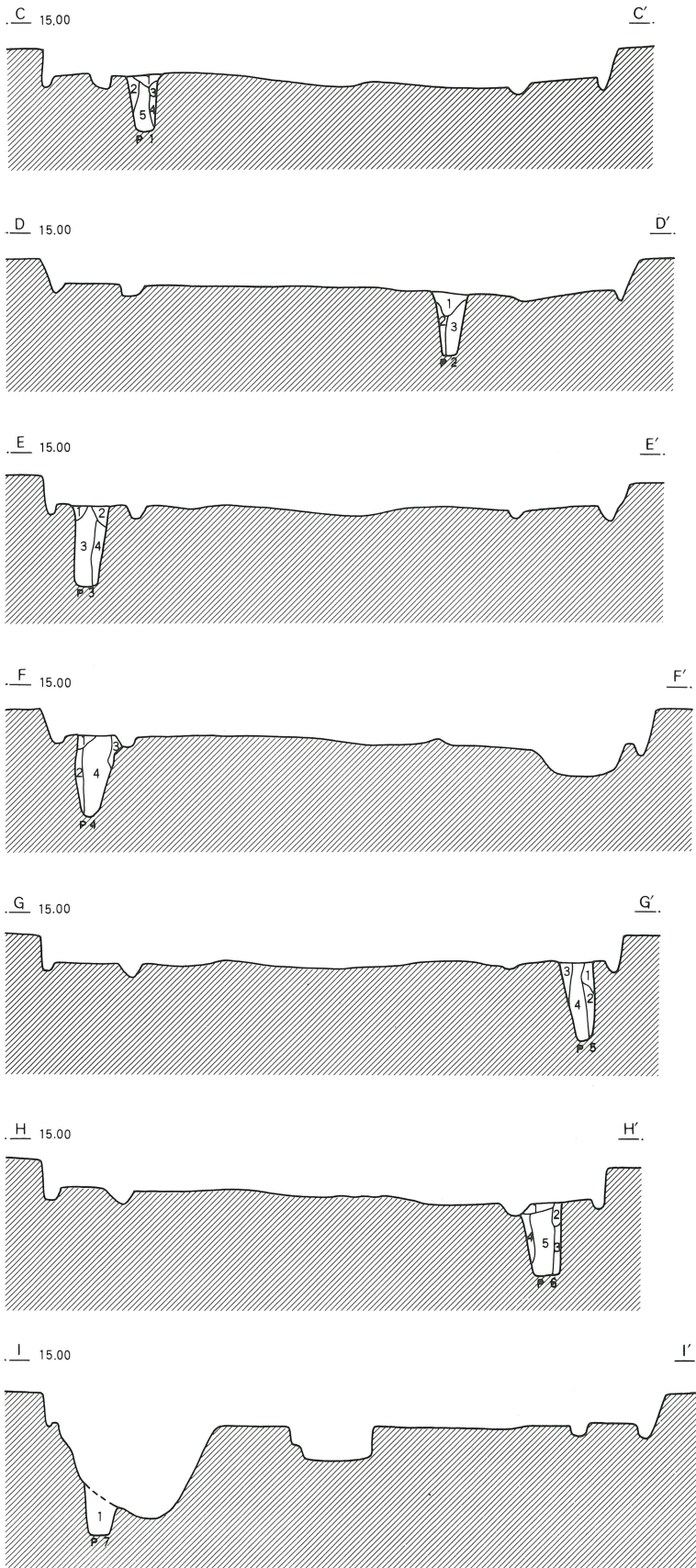
10(b)号住居跡(第30図)の規模は3.78m×3.60mになる。住居跡の床は、拡張した住居跡と共有しており、確認面からの住居跡の深さはやはり25cmぐらいであったと考えられる。壁周溝が巡っていたため、拡張前の住居跡の規模を知ることができた。壁周溝の深さは、床面から約15cmになる。柱穴は5本確認できた。柱穴

第28図 10(a)号住居跡(1)



- | | | | | | |
|----|-------|-------------------------|----|-------|-------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 | 24 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子少量混 |
| 2 | 褐灰色土 | 炭化物粒・ローム粒子多量混 | 25 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量混 |
| 3 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒少量混 | 26 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量
・ローム粒子多量混 |
| 4 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量混 | 27 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量混 |
| 5 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒多量混 | 28 | 灰黄褐色土 | 地山の崩落 |
| 6 | 褐灰色土 | 炭化物粒・ローム粒子少量混 | 29 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 7 | 褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子少量混 | 30 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒少量混 | 31 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 9 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量混 | 32 | 褐色土 | 炭化物粒少量・
ロームブロック多量混 |
| 10 | 褐灰色土 | 焼土・炭化物粒少量
・ローム粒子多量混 | 33 | 暗黄褐色土 | 炭化物粒少量混
よく固められている |
| 11 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量
・ローム粒子多量混 | 34 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 12 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 | 35 | 明黄褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子少量混 |
| 13 | 暗褐色土 | 炭化物粒少量混 | 36 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量・
ロームブロック多量混 |
| 14 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 | 37 | 褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 15 | 暗黄褐色土 | ローム粒子少量混 | 38 | 暗褐色土 | ローム粒子多量混 |
| 16 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 | 39 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子少量混 |
| 17 | 暗褐色土 | 炭化物粒多量混 | 40 | 褐灰色土 | 炭化物・ローム粒子微量混 |
| 18 | 黒褐色土 | 焼土粒多量・炭化物粒少量混 | 41 | 灰黄褐色土 | ロームブロック多量混 |
| 19 | 黒褐色土 | 焼土粒多量・炭化物粒少量混 | 42 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 20 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量混 | 43 | 暗黄褐色土 | 炭化物少量混
よく固められている |
| 21 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒少量混 | 44 | 明黄褐色土 | 地山の崩落 炭化物少量混 |
| 22 | 褐灰色土 | ロームブロック多量混 | | | |
| 23 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量混
ローム粒子少量混 | | | |

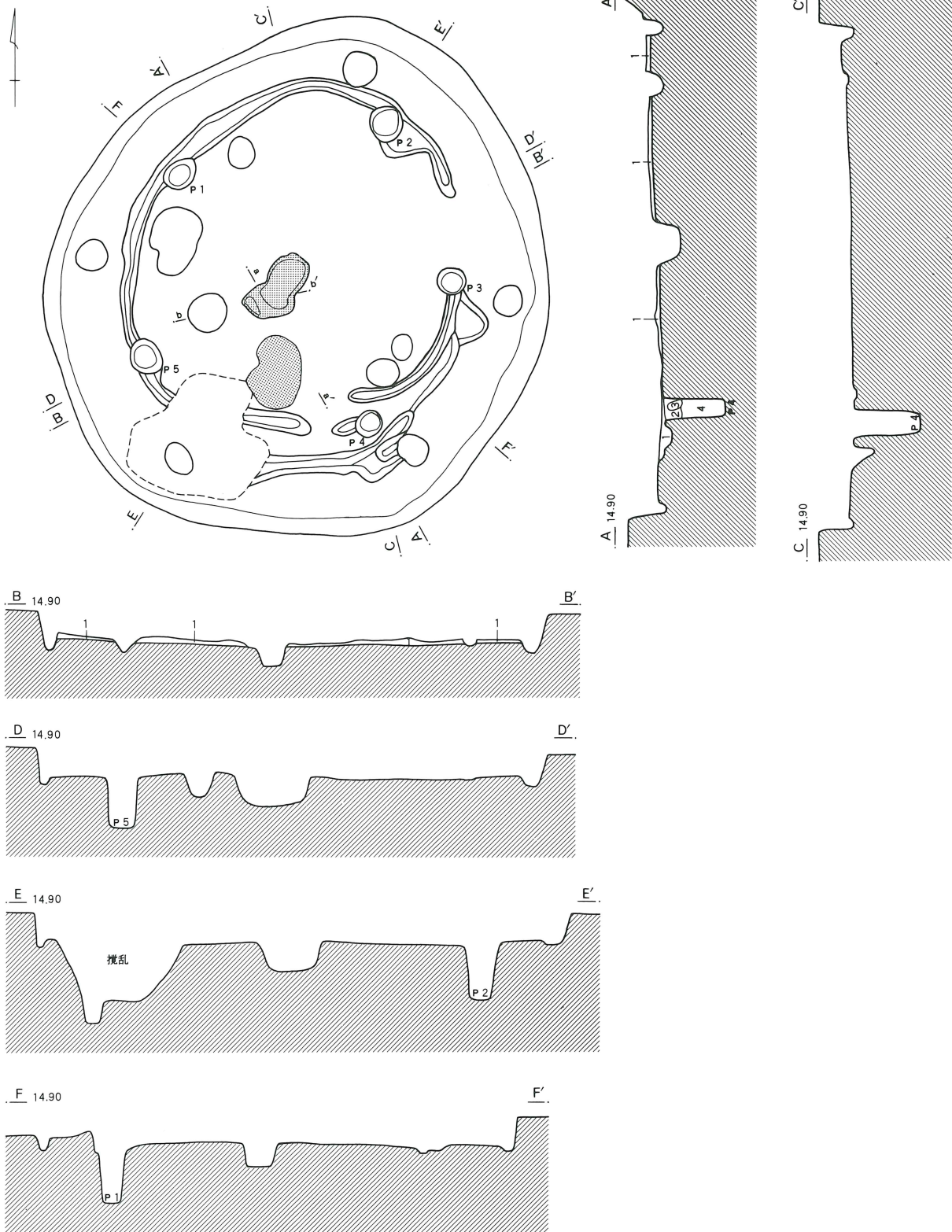
第29図 10(a)号住居跡(2)



- | | | | |
|----|---|------|--------------------|
| P1 | 1 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物多量混 |
| | 2 | 褐色土 | ハードローム多量混 |
| | 3 | 暗褐色土 | ハードローム |
| | 4 | 黄褐色土 | 軟 ローム粒子微量混 |
| | 5 | 褐灰色土 | 炭化物粒
ローム粒子少量混 |
| P2 | 1 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量
ローム粒子少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | ローム粒子微量混 |
| | 3 | 褐灰色土 | 炭化物粒少量
ローム粒子多量混 |
| P3 | 1 | 黒褐色土 | 焼土粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 |
| | 3 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量
ローム粒子多量混 |
| | 4 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 |
| P4 | 1 | 黒褐色土 | 焼土多量混 |
| | 2 | 褐灰色土 | ローム粒子多量混 |
| | 3 | 黒褐色土 | ロームブロック混 |
| | 4 | 黒褐色土 | ローム粒子多量混 |
| P5 | 1 | 黒褐色土 | 焼土少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 3 | 褐灰色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 4 | 黒褐色土 | ローム粒子多量混 |
| P6 | 1 | 黒褐色土 | 焼土粒少量混 |
| | 2 | 黒褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 3 | 褐灰色土 | 炭化物粒多量混 |
| | 4 | 暗褐色土 | ローム粒子多量混 |
| | 5 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 |
| P7 | 1 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 |



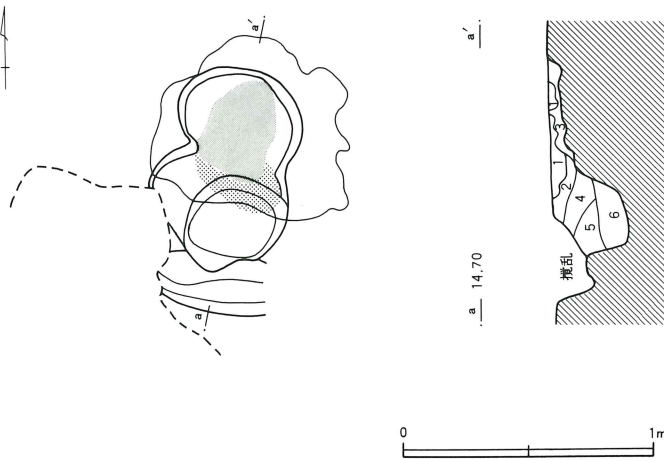
第30図 10(b)号住居跡



- | | | |
|---|-------|---------------------|
| 1 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量混 固められている |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒混 ロームブロック多し |
| 3 | 黄褐色土 | ロームブロック |
| 4 | 褐灰色土 | ロームブロック少量混 |

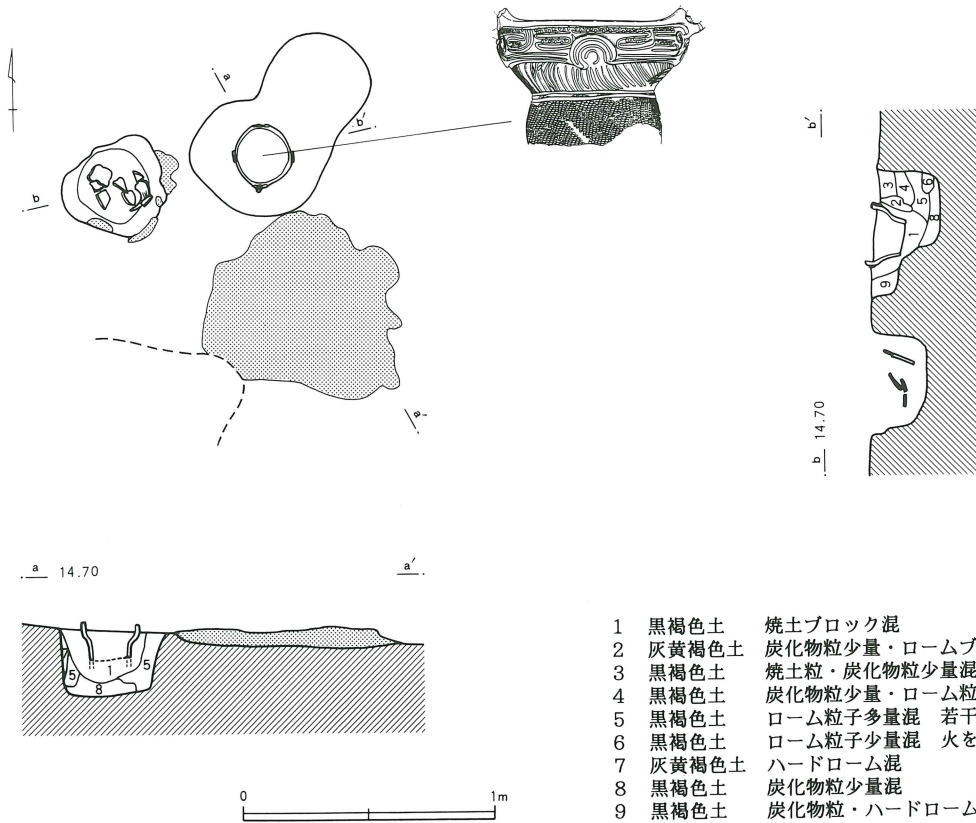
0 2m

第31図 10(a)号住居跡炉跡



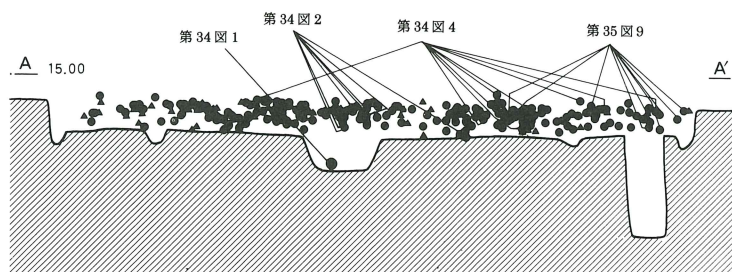
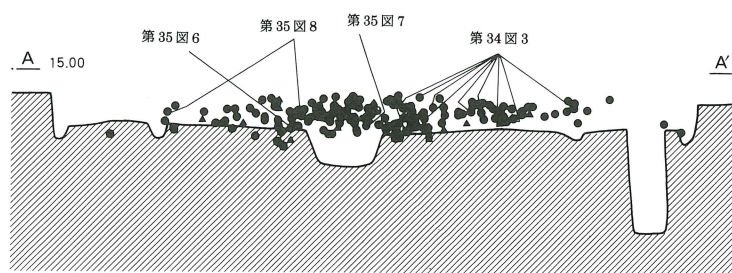
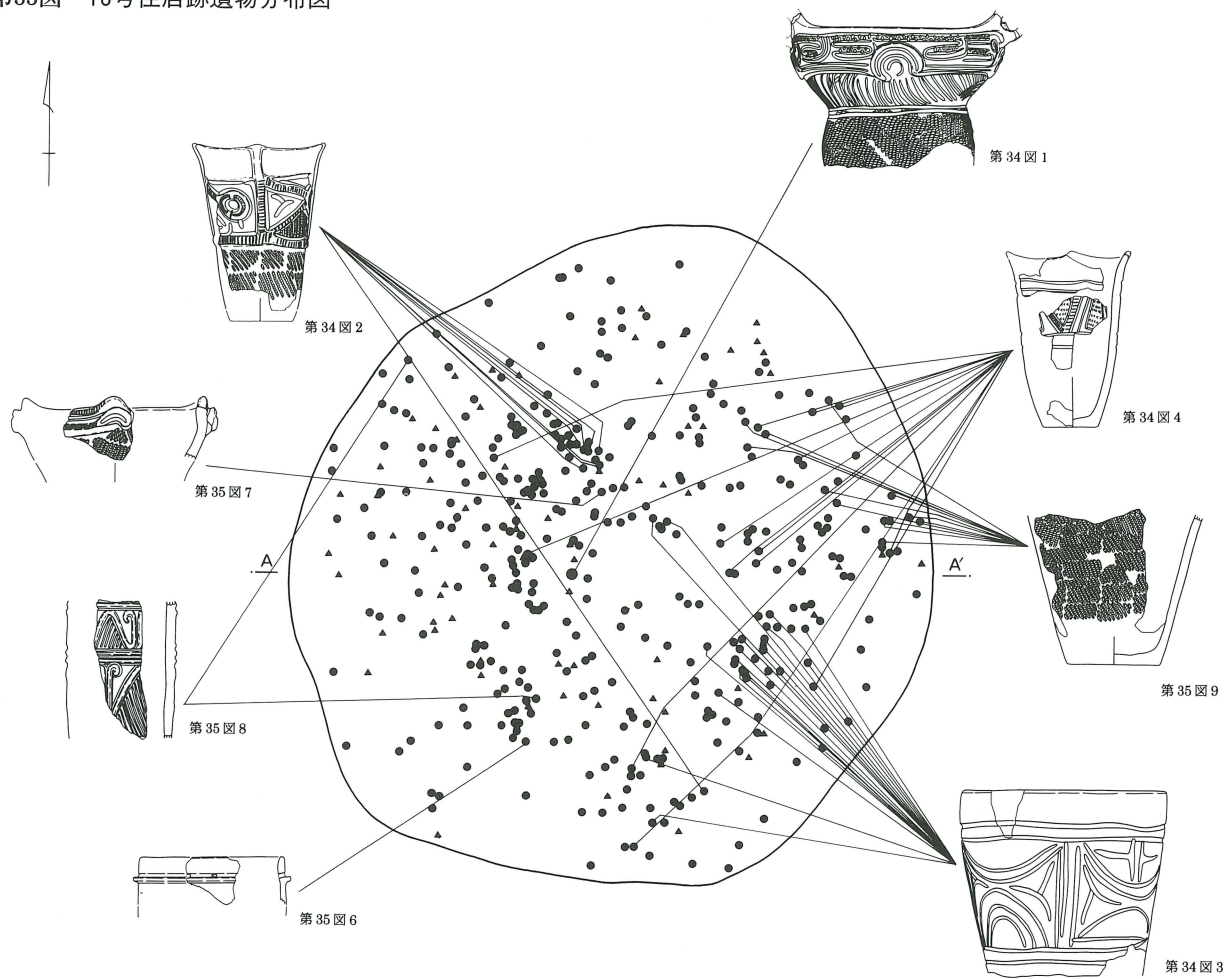
- | | | |
|---|-------|---------------|
| 1 | 明赤褐色土 | 焼土 カリカリに焼けている |
| 2 | 暗赤褐色土 | 焼土ブロック多量混 |
| 3 | 暗赤褐色土 | 焼土粒・炭化物粒多量混 |
| 4 | 灰黄褐色土 | 硬化面 |
| 5 | 褐色土 | 炭化物粒多量混 |
| 6 | 暗褐色土 | 炭化物粒・ローム粒子多量混 |

第32図 10(b)号住居跡炉跡

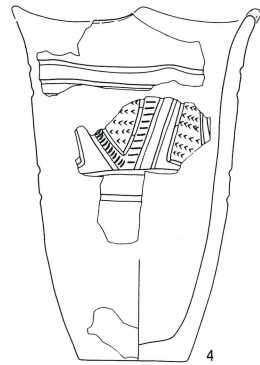
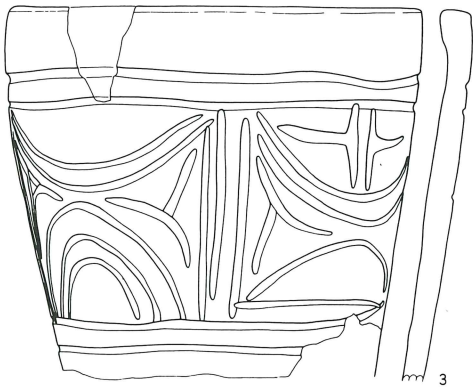
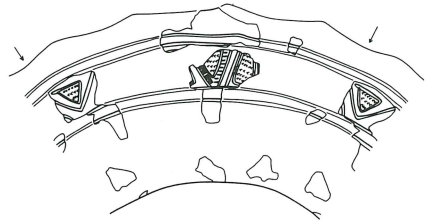
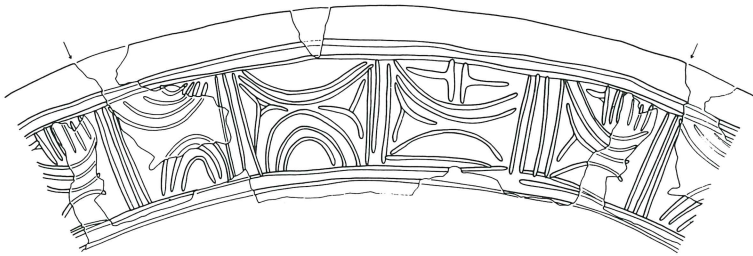
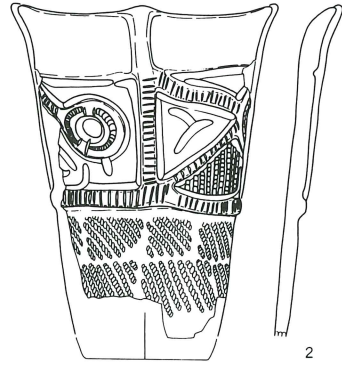
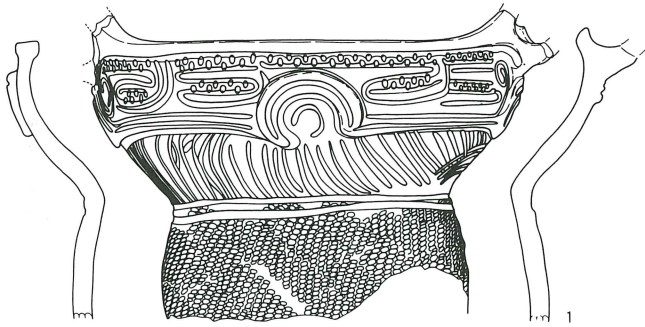
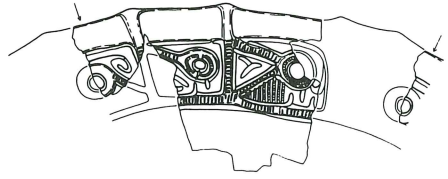
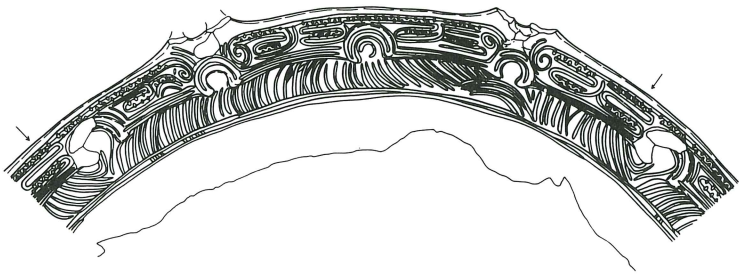


- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土ブロック混 |
| 2 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒少量・ロームブロック混 |
| 3 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物粒少量混 |
| 4 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量・ローム粒子多量混 |
| 5 | 黒褐色土 | ローム粒子多量混 若干火を受けている |
| 6 | 黒褐色土 | ローム粒子少量混 火を受けている |
| 7 | 灰黄褐色土 | ハードローム混 |
| 8 | 黒褐色土 | 炭化物粒少量混 |
| 9 | 黒褐色土 | 炭化物粒・ハードローム少量混 |

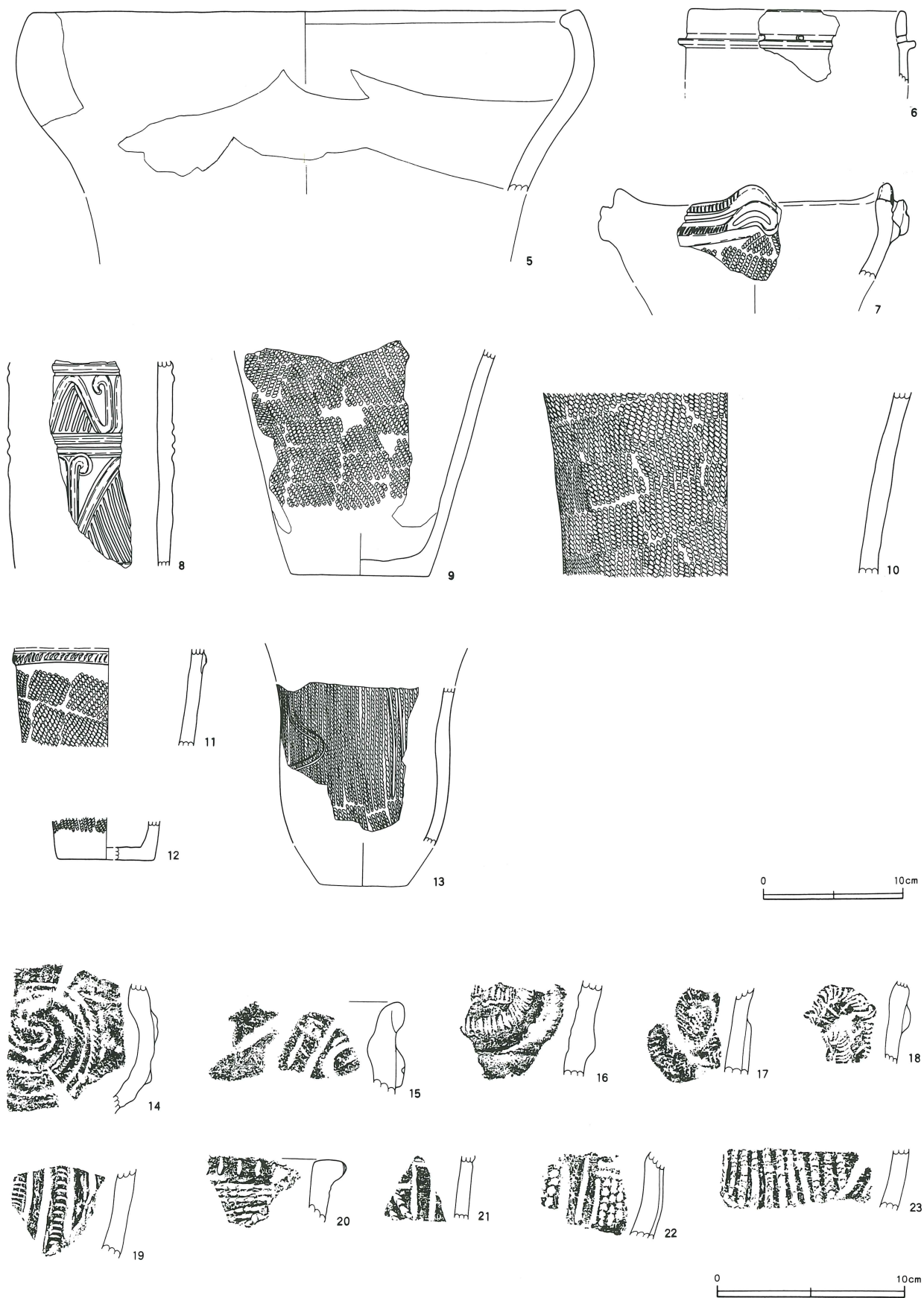
第33图 10号住居跡遺物分布图



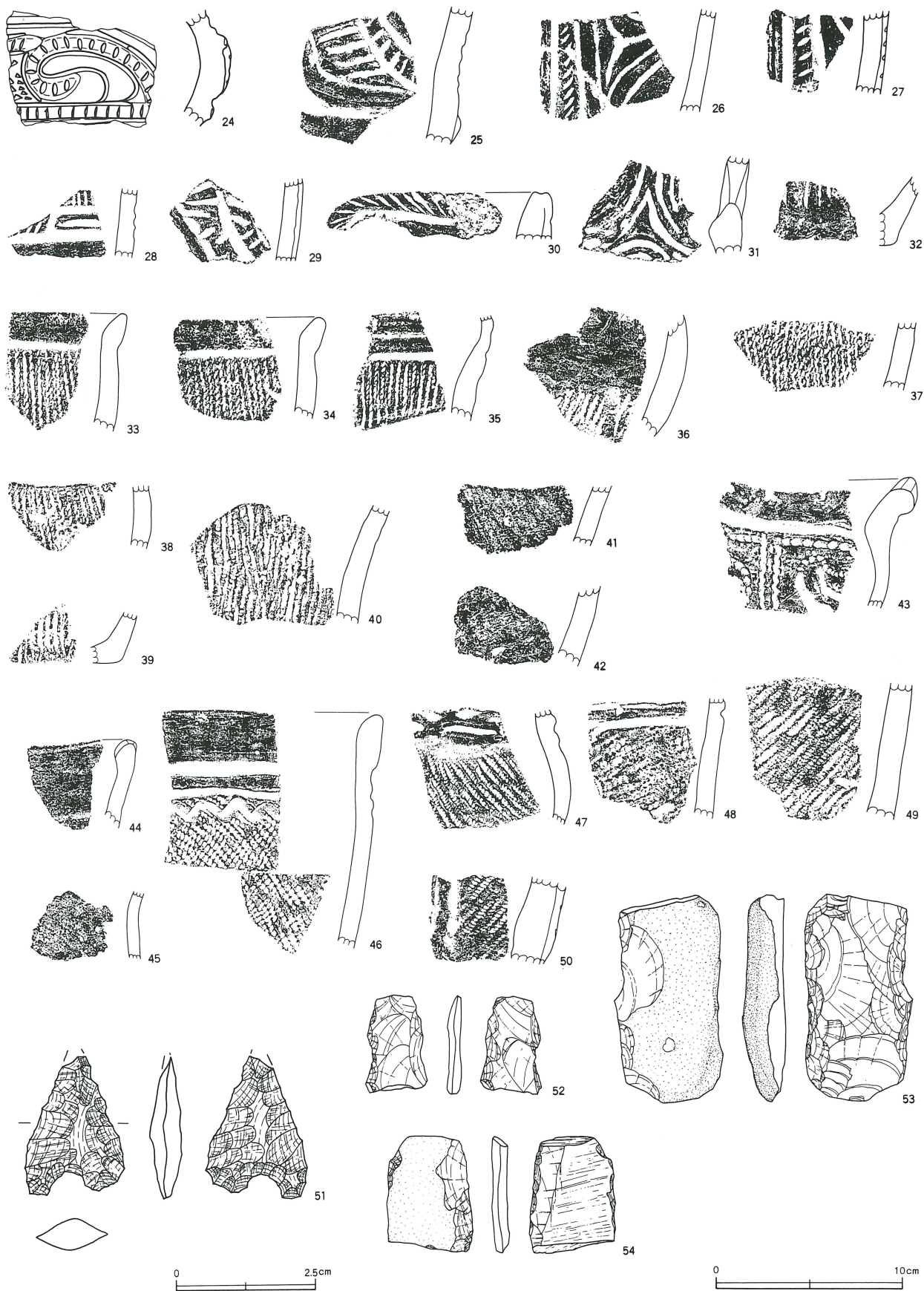
第34图 10号住居跡出土遺物(1)



第35图 10号住居跡出土遺物(2)



第36图 10号住居跡出土遺物(3)



の直径は25cm～35cm、床面からの深さは、pit2で約55cm、pit4で約65cmである（第30図）。

炉跡は住居跡の中央やや南西よりに確認された。炉には直径22cmほどの土器が埋設されていたが、火床面は残っていなかった。なお、この埋設土器の西側には直径約36cm、深さ約20cmほどの縁が少し焼けているpitが検出された（第32図）。

柱穴及び炉の配置、周溝が途切れることなどから、この住居跡の入り口はpit2とpit3の間であったのではないだろうか。入り口が南東部にあたること、拡張した際の入り口部と思われる空間と重なることなどからもその可能性が強いと思われる。

遺物は多量出土しており、炉体土器を除いて、10(a)号住と10(b)号住の遺物を分けることが不可能だったので以下に一括して記述する。

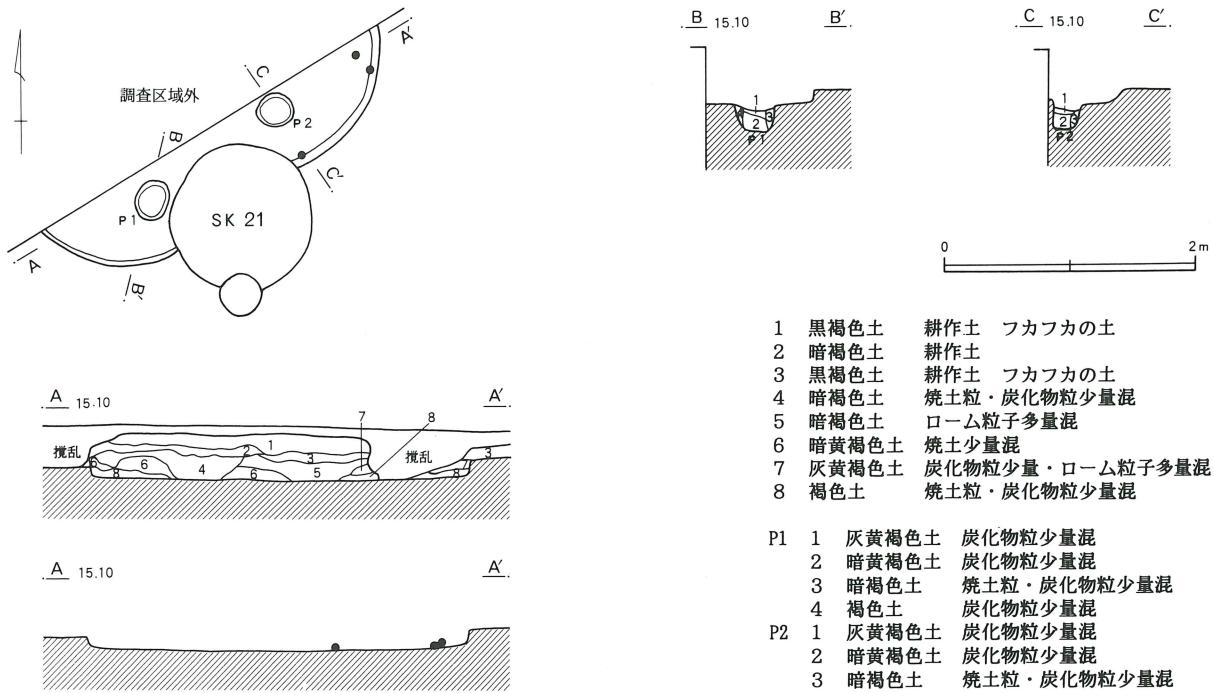
第10号住居跡出土遺物（第34～36図 図版22・23・28・29）

1は炉体土器として用いられていた。下半部と口縁部の突起を欠く。口径は22cm、現存高は15cmになる。胎土は密で、焼成もしっかりしている。色調は赤褐色である。二次的に火を受けているため比較的脆くなっているが、ボロボロではない。平縁の土器で突起が二箇所につく。口縁部には4単位の貼付文が付き、その間が、「コ」字状連続文と沈線で装飾される。頸部がくびれ、沈線によって口縁部と胴部文様帯が区画される。口縁部文様帯と胴部文様帯の区画の間は、浅い沈線によって埋められる。胴部は縄文（RL）が施される。2は炉の北側の比較的床面に近い覆土中より出土している。口径は13.5cm、現存高は17.7cmになる。胎土は密で、焼成もしっかりしている。色調は黄褐色である。口縁部は無文で、4単位の小波状になる。その下部は隆帯により4単位の区画され、区画の内部は三叉状の文様や連続刺突による沈線、薔薇状の隆帯などで装飾される。下半部には縄文（RL）が施される。3は住居跡南東よりの覆土中より集中して出土している。口径は21.7cm、現存高は19.7cmになる。胎土は粗く、砂粒が多く混じる。焼成は良好で、色調は黒褐色である。

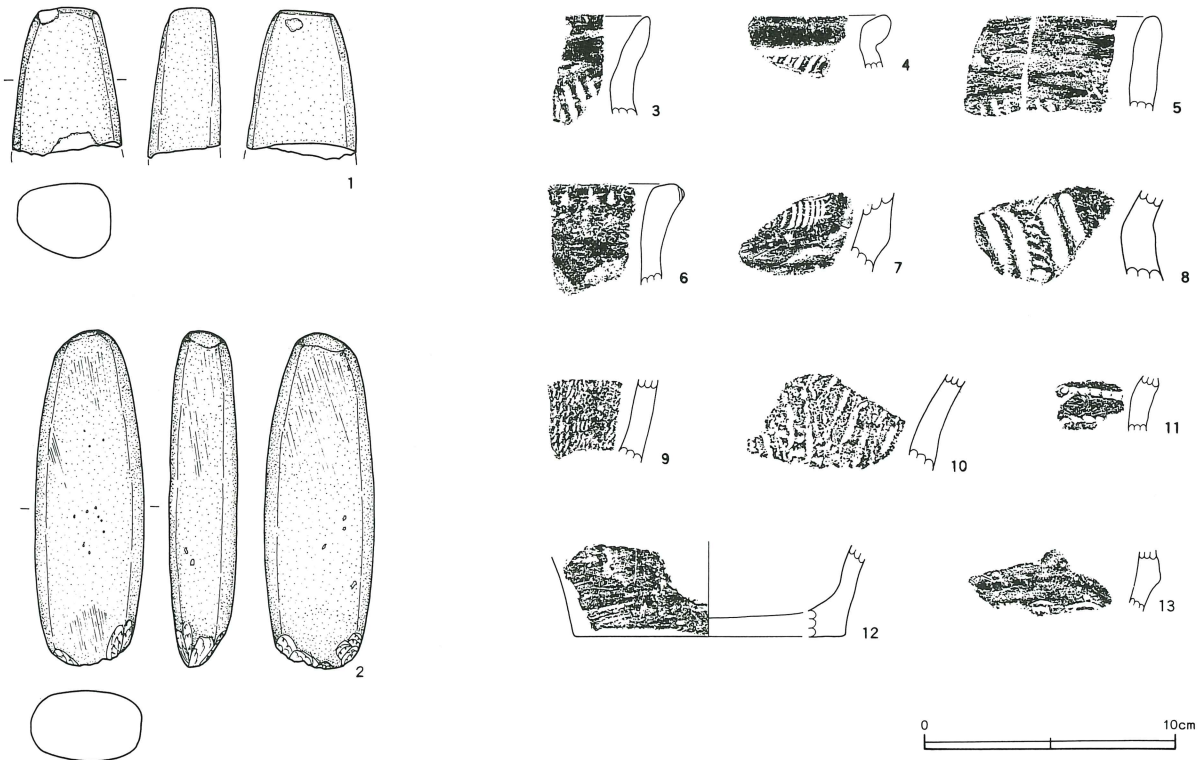
平縁で口縁は無文になる。横走る2本の沈線により、口縁部と胴部下半がそれぞれ区画され、その間が縦方向の沈線で、さらに4単位の区画される。区画の内部は、弧状や三叉状の沈線により施文される。

4は住居跡の東側を中心に広範囲から出土している。比較的覆土上半より出土している。推定口径は12.7cm、推定高は18.8cmになる。胎土は密で、焼成も良い。色調は暗赤褐色である。口縁は4単位の波状になると思われる。口縁直下は無文で、横走る2本の沈線により、口縁部と胴部下半がそれぞれ区画され、その間が連続する三角形で沈線区画され、内部が撚り糸の側面圧痕（L）や、爪形文、連続刺突などで施文される。胴部下半は無文と思われる。5は10(b)号住の炉跡の西側のpitより出土した。推定口径は39.2cm、現存高は12.9cmになる。胎土は密で、焼成も良い。色調は明褐色である。平縁で無文の土器である。6は有孔鏝付土器の破片である。住居跡南西寄りの床面から出土している。推定口径は15.4cm、現存高は5.1cmになる。胎土は密で、長石がわずかに混じる。焼成は良好。色調は橙褐色である。穿孔後、内面をナデで仕上げている。7は住居跡中央部の床面から出土している。推定口径は19.1cm、現存高は6.7cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は橙褐色である。口縁は4単位の波状になると思われ、口唇部には2本の隆帯がめぐり、隆帯上には刻みが入る。口縁部には縄文（LR）が施される。8は覆土の中程から出土している。推定径は12.0cm、現存高は14.5cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は黄褐色である。胴部破片で半肉隆線と沈線で施文される。9は住居跡の北東寄りからまとまって出土している。深鉢の下半部で底部径は9.8cm、現存高は16.1cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は褐色である。縄文（RL）が施される。10は深鉢の胴部破片である。最大径は26.4cm、現存高は12.8cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗褐色である。縄文（LR）が施される。11は深鉢の胴部破片である。最大径は13.6cm、現存高は6.8cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は黄褐色である。隆帯上には刻

第37図 11号住居跡



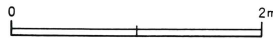
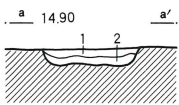
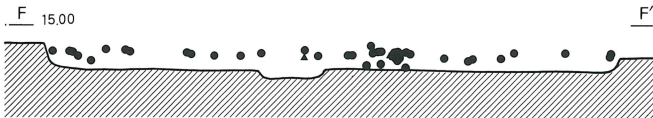
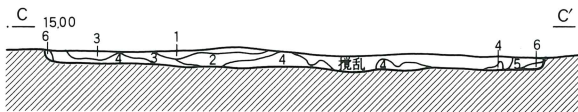
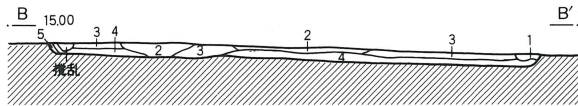
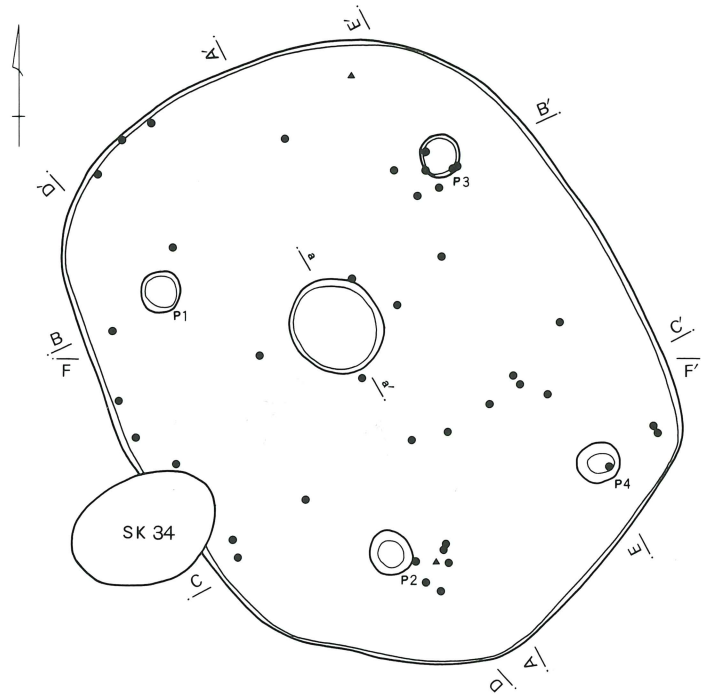
第38図 11号・12号住居跡出土遺物



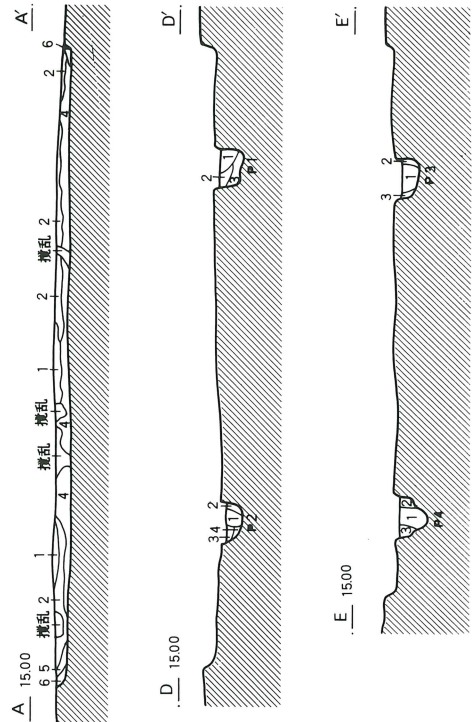
みが入り、縄文 (LR) が施される。12は深鉢の底部である。底部径は6.8cm、現存高は2.8cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は明褐色である。縄文 (R

L) が施される。13は深鉢の胴部破片である。最大径は12.7cm、現存高は11.2cmになる。胎土は密で、焼成は良好。色調は黄褐色である。地文は撚り糸 (L) が

第39図 12号住居跡



- 1 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒多量混・ロームブロック混



- 1 褐灰色土 炭化物粒微量・ローム粒子少量混
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒多量・ローム粒子少量混
- 3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒微量混
- 4 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- 5 暗褐色土 炭化物粒少量混
- 6 褐色土 炭化物粒少量混

- P1 1 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- 2 暗黄褐色土 炭化物粒多量混
- 3 暗褐色土 炭化物粒多量混
- P2 1 暗黄褐色土 炭化物粒少量混
- 2 暗褐色土 炭化物粒多量混
- 3 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- 4 褐色土 炭化物粒少量混
- P3 1 暗褐色土 炭化物粒少量混
- 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- 3 暗褐色土 炭化物粒少量混
- P4 1 暗褐色土 炭化物粒少量混
- 2 灰黄褐色土 炭化物粒少量混
- 3 暗褐色土 炭化物粒少量混

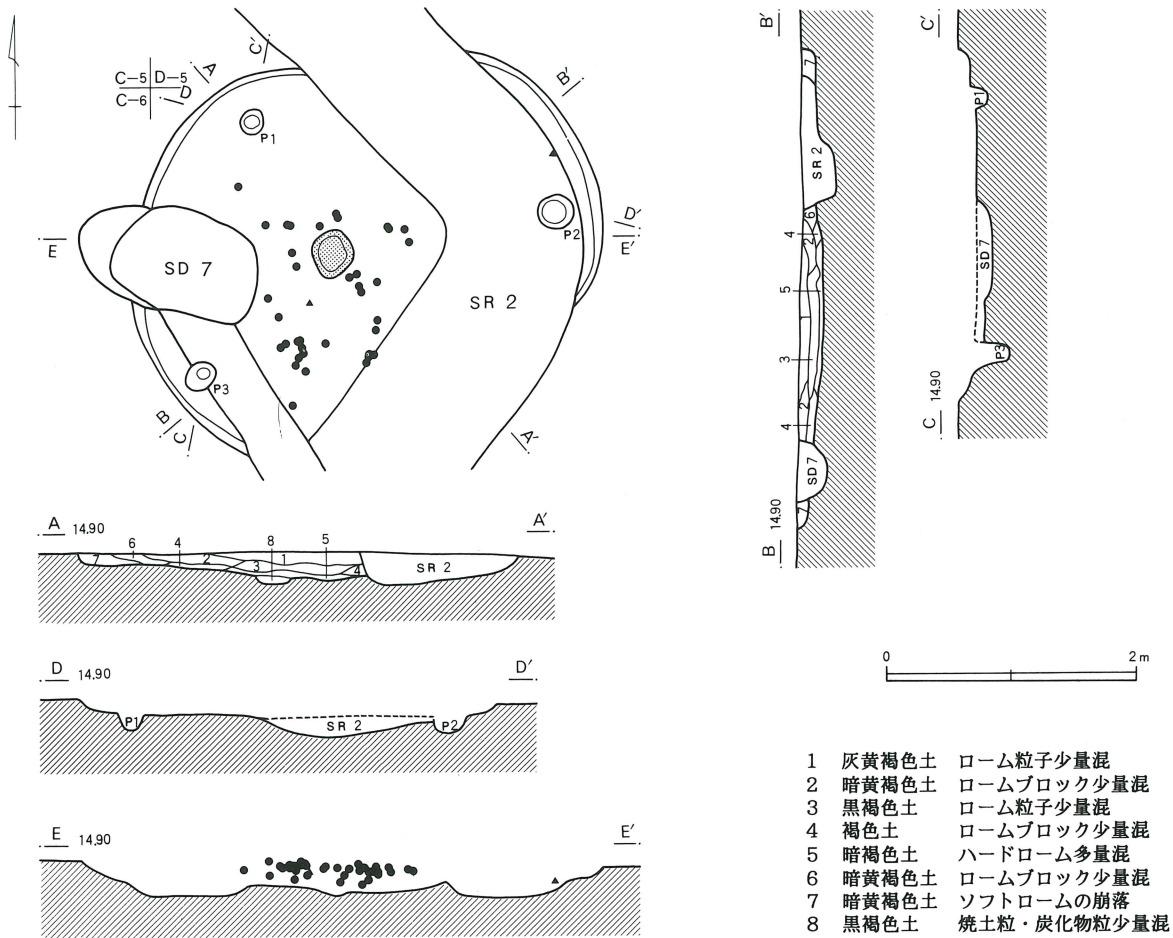
施され、半截竹管による沈線で施文される。

14~19は隆帯及び爪形文で施文される。20~23はヘラ先による連続刺突で沈線状の文様が施される。20は口縁部である。24~30は隆帯と沈線で施文される土器である。隆帯上には刻みが施される。31は口縁部の突起である。沈線で渦巻き状の文様が施される。32は底部破片である。沈線と連続刺突が見られる。33~39は撚り糸が施される土器である。撚りはいずれもRでし

っかりしている。33・34は口縁、39は底部である。40はRLの縄文が施される。41・42は無文土器である。43~45は胎土に雲母が混じる土器である。43は口縁部破片で、角押文が施される。14~43は中期中葉の土器と考えられる。

46~50は中期後葉の土器である。46・47はRLの縄文が、48~50はLRの縄文が施される。

第40図 13号住居跡



石器は4点出土している。51は黒曜石製の石鏃で先端を若干欠いている。重さは1.8gである。52～54はいずれも打製石斧である。52・54は欠損品で、53は風化が激しい。重さは184gになる。

第11号住居跡 (第37図 図版11)

11号住居跡はC・D-2グリッドの調査区際に存在し、約3分の2は調査区外である。21号土壙と重複する。原地形の標高約14.6m付近で検出された。住居跡のプランはほぼ円形になると考えられる。規模は、調査区際で約3.13mほどで、おそらく直径が3.40m前後の住居跡になると考えられる。壁高は約14cmと浅い。柱穴は2本しか確認できなかった。柱穴の直径は約30cm、床面からの深さは、約25cmである。炉跡は検出できなかった。遺物はほとんど出土していない。

第11号住居跡出土遺物 (第38図-1)

1は磨製石斧の基部である。他に土器片も数点出土

しているが、図示できるものはなかった。

第12号住居跡 (第39図 図版12)

12号住居跡は小型住居跡が集中する地点の南西C-3グリッドに存在する。34号土壙と重複する。原地形の標高約は14.8mほどで検出された。住居跡のプランは、ほぼ楕円形になる。規模は約5.11m×4.13mになる。壁高は約14cmと浅い。柱穴は4本である。柱穴の直径は約35cm、床面からの深さは、pit4で約30cmである。

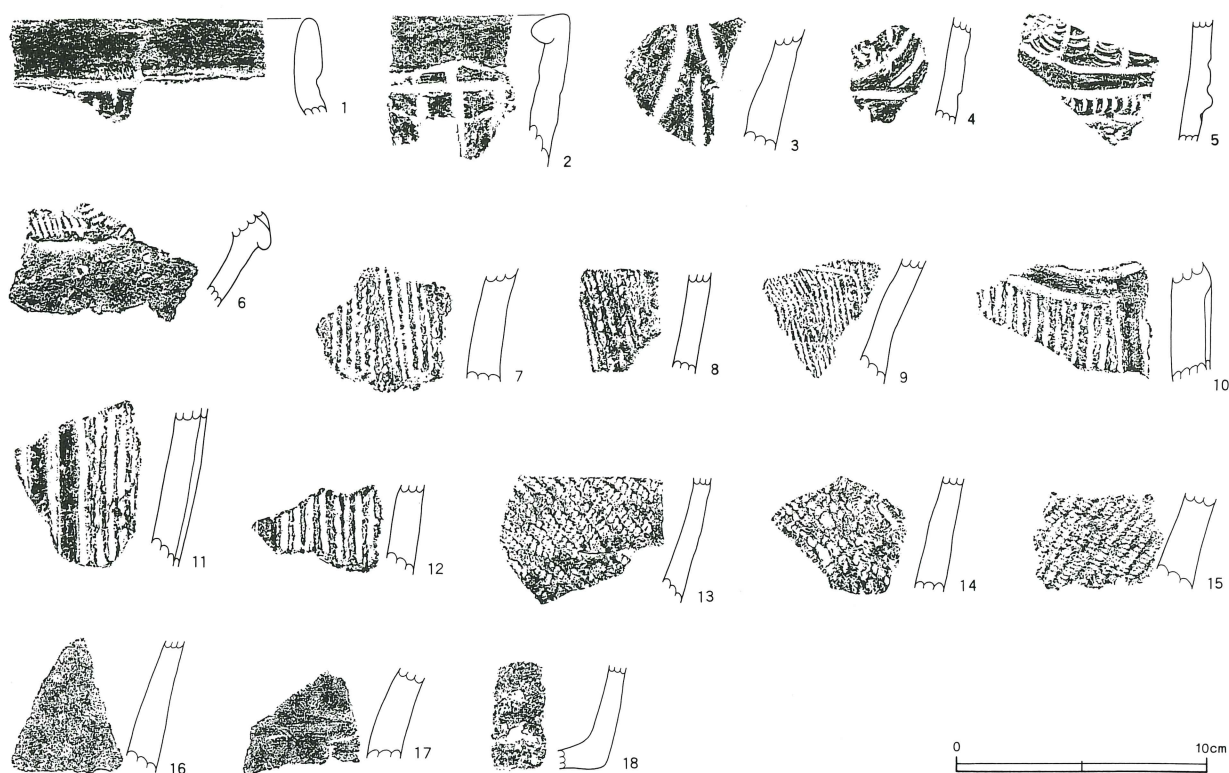
炉跡は、中央よりやや北西寄りて検出された。規模は約78.0cm×69.0cmになる。深さは約13cmと浅い。焼土の残りはわるく、炉壁はさほど焼けていない。

遺物は住居跡全体に散見するが、あまり多くない。

第12号住居跡出土遺物 (第38図-2～13 図版29)

1は磨製石斧である。完全なもので、重さは305gになる。3・5は撚り糸 (L)、9・10は撚り糸 (R)、

第41図 13号住居跡出土遺物



4は沈線が施される。6は口唇部に刻みが入る。7・8は爪形文が施される。11～13は胎土に雲母を含み、11には角押文が施される。いずれも中期中葉のものと考えられる。

第13号住居跡 (第40図 図版12)

13号住居跡は調査区の南側、D-6グリッドに存在する。2号方形周溝墓と7号溝により壊される。原地形の標高約14.8mほどで検出された。住居跡のプランは、ほぼ円形で、直径は約3.80mになると思われる。壁高は約15cmと浅いが、中央部に向かいやや深くなっており、中央部の覆土の厚さは約20cmになる。柱穴は3本だけ確認できた。残りの1本は2号方形周溝墓構築の際に壊されたものと考えられる。柱穴の直径はpit2で約25cm、床面からの深さはpit3で約30cmである。

炉跡は、住居跡の中央やや西寄りで見出された。規模は約40.2cm×34.8cmと小さく、深さも約6.2cmと浅い。焼土の残りはわらく、炉壁も焼けていなかった。

遺物はあまり多くないが、炉の周囲から集中して出

土している。

第13号住居跡出土遺物 (第41図 図版29)

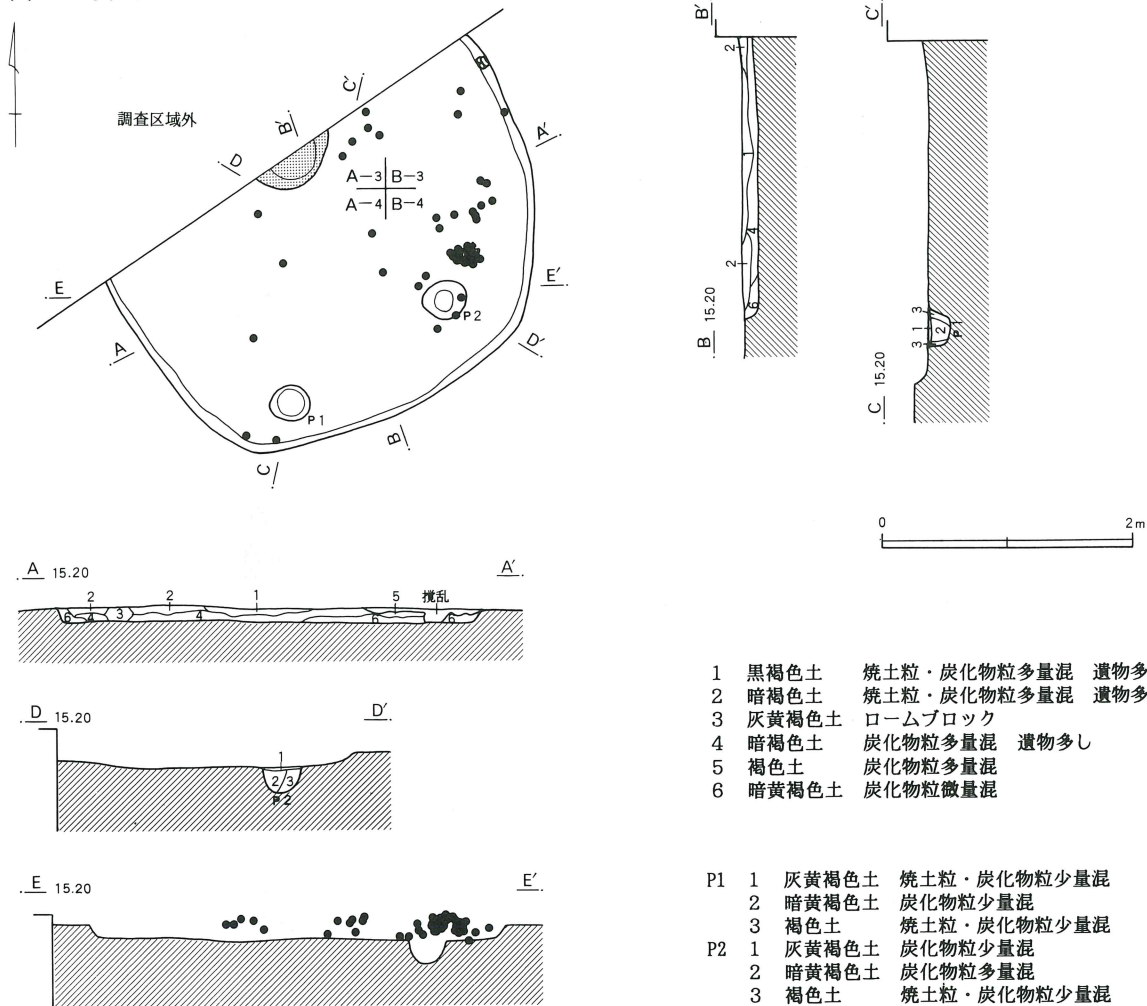
1は口縁部破片である。文様は不明。2・3は沈線のみで施文される土器である。同一個体の可能性がある。4は沈線と刺突で施文される。5は隆帯及び沈線、爪形文が施され、LRの縄文も付けられている。6は隆帯上に爪形文が施される。7～9・10・11はRの撚り糸、12はLの撚り糸が付けられる。13・14はRLの縄文、15はLRの縄文、16～18は無文土器である。18は底部である。10～12は中期後葉の土器であり、この他の土器は、いずれも中期中葉のものと考えられる。

石器の出土はなかった。

第14号住居跡 (第42図 図版13)

14号住居跡は調査区の西のはずれA・B-3・4グリッドに存在する。北西側の約半分が調査区域外にかかっている。他の遺構との重複はない。原地形の標高約14.9mほどで検出された。住居跡のプランは、ほぼ円形になると思われる。直径は約3.50mになると思われる。壁高は約15cmと浅い。柱穴は2本だけ確認でき

第42図 14号住居跡



た。残りは調査区外と思われる。柱穴の直径は pit2 で約33cm、床面からの深さは約22cmである。

炉跡は、調査区際の住居跡のほぼ中央から検出された。ほぼ3分の2が調査区外にあり、住居跡の中心よりも北西寄りに存在したと思われる。規模は、調査区際で約70.0cmあり、深さも約13.4cmであった。焼土は比較的残っていたが、炉壁は、ほとんど焼けておらず、火床面もはっきりしなかった。

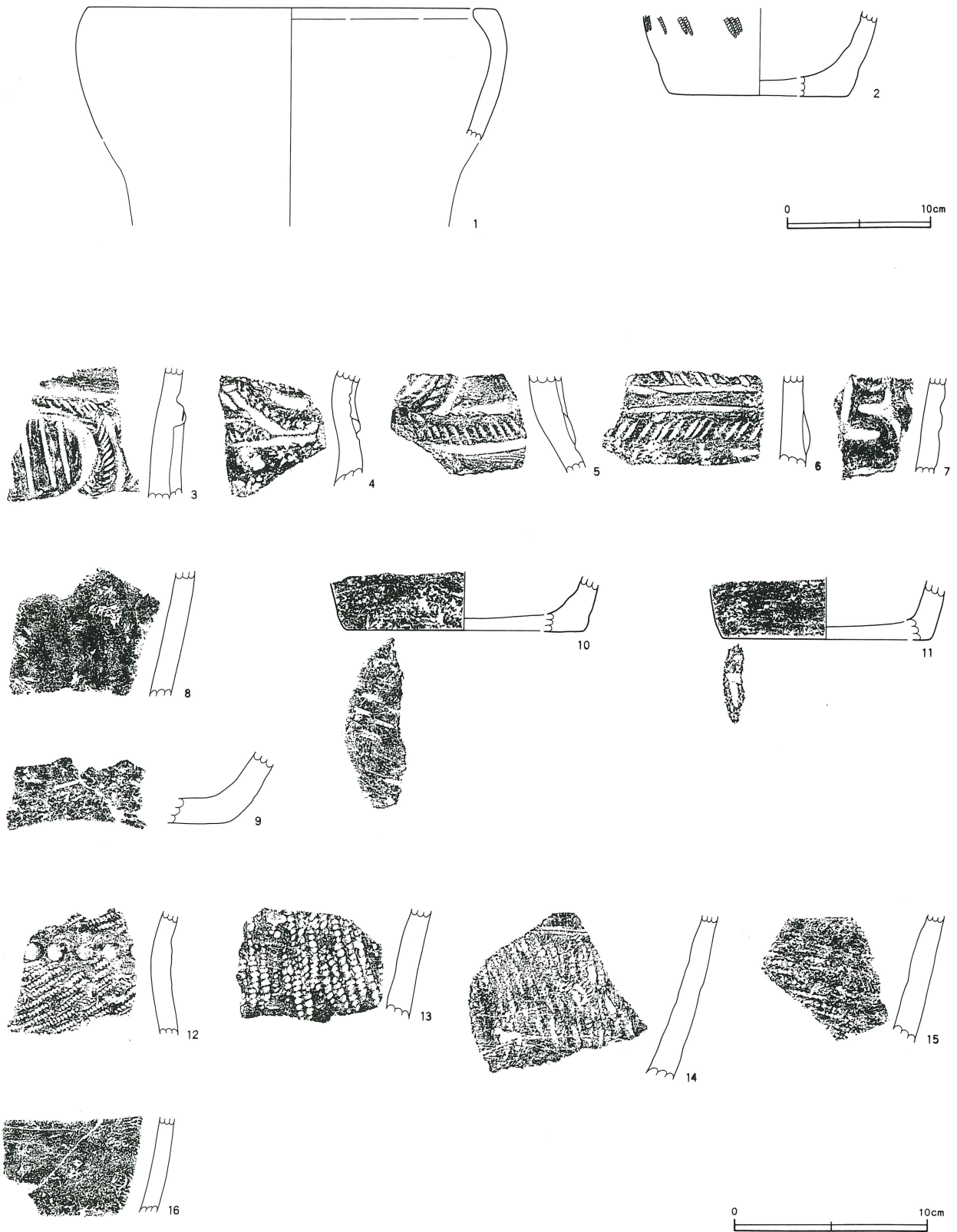
遺物は pit2 の北側を中心に住居跡の東半分に散見している。なお、当住居跡の遺物は、表土を剥いた時点でその大半が姿を現しており、住居跡の上面がかなり削られたことが予想できる。

第14号住居跡出土遺物 (第43図 図版30)

1は無文の平縁土器で、口縁部は内湾する。推定口径は21.3cm、現存高は9.1cmになる。胎土は密で、焼成

は良好、色調は赤褐色である。2は深鉢の底部で底部径は12.3cm、高さは5.4cmになる。胎土は密で、焼成は良好、色調は橙褐色である。RLの縄文が施される。3は隆帯による楕円区画を持つ土器で、区画内部には沈線が施され、隆帯上にはスリットが入る。色調は赤褐色である。4は区画が三角形になる土器で、隆帯上にはスリットが入る。5・6は幅広で低い隆帯が施される。隆帯状には刻みが入る。6の胎土には白色砂粒が多く混じる。7は浅い沈線が施される。8~11は、いずれも無文の土器である。9~11は底部破片で、10・11の底には網代痕が残り、胎土には雲母が混じる。12は縦方向のRLの縄文が、13はRLの縄文がそれぞれ施される。14もRLの縄文が施される。15・16は同一個体で、15には縦方向のLRの縄文が施される。石器の出土はなかった。

第43图 14号住居跡出土遺物



(3) 土壙

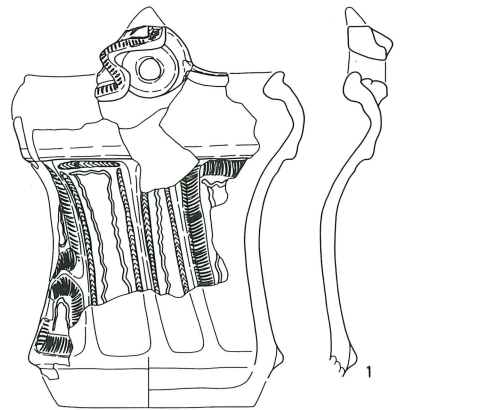
縄文時代の土壙は、17基検出された。全体としては遺物が出土している土壙の数は少ない。17基のうち9基は、C・D-2・3グリッドから見つかっており、出土遺物の多い土壙もこの範囲に集中している。また、集石土壙も1基検出されている。

第21号土壙 (第44・45図 図版13・24・30)

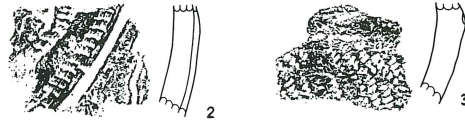
21号土壙はD-2グリッドに存在する。調査区際で検出された。9号・11号住居跡と重複しており、この土壙が古い。土壙のプランは直径約1.10mで、ほぼ円形になり、南側を9号住の pit2 に壊される。深さは最深部で約27cmになる。壁は自然なカーブで傾斜を持って立ち上がる。覆土はよく締まっており、土壙の底部付近には炭化物粒子が多く混じる。

遺物は、土壙のほぼ北半分の覆土中から出土している。第44図1は小型の深鉢で、口縁部は内湾し、一箇所に突起が付く。推定口径は13.4cm、現存高は16.4cmになる。胎土は密で、焼成は良好、色調は暗い黄褐色である。口縁部は無文で、突起状には刻みを持つ隆帯

第44図 21号土壙出土遺物

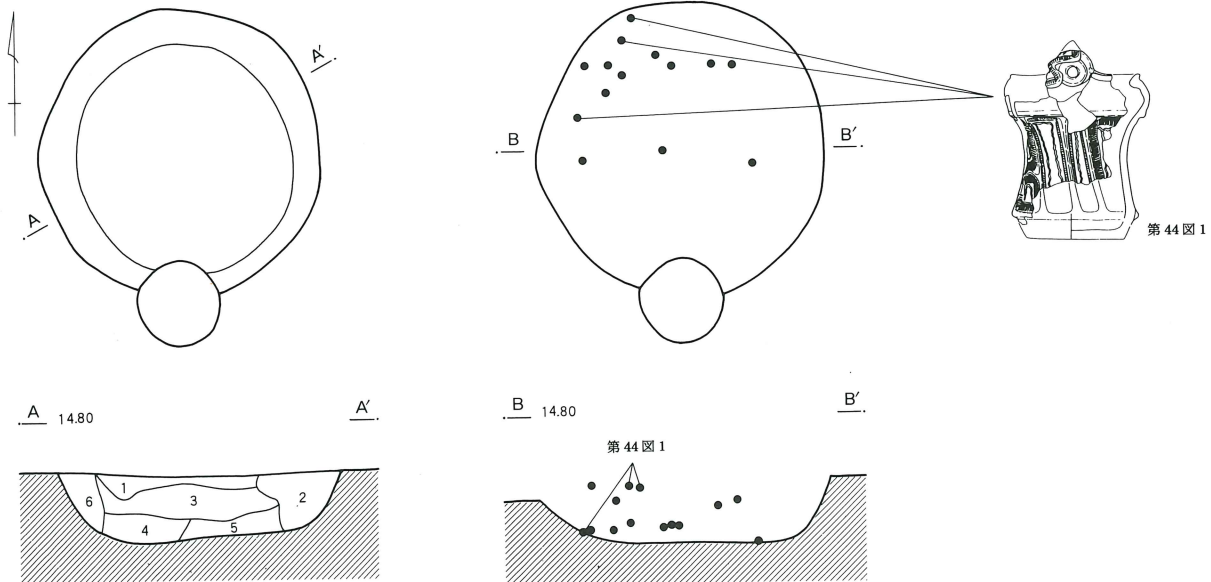


0 10cm



0 10cm

第45図 21号土壙



A 14.80

A'

B 14.80

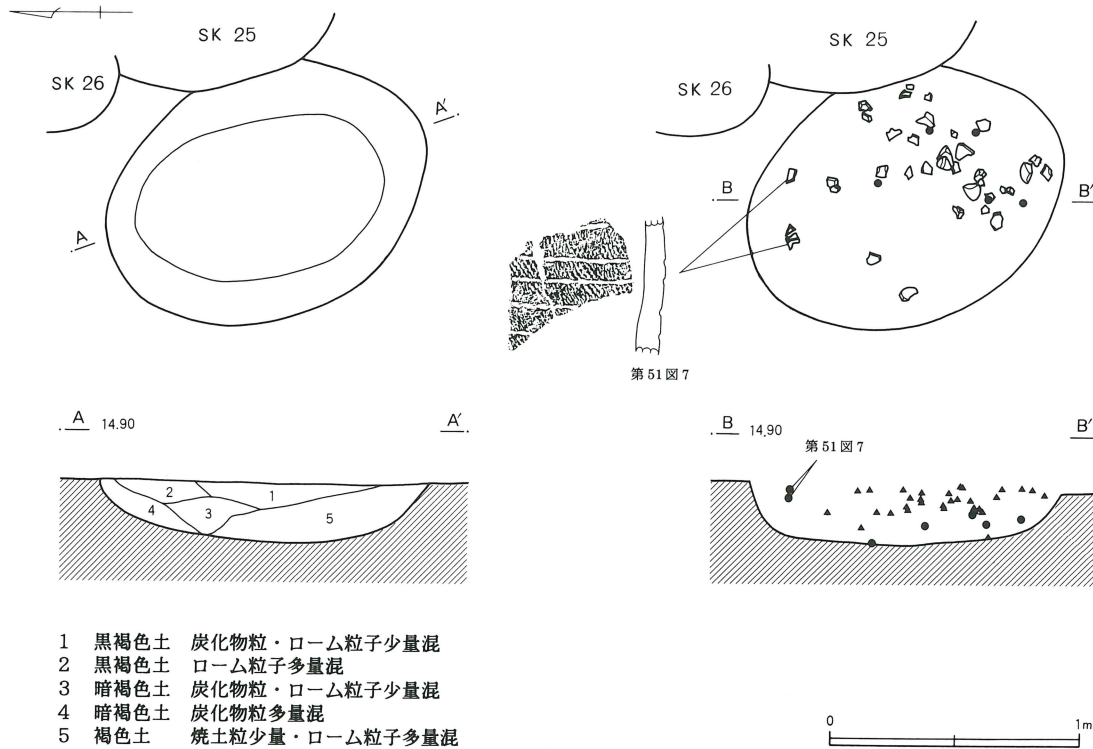
B'

第44図1

- 1 黒色土 締まりよし ローム粒子少量混
- 2 黒褐色土 ローム粒子多量混
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量混
- 4 黒褐色土 根による攪乱
- 5 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒子多量混
- 6 暗黄褐色土 ローム粒子多量混

0 1m

第46図 24号土壙



が付けられる。胴部と口縁部及び底部は隆帯で区画され、胴部はさらに隆帯で縦方向の区画が施される。区画内は、爪形文やヘラ先による連続刺突、沈線などで施文される。2は深鉢の胴部破片で1と同様の文様が付けられる。胎土は密で、わずかに雲母が混じる。焼成は良好、色調は橙褐色である。3はRLの縄文が施される。

第24号土壙 (第46・51図 図版14・31)

24号土壙はD-3グリッドに存在する。集石土壙である。25号土壙と重複しており、24号土壙が古い。土壙のプランは、ほぼ楕円形で、径約1.32m×0.99mになる。深さは最深部で約23cmになる。壁は自然なカーブで傾斜を持って立ち上がる。覆土はよく締まっており、焼土粒子や炭化物粒子が多く混じる。

石はすべて破碎礫で、火を受けている。石器は混じらず、土壙の上面及び覆土の中程から出土している。

遺物は、土器片が数点出土しているが、第51図7を除き文様が判別できるものはなかった。7はRの撚り糸が施され、その上から細いヘラ先で、沈線状の刺突

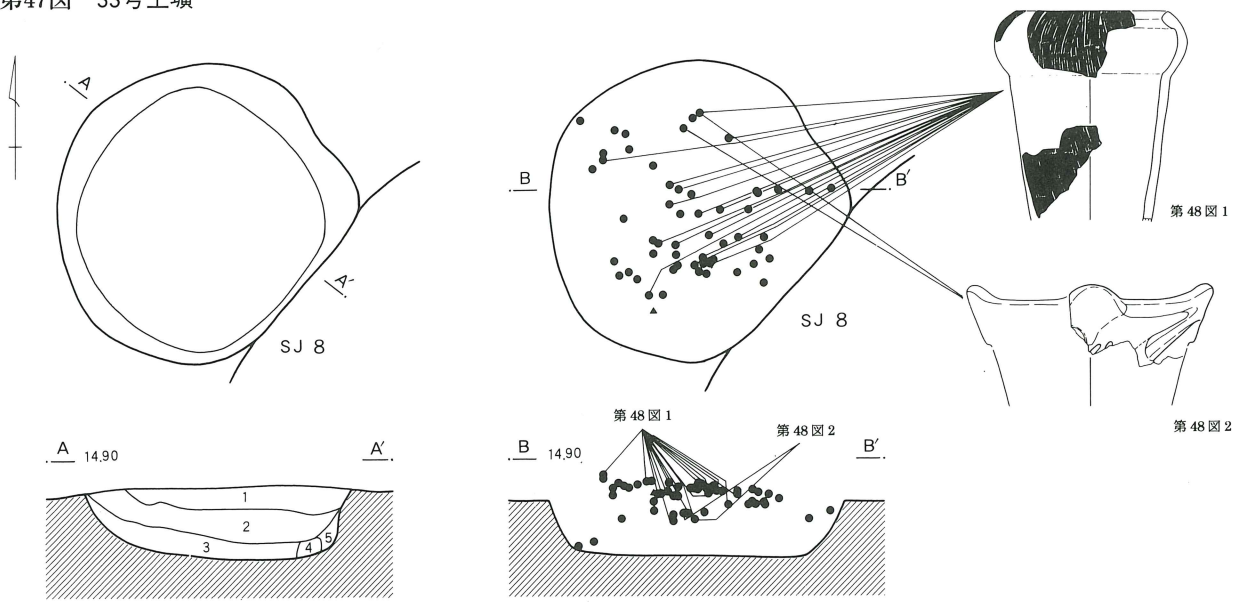
が施される。

第33号土壙 (第47・48図 図版14・24・30)

33号土壙はC-3グリッドに存在する。8号住居跡と重複しており、この土壙が新しい。土壙のプランは直径約1.22mで、ほぼ円形になる。深さは最深部で約28cmになる。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。覆土はよく締まっており、全体に炭化物粒子が多く混じる。

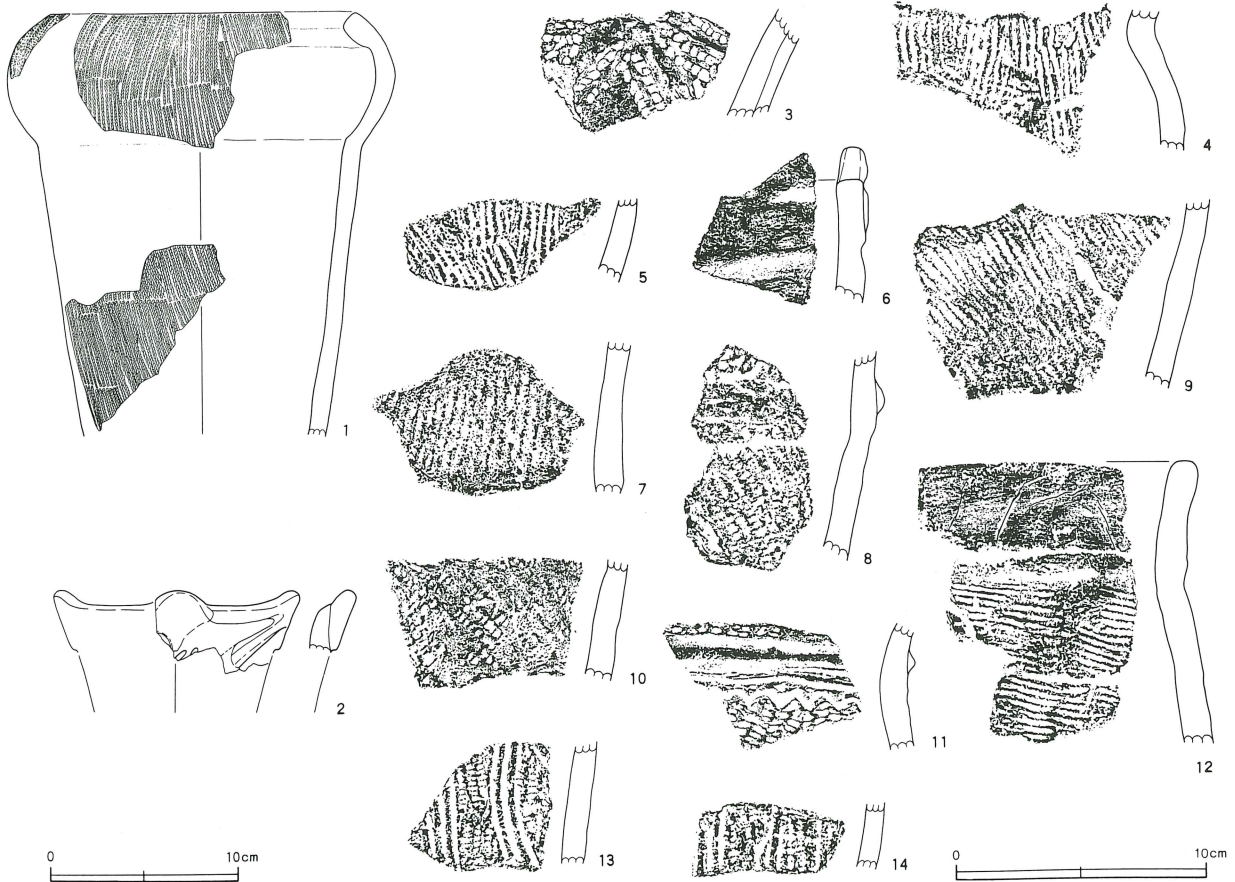
遺物は、土壙全面、覆土の中程から出土している。第48図1は平縁の深鉢で、口縁部は膨らみながら内湾する。頸部以下は直線状に底部に向う。口径16.2cm、現存高は22.2cmになる。胎土は粗く砂粒が多く混じる。焼成は良く、色調は赤褐色である。全体にRの撚り糸が施される。2は小型の深鉢で口径12.5cm、現存高は3.4cmになる。胎土は密で白色砂粒が多く混じる。焼成は良く、色調は暗褐色である。四箇所に突起を持つと思われ、隆帯状の装飾が見られる。3は胎土に雲母が混じる。隆帯と角押文で施文される。4・5は同一個体と思われる。Rの撚り糸が施される。6は口縁

第47図 33号土壌

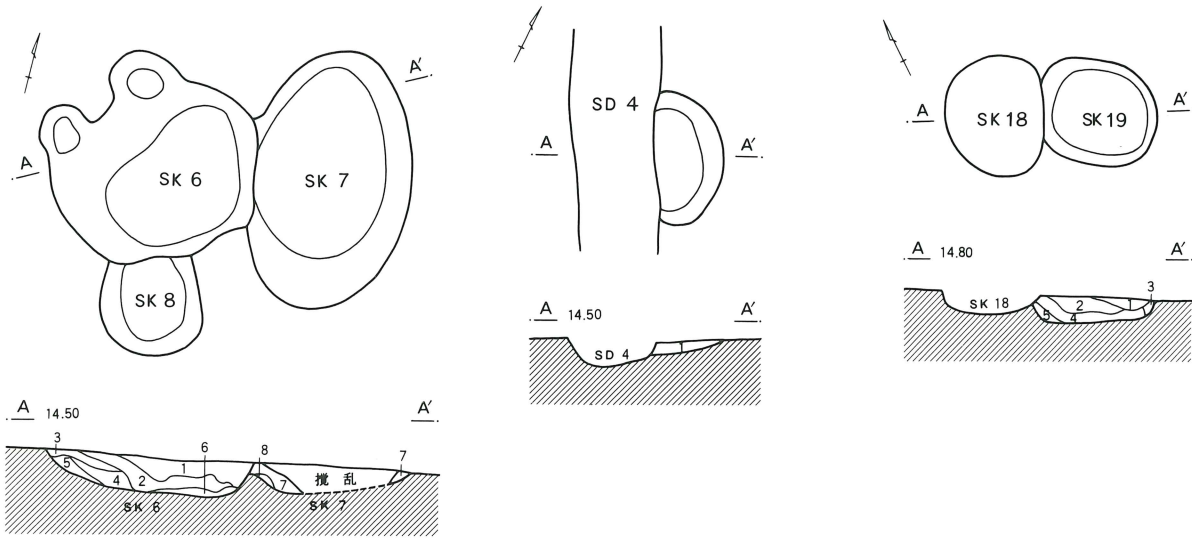


- 1 黒褐色土 炭化物粒多量混
- 2 暗褐色土 炭化物粒少量混
- 3 暗黄褐色土 炭化物粒少量混
- 4 褐色土 ロームブロック混
- 5 暗褐色土 炭化物粒少量混

第48図 33号土壌出土遺物



第49図 6号・7号・8号・15号・19号・20号・22号・23号土壇



6号土壇

- 1 黒褐色土 炭化物粒混
- 2 黒褐色土 炭化物粒・ロームブロック混
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
- 4 暗褐色土 焼土多量・炭化物粒微量混
- 5 褐色土 炭化物粒微量混
- 6 灰黄褐色土 炭化物粒・ローム粒子微量混

7号土壇

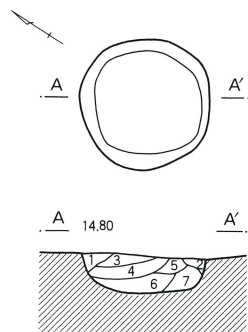
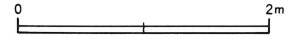
- 7 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒子多量混
- 8 灰黄褐色土 炭化物粒微量混

15号土壇

- 1 暗褐色土 焼土少量・炭化物粒微量混

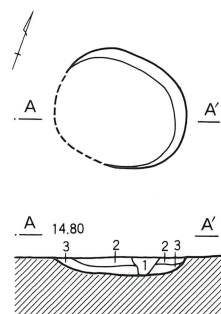
19号土壇

- 1 黒褐色土 攪乱
- 2 暗褐色土 炭化物粒少量・ローム粒子多量混
- 3 褐色土 地山の崩落
- 4 暗褐色土 焼土混・ローム粒子多量混
- 5 褐色土 炭化物粒微量混



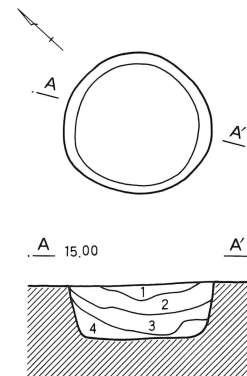
20号土壇

- 1 黒色土 ローム粒子多量混
- 2 暗黄褐色土 地山の崩落
- 3 黒色土 ローム粒子多量混
- 4 黒褐色土 ローム粒子多量混 遺物多し
- 5 黒褐色土 ローム粒子多量混
- 6 黒褐色土 炭化物粒少量・ローム粒子多量混
- 7 褐色土 ローム粒子多量混



22号土壇

- 1 黒褐色土 攪乱
- 2 黒色土 ローム粒子多量混
- 3 黒褐色土 ローム粒子微量混



23号土壇

- 1 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒子少量混
- 2 黒褐色土 焼土・ローム粒子多量混
- 3 黒色土 炭化物粒多量・ローム粒子少量混
- 4 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
ローム粒子多量混

部破片である。7は無節の縄文Lが、8～10はRLの、11はLRの縄文が施される。12は無節の縄文Lが縦方向回転で施される。13・14は同一個体で、地文にRLの縄文が施されその上から半截竹管で施文される。

第6・7・8号土壙 (第49図 図版15)

6号・7号・8号土壙はE-4グリッドに存在する。6号土壙が7号・8号土壙より新しい。土壙のプランは、7号が円形、6号は不整円形で、pitに壊されている。深さは6号が26cm、7号が23cmである。遺物の出土はなかった。

第15号土壙 (第49図 図版15)

15号土壙はD-2グリッドに存在する。6号溝に壊されるほぼ楕円形で、深さは約10cmと浅い。しかし、覆土の締まりはよく、焼土と炭化物が混じる。遺物の出土はなかった。

第19号土壙 (第49・51図 図版15・31)

19号土壙はE-4グリッドに存在する。近世の18号土壙と重複する。ほぼ円形で、直径は約85cm、深さは約21cmになる。覆土は比較的締まりが良くなく、ロームの粒子が混じる。

土器片が2点出土している(51図-1・2)。2には雲母が混じる。

第20号土壙 (第49図 図版15)

20号土壙はD-2グリッドに存在する。他の遺構との重複はない。ほぼ円形で、直径は約1.04m、深さは約30cmになり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は比較的締まりが良い。遺物の出土はなかった。

第22号土壙 (第49・51図 図版15・31)

22号土壙はD-2グリッド、21号土壙に隣接して存在する。9号住居跡と重複し、土壙が新しい。ほぼ楕円形になる。北西側が壊れているが長径は約1.06m、深さは約15cmになり、壁は緩いカーブで立ち上がる。覆土は比較的締まりが良い。

土器片が2点と打製石斧の基部が1点出土している(51図-3～5)。4はRLの縄文が施される。5は無文である。

第23号土壙 (第49・51図 図版15・31)

22号土壙はC-3グリッドに存在する。8号・9号住居跡と重複し、土壙が新しい。ほぼ円形になる。直径は約1.16m、深さは約43cmになり、壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は比較的締まりが良い。

土器片が1点出土している(51図-6)。底部でRの撚り糸が施される。

第25号土壙 (第50・51図 図版15・31)

25号土壙はD-3グリッドに存在する。26号土壙より古い。ほぼ楕円形で、深さは約27cmになる。

土器片が2点出土している(51図-8・9)。8は無文である。9は沈線が施される。

第26号土壙 (第50・51図 図版15・31)

26号土壙はD-3グリッドに存在する。25号土壙より新しい。楕円形で、深さは約30cmになる。

土器片が2点出土している(51図-10・11)。10LRの縄文が施される。11は無文である。

第34号土壙 (第50図 図版15)

34号土壙はC-3グリッドに存在する。12号住居跡と重複し、土壙が古い。楕円形で、深さは約18cmになる。遺物の出土はなかった。

第35号土壙 (第50・51図 図版15・31)

35号土壙はB-4グリッドに存在する。36号土壙と重複し、当土壙が新しい。楕円形で、深さは約20cm。東側がpit状に落ち込んでおり、深さは30cmになる。

土器が1点出土している(51図-12)。地文はLRの縄文が施され、口縁部には隆帯が付けられる。また、口縁部の下端には沈線が入る。

第36号土壙 (第50・51図 図版15・31)

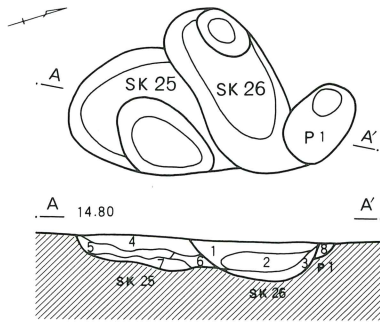
36号土壙はB-4グリッドに存在する。35号土壙と重複し、当土壙が古い。楕円形で、深さは約18cmになる。

口縁部破片が1点出土している(51図-13)。

第37号土壙 (第50図 図版15)

37号土壙はB-4グリッドに存在する。他の遺構とは重複しない。楕円形で、深さは約15cmになる。遺物の出土はなかった。

第50図 25号・26号・34号・35号・36号・37号土壌

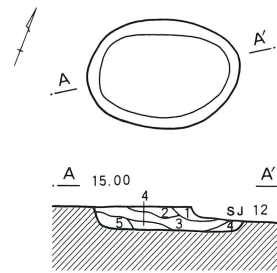


26号土壌

- 1 黒色土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒子少量混
- 2 黒褐色土 炭化物粒微量・ローム粒子多量混
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量混

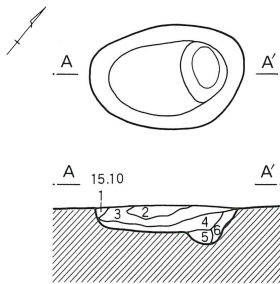
25号土壌・D-3 pit1

- 4 黒褐色土 ローム粒子少量混
- 5 黒褐色土 炭化物粒少量・ローム粒子多量混
- 6 灰黄褐色土 ローム粒子多量混
- 7 褐色土 炭化物粒少量混
- 8 褐灰色土 炭化物粒・ローム粒子多量混 (D-3 pit1)



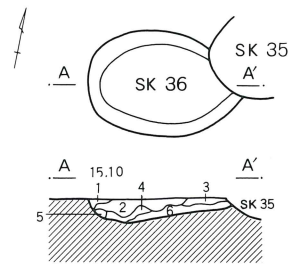
34号土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量混
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量混
- 3 黒褐色土 ローム粒子微量混
- 4 褐色土 炭化物粒多量混
- 5 暗黄褐色土 炭化物粒・ローム粒子多量混



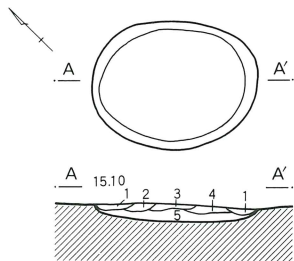
35号土壌

- 1 黒褐色土 36号土壌の覆土
- 2 黒褐色土 炭化物粒少量混
- 3 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒子多量混
- 4 暗褐色土 炭化物粒微量・ローム粒子多量混
- 5 暗褐色土 炭化物粒多量混
- 6 灰黄褐色土 炭化物粒微量混



36号土壌

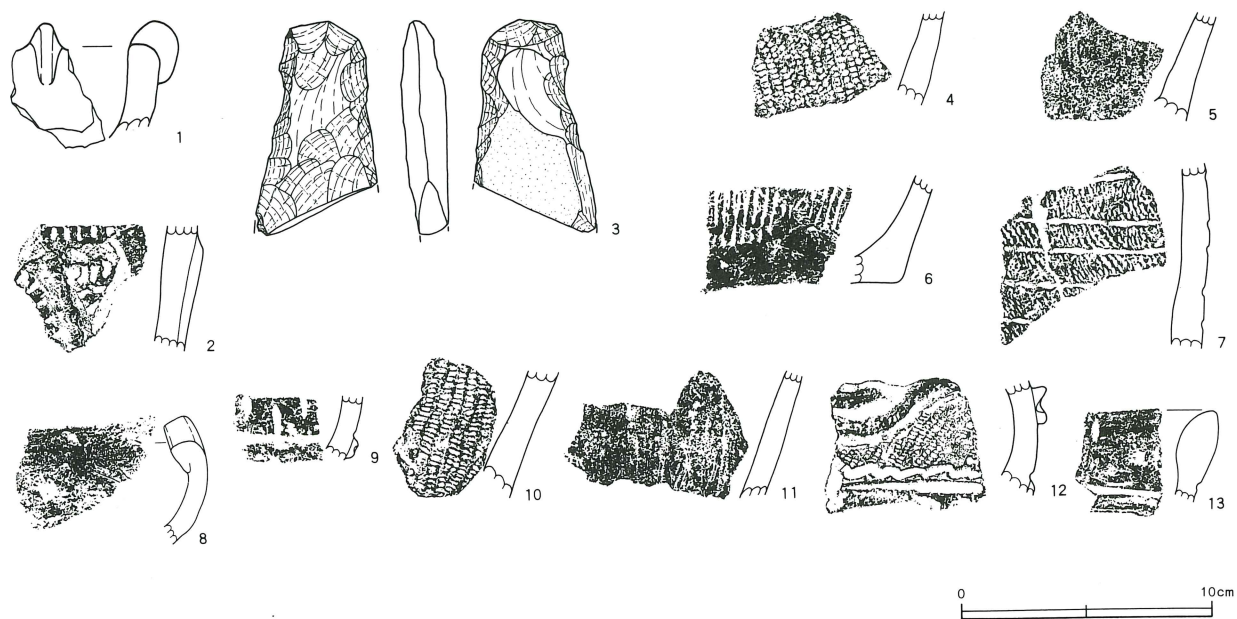
- 1 褐色土 締まりよし
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒子少量混
- 3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量・ローム粒子多量混
- 4 褐灰色土 炭化物粒微量・ローム粒子多量混
- 5 明黄褐色土 ハードローム
- 6 褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混



37号土壌

- 1 黒褐色土 炭化物粒少量混
- 2 暗褐色土 締まりよし
- 3 暗黄褐色土 焼土粒・炭化物粒少量混
- 4 暗褐色土 締まりよし
- 5 灰黄褐色土 炭化物粒微量混





(4) グリッド出土の遺物

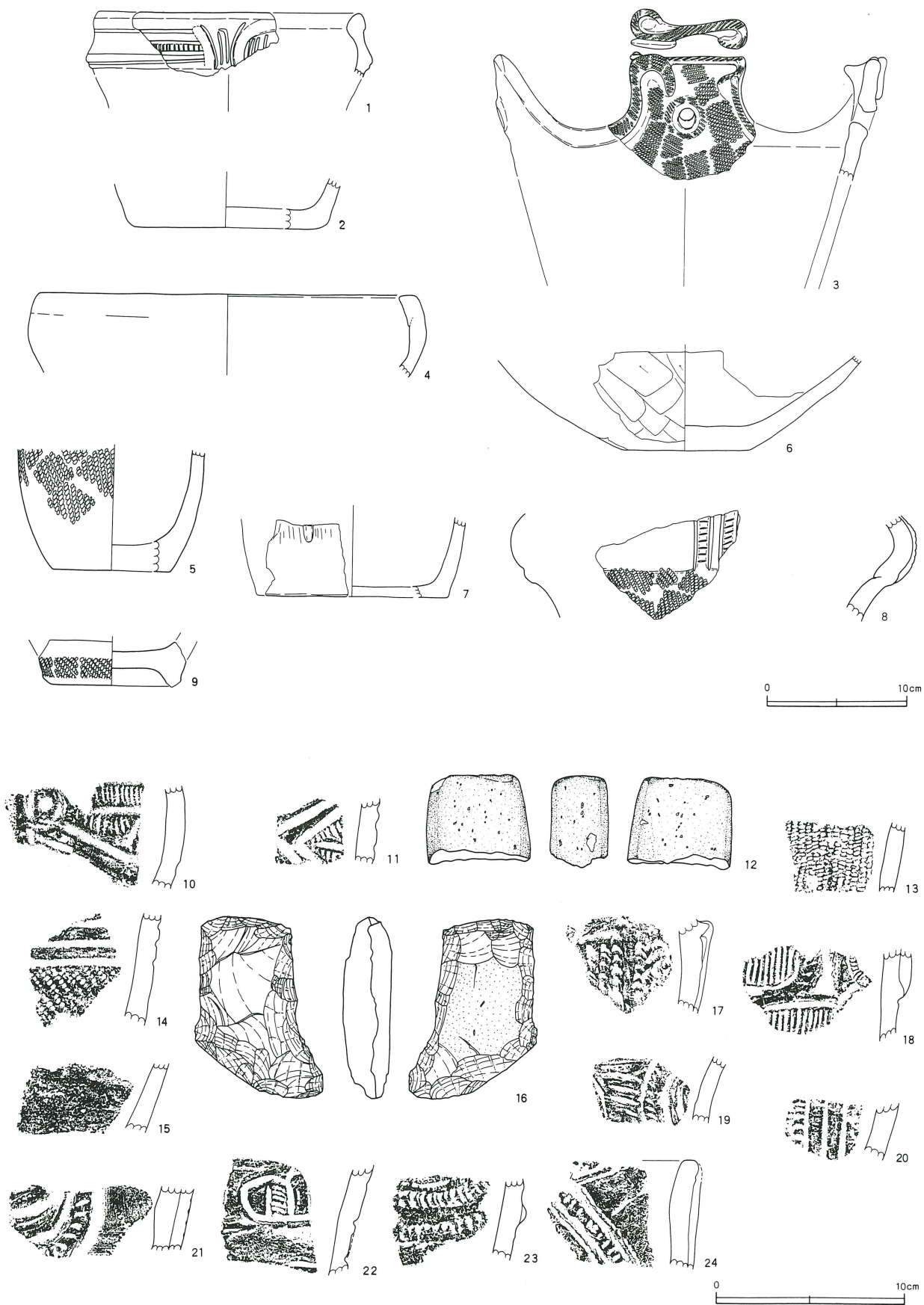
各グリッドより出土した縄文時代の遺物を一括してグリッドごとに記述する。なお、後世の遺構の覆土中より出土したのも各々のグリッドに戻し、他のグリッド出土遺物と同様の扱いをした。

第52図-1はB-3グリッドのテストピットを10cmほど掘り下げた攪乱の中から出土している。口径は約18.8cm、現存高は約4.5cmになる。胎土は粗く、砂粒を多く含み、雲母が混じる。口縁部が「く」の字状に内湾し、口縁部には逆「ハ」の字状の隆帯が付けられ、隆帯内は沈線と刻みにより文様が付けられる。色調は暗い黄褐色を呈す。2はB-4グリッドから出土している。底部径は約14.3cm、現存高は約3.6cmになる。胎土は密で、焼成もよく、赤褐色を呈す。3はC-6グリッドから出土している。波状の口縁部で、推定口径は約26.7cm、現存高は約8.7cmになる。胎土は密で、雲母が混じる。色調は明るい黄褐色を呈す。波状突起の上端部にはS字状の隆帯が付けられ、隆帯上にはLRの縄文が施される。また、同様の隆帯が口唇部にも付く。突起の中央部には直径1.4cmほどの孔が穿たれ、孔の周囲にもLRの縄文が施される。なお、突起全体に

も縦回転のLRの縄文が施される。4・5ともC-6グリッドから出土している。4は平縁で、口縁はやや内湾する。口径は約27.2cm、現存高は約5.8cmになる。胎土は密で、白色砂粒が混じる。焼成は良い。暗い黄褐色を呈す。無文土器である。5は深鉢の下半部である。底部径は約8.3cm、現存高は約8.4cmになる。胎土は密で、焼成も良い。赤褐色を呈す。RLの縄文が施される。7はD-6グリッドから出土している。底部破片で、底部径は約13.6cm、現存高は約5.6cmになる。胎土は密で、焼成も良い。赤褐色を呈す。隆帯と条線が施された痕跡がうかがえる。8はD-5グリッドから出土している。口縁部から頸部にかけての破片で、口縁は内湾する。最大径は約29.0cm、現存高は約7.5cmになる。胎土は粗く、多孔質で砂粒が多く混じる。焼成は良い。明るい褐色を呈す。口縁部には、刻みの入る二本の隆帯が縦方向に施される。頸部以下にはRLの縄文が施される。9はE-4グリッドから出土している。上げ底の底部破片である。底部径は約10.0cm、現存高は約3.1cmになる。胎土は密で、焼成も良い。赤褐色を呈す。RLの縄文が施される。

以上、実測可能な土器は8点出土している。

第52図 グリッド出土遺物(I)



第53図 グリッド出土遺物(2)



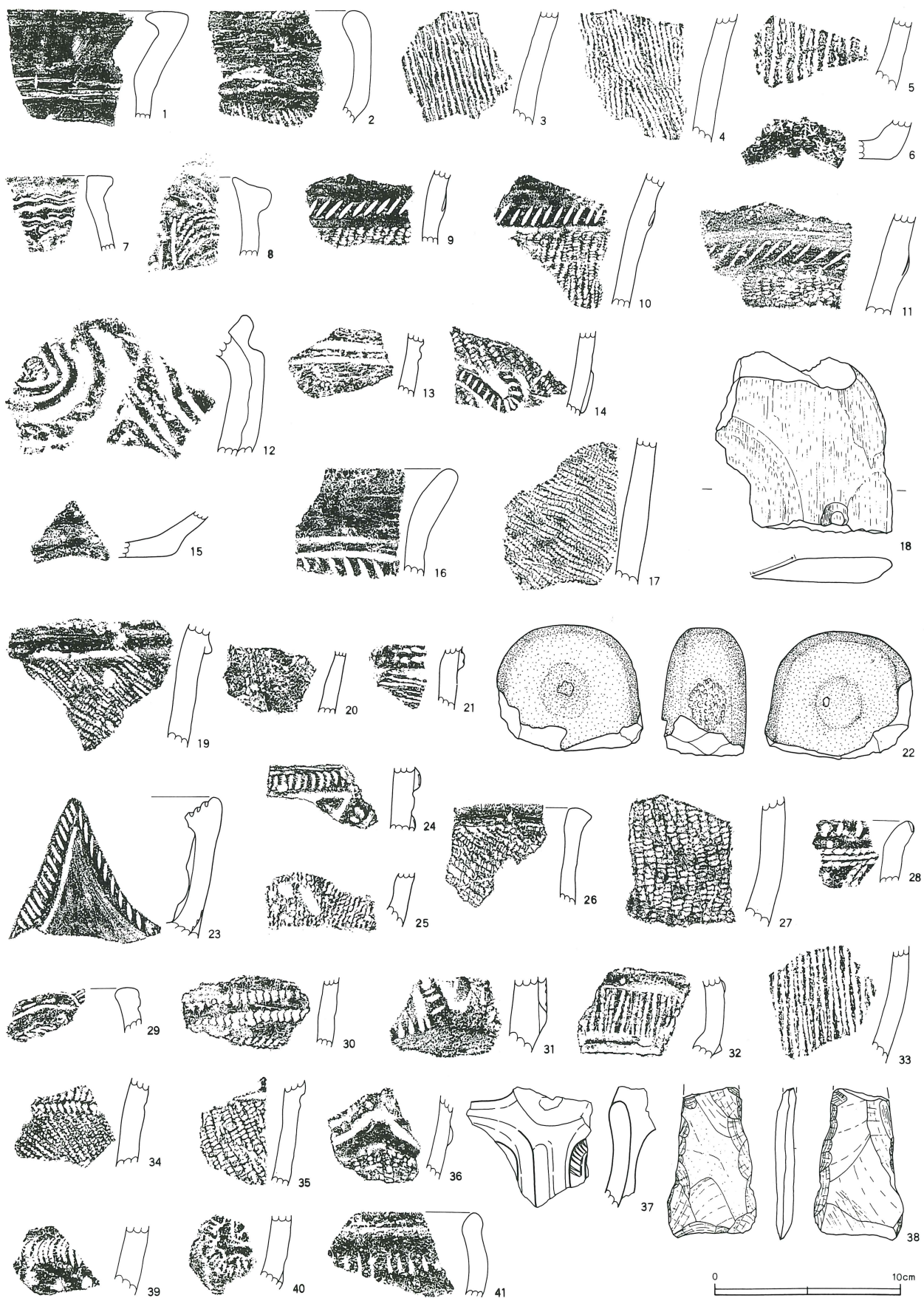
なお、51図-6のD-3グリッドの一角から纏まって出土した土器は表面がかなり風化しているため、当初縄文土器として版を組んだが器形や胎土、整形痕等から土師器として扱う方が妥当と考える。

以下は破片資料及び石器である。

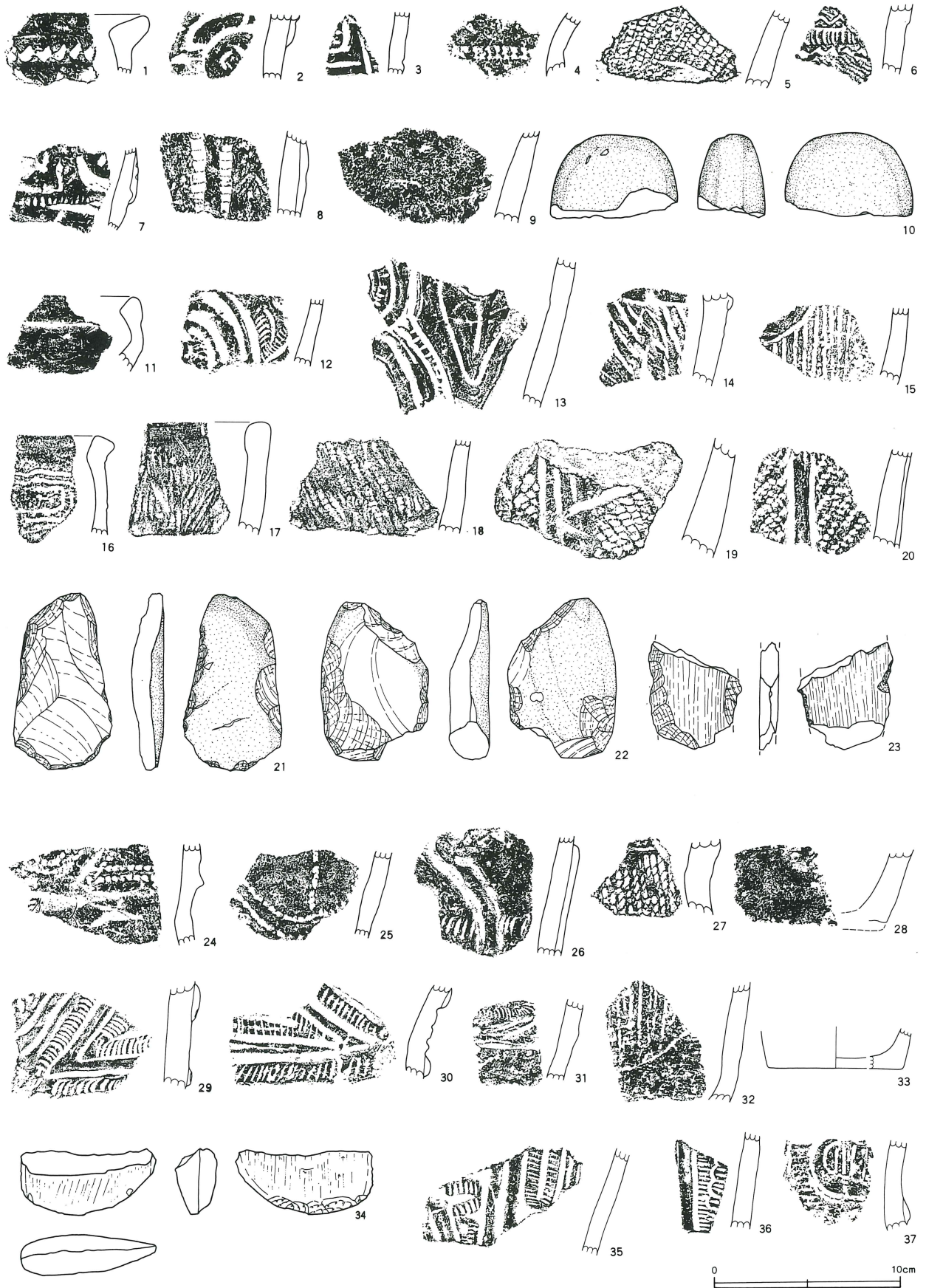
第51図-10~12はB-3グリッドより出土。いずれも沈線と爪形で施文されるが、10には円文が付けられる。12は磨製石斧の基部である。13はB-5グリッドより出土。RLの縄文が付けられる。出土状況から座標Y=-20.340以西では遺構の検出量、遺物の検出量とも少ないことが指摘できる。14~16はC-2グリッドから出土。14は中期後葉の土器でRLの縄文が施される。15は無文土器である。16は打製石斧。粘板岩製で重さは195gになる。17~24及び第53図1~21はC-3グリッドから出土。C-3グリッドには8号住や12号住、33号土壙なども存在し、最も遺構の密度が濃い地点である。17は隆帯とヘラ先による刺突が特徴的な土器である。18は区画を持つ土器である。19~24は、いずれも刻みを持つ隆帯、沈線、爪形等で施文された土器である。24は特徴的で、細いヘラ先による連続刺突が施されている。第53図-1は無節の縄文(R)、2は撚り糸(R)、3はRLの縄文が施される。4・5は無文土器である。6は口縁部破片である。円形区画の内部に角押文が施される。7・8は同一個体と思われる。7は爪形とヘラ先による連続刺突が施される。9~11は、いずれも胎土に雲母を含む土器である。9・10は同一個体と思われる。9~11とも隆帯にそって角押文が施される。9の隆帯上の円文は貫通しない。12も角押文が施される土器であるが、胎土に雲母を含まない。13・14は同一個体と思われる。胎土は粗く、長石を多く含み、多孔質である。無節の縄文(L)が施される。15~18は後期中葉の土器である。15は口縁部破片である。器壁は薄く、口縁部上端の内側に浅い段を持つ。無節の縄文(L)が施される。18は無文である。19は石皿の破片である。両面使われており、堅果類を割るための凹み石としても使用されていたようである。20は磨製石斧の刃先である。先端がわずか

に刃こぼれしている。21は打製石斧で、重さは108gになる。自然石をうまく利用しており、自然面がかなり残る。22~24はC-4グリッドから出土。同グリッドも遺物の出土量は少なかった。いずれも爪形と沈線で施文される土器である。22は口縁部で、ちょうど無文帯になる部分である。25~40及び第54図の1~11はC-6グリッドから出土。同グリッドは、13号住と隣接しているが、2号方形周溝墓や8号溝の覆土から縄文時代の土器片の出土が多い。25は条線の入る土器で、今回の当遺跡の調査ではほとんど出土していない。26はRLの縄文が施される。27は小型の土器で細い工具で連続刺突が施される。28・29は同一個体である。細目の半截竹管による沈線と爪形、鋸歯状の沈線が施され、無節の縄文(L)が施される。30~40は、いずれも沈線や爪形で施文される土器である。30は連続「コ」字状文、爪形が施される。31は小型深鉢の口縁である。32は半肉隆線による区画と爪形が施される。34は口縁部の破片で沈線による渦巻文が施される。37や38には太めの工具による幅広の爪形が付けられる。39は内湾する口縁部の破片である。第54図-1は平縁の深鉢の口縁である。口唇部が内湾する。2も口縁が内湾する深鉢で、口縁部下部から撚り糸(R)が付けられる。3はRの撚り糸、4はLの撚り糸が施される。5は太めのRの撚り糸が施される。6は無文の底部である。7は鋸歯状の沈線が、8はヘラ先の連続刺突による沈線状の文様が施される。9~11は、いずれも中期後葉の土器である。幅広の低い隆帯上に大きめの刻みが付けられる。隆帯の下部からはLRの縄文が施される。12~18はD-2グリッドからの出土。同グリッドからの出土土器は多かったが、表面の風化が激しく、図示できるものは多くない。12は大型の深鉢の口縁部破片である。隆帯上には刻みが入る。14は地文にRLの縄文が施され、刻みが入る隆帯で装飾される。15は浅鉢の底部、17にはRLの縄文が施される。18は緑泥片岩製の石皿の破片である。約1.4cmと薄く、中央は擦り切れている。19~22はD-3グリッドから出土。遺構の密度が最も濃いグリッドである。19にはRLの縄

第54図 グリッド出土遺物(3)



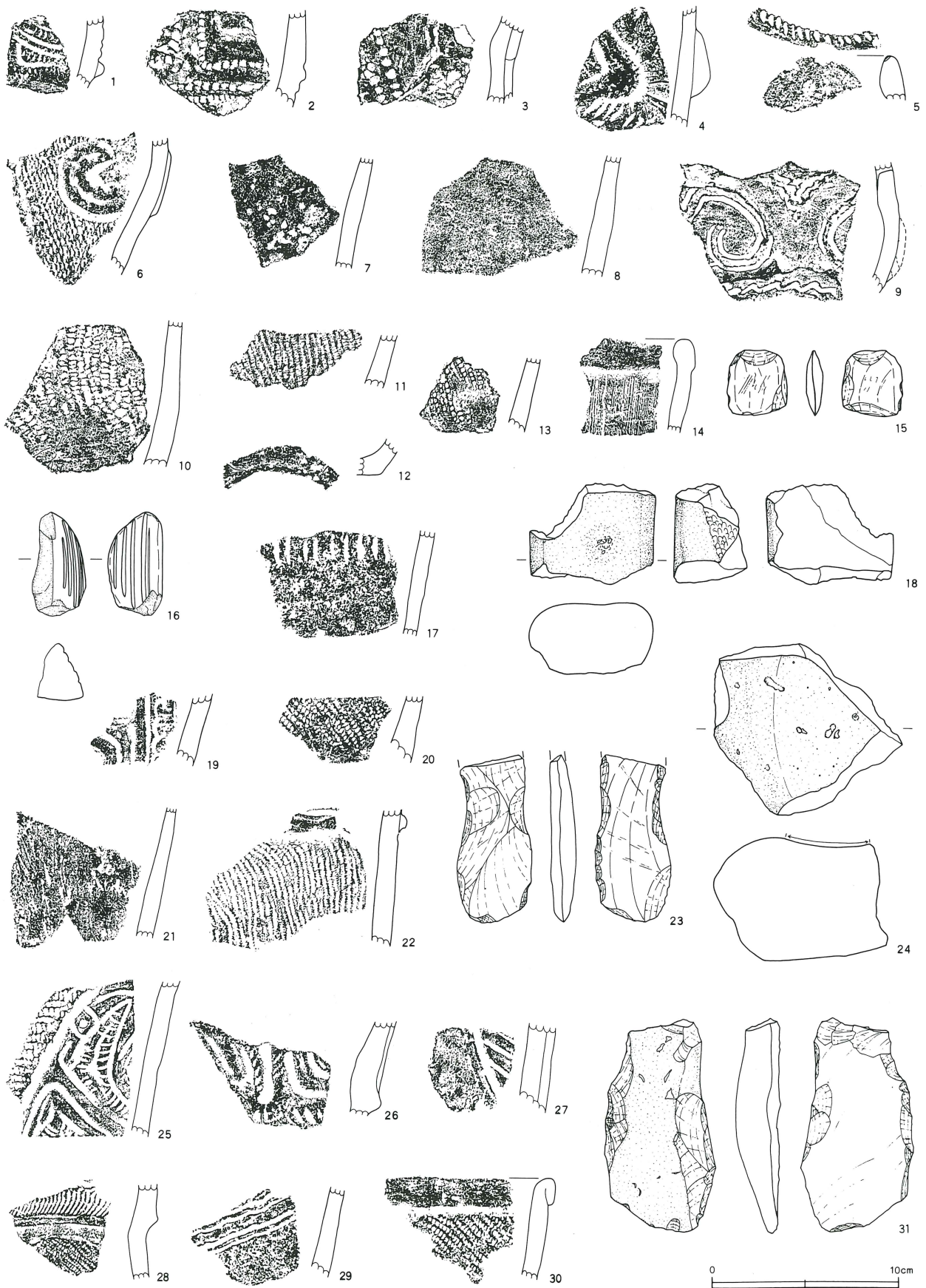
第55図 グリッド出土遺物(4)



文が、20・21には撚り糸が施される。22は磨石である。23～27はD-4グリッドから出土。23は深鉢の波状口縁である。内面中央に垂下する隆帯は壊れている。また、外面の縁も器形にそって隆帯上の高まりを持ち、それぞれ刻みが施される。24は隆帯上に爪形が施される土器である。25はRの撚り糸、26・27はRLの縄文が施される。28～36はD-5グリッドから出土。2号・3号方形周溝墓や1号焼土遺構の覆土からの出土が多い。土器は磨耗しているものが多く、図示できるものは少なかった。28は細いヘラ先で撚り糸の圧痕状の文様が付けられる土器である。口唇部には刻みが入る。29・30は爪形が付けられる。31は刻みを持つ隆帯が付けられる。32・33はRの撚り糸が付けられる。34はRLの縄文に爪形が、35はRLの縄文に沈線がそれぞれ施される。36もRLの縄文を地文に持ち隆帯が付けられる。37～41はD-6グリッドから出土。37は突起状の装飾を持つ口縁部の破片である。垂下する二本の隆帯で区画され、爪形が施される。39・40はいずれも爪形が施される。41は胎土に白色砂粒を多量に含む。口縁部はやや内湾する。38は打製石斧で、厚さは約1cmと薄手である。第55図1～10はE-1グリッドからの出土である。1は平縁の土器で口縁直下に爪形が入る。4は胎土に雲母が混じる。角押文が施される。5はLRの縄文が付けられる。6～10はE-2グリッドから出土。6はRLの縄文に爪形が入る。7・8は隆帯と爪形で施文される。9は無文土器である。10は磨石である。11～23はE-3グリッドから出土。3号溝の覆土より出土したものが多。11は浅鉢の口縁である。12は半肉隆線と爪形、13は刻みの入る隆帯及び沈線で施文される。14はLの撚り糸、15はRの撚り糸、16は沈線で施文される。17は無節の縄文(L)、18はRLの縄文が施される。19・20は中期後葉の土器である。19はRL、20はLRの縄文が施される。21～23は打製石

斧である。21は完形品で重さは92g、22もほぼ完形で重さは120gになる。23は基部と先端部を欠く。24～28はE-4グリッドから出土。24・25はヘラ先による連続刺突が施される。26は器壁も薄く、胎土には白色砂粒が多く混じる。27はRの撚り糸が施される。29～34はF-2グリッドから出土。29・30は隆帯と爪形、31は爪形が施される。32はLの撚り糸が施される。33は底部。34は磨製石斧の刃先である。35～37、第56図1～16はF-3グリッドから出土。35・36・56-1は半肉隆線と爪形が施される。37は隆帯による区画を持つ土器で、区画内は沈線が施される。2は角押文が施される。3・4は隆帯と爪形が施される。5は波状突起の先端で、口唇部にはスリットが入る。6は地文に撚り糸(R)が施され、隆帯が貼付される。7・8は無文土器である。9は胎土に雲母片を多く含む。隆起線と沈線で装飾されるが隆起線の大半は剥落している。10・11・13は、いずれもRLの縄文が施される。12は小型深鉢の底部、14は極細い撚り糸が施される。15はスクレイパーと思われ、四辺とも使われている。16は土製品で、三角壻型土製品の一部と思われる。17～20はF-5グリッドから出土。17は爪形が、19は沈線と爪形が、20はRLの縄文が施される。18は磨製石斧で、基部と刃部を欠く。21～24はG-3グリッドから出土。21は無文、22はRLの縄文が施される。23は打製石斧で基部を欠く。24は石皿の破片である。25～30は表面採集の資料である。25はRLの縄文を施された隆帯の区画内に沈線及び円文、爪形等で文様が描かれる。鳥か爬虫類の頭部のようなものである。26は刻みを持つ隆帯と沈線、27は沈線、28は爪形が施された隆起線とRLの縄文で施文される。29は胎土に雲母を含む土器で、並行沈線が施される。30は比較的小型の深鉢で、RLの縄文が施される。31は打製石斧である。重さは175gである。

第56図 グリッド出土遺物(5)



2 古墳時代

(1) 方形周溝墓

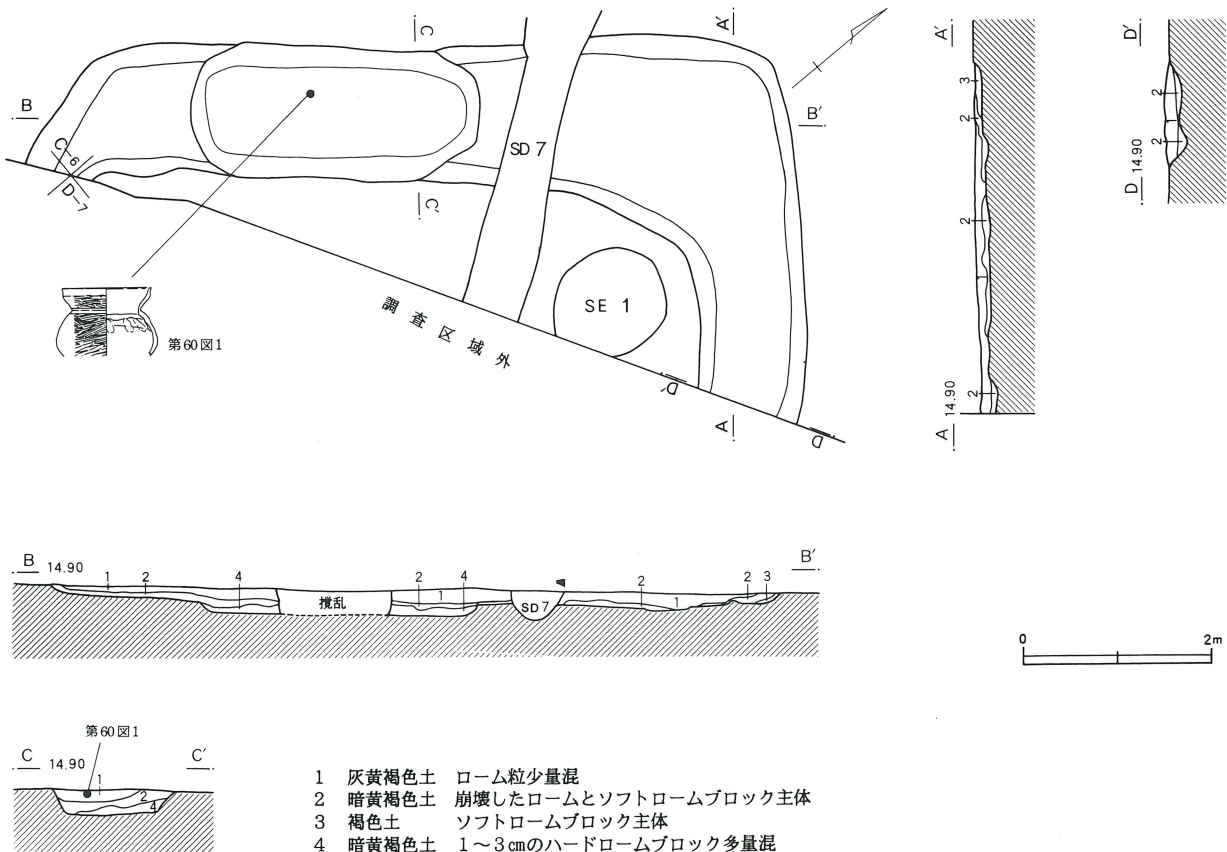
第1号方形周溝墓 (第57図 図版16)

D-6グリッドに位置する。北西辺の周溝が第39号・第40号土壙を切り込み、第7号溝と第1号井戸に方台部を切られていた。

北西辺と北・西両コーナーおよび北東辺の一部を検出したが、大部分は南東側の調査区外に存在する。併存する第2号方形周溝墓・第3号方形周溝墓の形態を加味すると、周溝は全周すると考えられるが、西コーナーでは幅が減少し浅くなる。方台部の規模は北西辺の長さで6.5mあり、他の2基の方形周溝墓と同じくこれと直交する軸を長軸とすると、長軸方位はN-48°-Wである。周溝の規模は北西辺で幅1.4m、深さ16cm、北東辺で幅1.1m、深さ14cmと北西辺の方が幅広くわずかに深い。

溝中土壙は北西辺の中央寄りて1基検出した。長径3.1mで周溝底面からの深さ(以下「深さ」)12cmであ

第57図 1号方形周溝墓



る。土層観察の結果、この土壙への明確な被覆土や周溝埋土への掘り込みは認められなかったが、最下層のロームブロックを多量に含む第4層は溝中土壙部分にのみ存在する土層である。

遺物の出土は溝中土壙上部に限られ、1の鉢の破片が散乱した状態で出土した以外には他の個体は全く検出されなかった。この土器は溝中土壙の埋没が進んだ第2層上面からの出土だったが、土壙中からの他の遺物の出土はなかった。

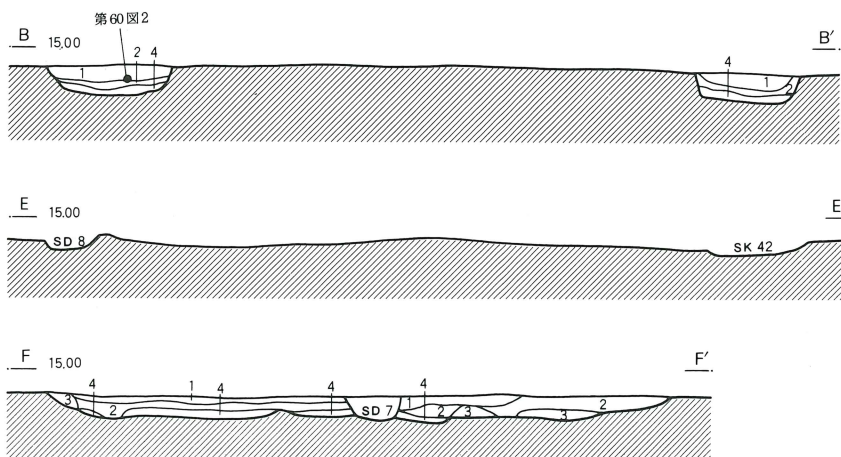
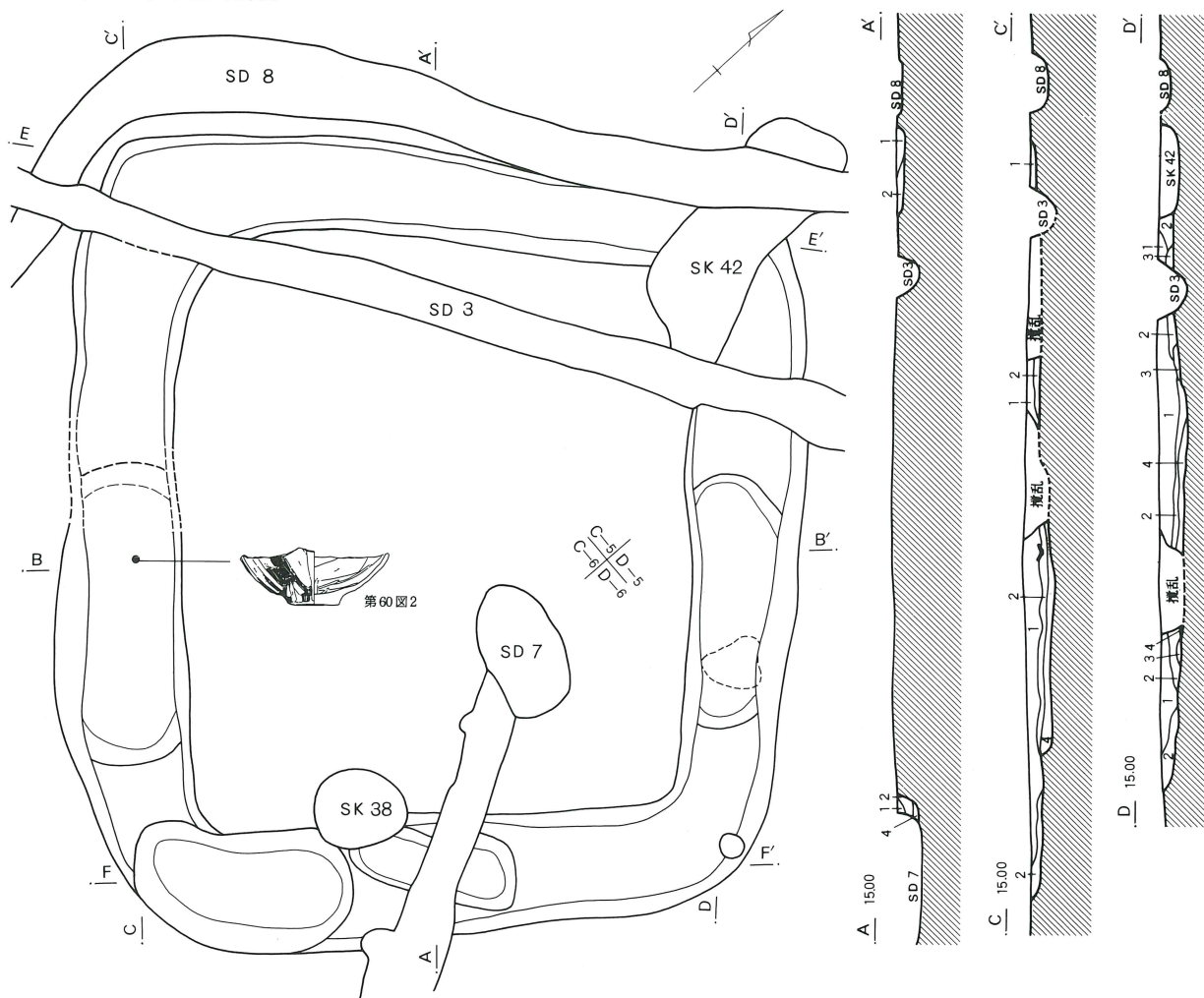
1の受け口状口縁部は北陸系統と考えられる。

第2号方形周溝墓 (第58・60図 図版16・37)

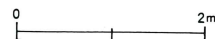
C-6グリッドに位置する。第3号住居跡と第42号土壙を切り込み、第38号溝と第3号溝・第7号溝に切られていた。

方台部の平面プランは南西辺を下辺とする台形を呈し、周溝は全周していた。方台部の規模は長軸長6.3m、短軸長5.5mで、長軸方位はN-52°-Wである。

第58図 2号方形周溝墓



- 1 灰黄褐色土 ローム粒少量混
- 2 暗黄褐色土 崩壊したロームとソフトロームブロック主体
- 3 褐色土 ソフトロームブロック主体
- 4 暗黄褐色土 ハードロームブロック (径1~3cm) 多量混

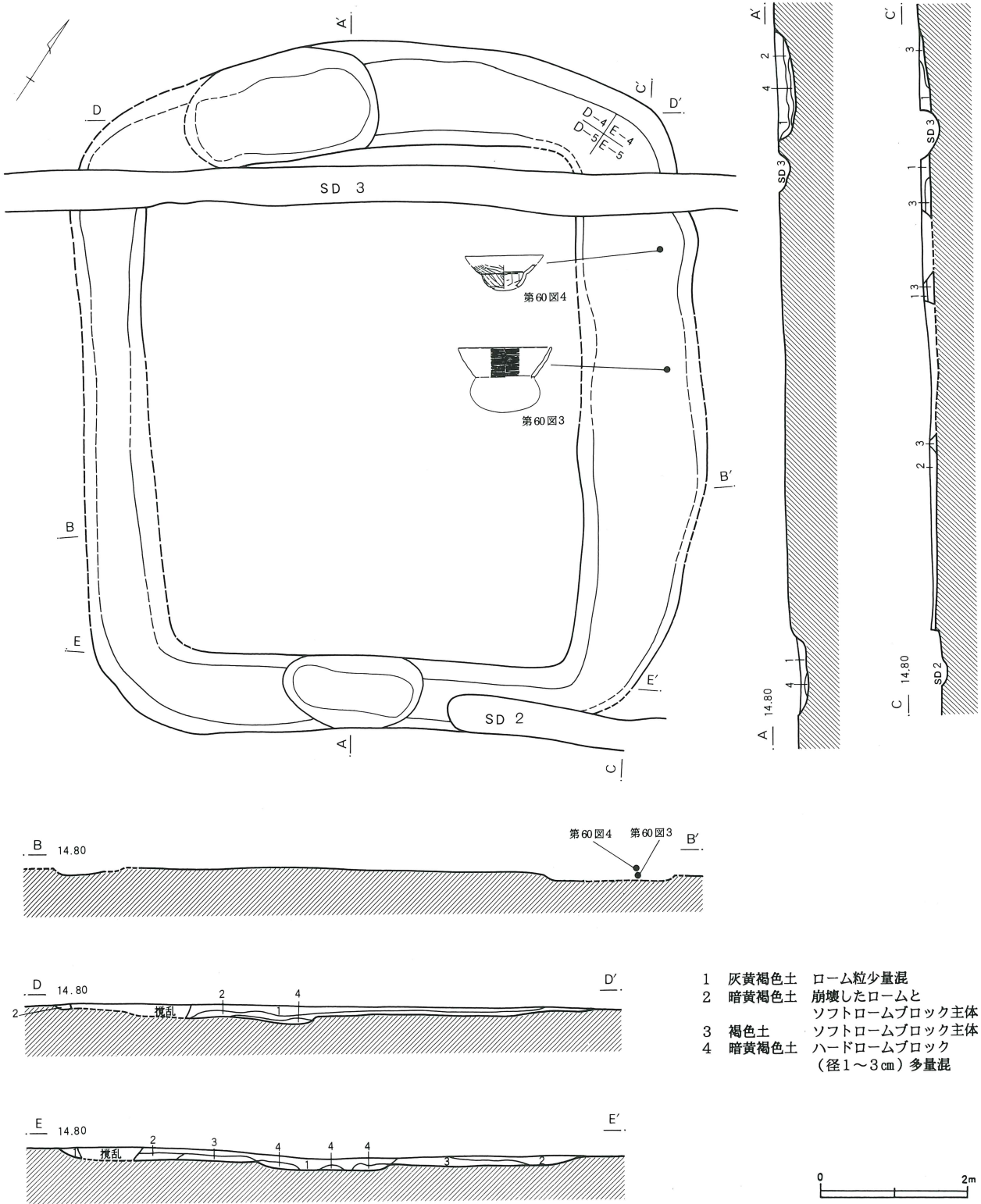


埋葬主体部は残存していなかった。周溝の規模は北西辺以外の3辺で幅1.2m、深さ15~20cmとほぼ均等だが、北西辺のみは幅0.9m、深さ10cmと狭く浅い。

溝中土壌は北西辺以外の3辺で4基検出した。北東

辺のものは長径2.7m、深さ8cmである。南東辺には2基存在するが、中央部のもので長径1.9m、深さ8cm、南コーナー寄りのもので長径2.4m、深さ8cmである。南西辺のものは北西端部を攪乱によって破壊されてい

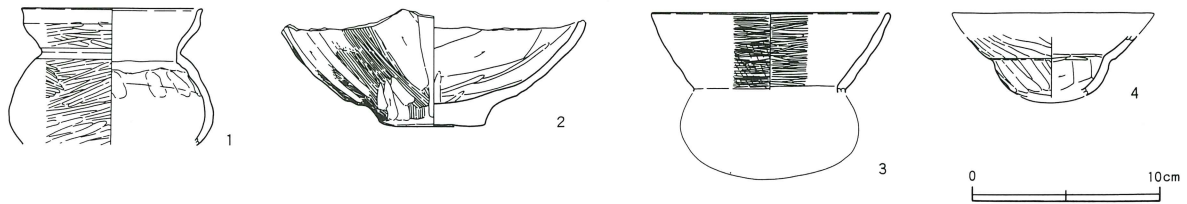
第59図 3号方形周溝墓



るが、長径は推定で約3.2m、深さ14cmである。土層観察の結果、いずれの土層とも明確な被覆土や周溝埋土への掘り込みは認められなかったが、各土層の最下層にはロームブロックを多量に含む第4層が存在した。

遺物は南西辺の溝中土層上部、第2層上面から2の壺胴部下半が出土したのみであり、他の遺物の出土はなかった。特筆されるのは、この土器は図示部位が完存し、据え置かれた様に正立した状態で出土したこと

第60図 方形周溝墓出土遺物



方形周溝墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・その他
1	鉢	(9.6)	(7.2)		W	A	明褐色	40	第1号周溝墓No.1～6
2	壺	(16.4)	(6.2)	5.6	WW'B	A	茶褐色	100	第2号周溝墓No.2 転用鉢
3	小型丸底	(12.8)	(4.2)		WBR	A	茶褐色	15	第3号周溝墓No.5～7 内外赤彩
4	小型丸底		(3.1)		BR	A	明褐色	25	第3号周溝墓No.1

である。

2は壺の胴部下半だが、上端は水平に整えながら打ち欠かれており、鉢として転用されたと考えられる。

第3号方形周溝墓（第59・60図 図版17・37）

D-5グリッドに位置する。第2号溝・第3号溝に切られていた。

方台部の平面プランは北東辺を下辺とする台形を呈し、周溝は全周していた。ただし、南西辺の大部分は深耕による攪乱を受けていたため、わずかに残存した部分からの推定復元である。方台部の規模は長軸長6.9m、短軸長5.9mで、長軸方位はN-36°-Wである。埋葬主体部は残存していなかった。周溝の規模は北西辺で幅1.5m、深さ8cm、北東辺で幅1.9m、深さ12cm、南東辺で幅1.0m、深さ16cm、南西辺で幅1.0m、深さ8cmである。

溝中土壌は北西辺と南東辺の中央寄りて1基ずつ検出した。北西辺のものは南西端を攪乱で破壊されていたが推定長径2.8m、深さ16cmである。南東辺のものは長径1.9m、深さ16cmである。土層観察の結果、いずれの土壌とも明確な被覆土や周溝埋土への掘り込みは認められなかったが、各土壌の最下層にはロームブロックを多量に含む第4層が存在した。

遺物は北東辺の周溝北コーナー寄りの第2層上面から集中して出土し、他の場所からの出土はなかった。土器片が散乱した状態であったが、3・4以外にもう

1個体の赤彩された土器小片が認められたことから、合計3個体分の小型丸底土器片が存在したと考えられる。溝中土壌上部から土器が出土した第1号・第2号方形周溝墓とは様相が異なる。

3の小型丸底土器の口縁部は細いヘラミガキ調整後内外面赤彩されている。共伴した同一個体の体部小片から、体部上半まで赤彩されていたことが明らかである。4も小型丸底土器だが、3と比較すると形態だけでなく器面調整や色調も異なる。

(2) グリッド出土の遺物

方形周溝墓以外から出土した古墳時代の遺物としては、第52図6の土師器と第61図の石製模造品があげられる。土師器は底部のみの出土である。器壁も厚くぼてつとしている。胎土には砂粒を多く含み、焼成はしっかりしている。色調は灰黄褐色を呈す。

第61図 石製模造品

石製模造品はD-5グリッドから出土している。大きさは直径約4.7cm、厚さ約0.75cmになる。滑石製である。鏡の模造品であろう。単独の出土である。

